

言も發する勇氣はあるまい。何故かと云へば、特質附けられた中心地の大多數は、普通「家内」工業に屬するからである。粗工業の過渡的性質は、此處にも言ひ現されてゐる。蓋し粗工業が住民の精神的容貌を改造し始めた時に、たゞ大機械精工業のみは、その改造を終つてゐるたからである。

五 粗工業の經濟的組織

吾人の瞥見した凡ての營業は、悉く粗工業タイプに組織されてゐる上に、これ等の營業に於ける大多數の勞働者も、非獨立的で、資本に從屬してゐて、たゞ勞働賃銀を貰ふだけで、未製原料品をもまた既製生産品をも自由にすることが出来ない。本來、これ等の「營業」に於ける大多數の勞働者は、雇傭勞働者である。尤もこの點は、工場生産に獨特な完成と見事な美とを決して粗工業に齎すものではない。工業資本を有する粗工業に於ては、最も多様の方法で商業資本が編み出される。職工が資本家の支配を受けてゐると云ふことは、幾多の形態と蔭影とを作る。先づ他人の職場に雇はれて働くことに始まり、更に次いで「經營主」の爲に家内で働くこととな

り、結局原料品を買入れるにも、生産品を販賣するにも資本家の支配を受けることとなる。幾多の從屬的勞働者と並んで、常に多少著しい數の半獨立生産者が、依然として粗工業内に保存される。

然しながらこの從屬形態の亂雜は、粗工業では、勞力と資本との代表者間の分裂が、十分に現れるものであると云ふ粗工業の根本的特質を蔽ひ隠すに過ぎない。農民解放の時迄に我國粗工業の最大中心地に於けるこの分裂は、幾代かの繼承に依つて既に鞏固になつてゐた。これ迄瞥見して來た凡ての「營業」に於て、吾人は有産階級の支配を受ける勞働以外に何等の生活資力をも有たない多數の住民を見る。また他方には、少數の裕福な工業家を見る。彼等は（種々な形に於て）その地一帯の殆んど全生産をその手に握つてゐるのである。この根本的事實は、我國の粗工業には資本主義的性質が、前階程と異つて、極めて明白に現れてゐることを語るものである。其處にも資本に對する從屬と雇傭勞働とがあつた。然しそれ等はまだ固い形態に鑄込まれてゐなかつた。多數の工業家と多數の人民とは、生産に参加する人々の種々なる集團の間に於ける分裂をまだ網羅しなかつたし、またその分裂を惹き起しもしなかつた。生産自體もま

だ前階程に於て小範圍を保つてゐる——經營主と労働者間の差異は、比較的小さい——大資本家(常に粗工業の頭に立つてゐる)は殆んどない——また部分品製作労働者もない。これ等の労働者は、一つの専門に縛り付けられ、その結果更にこれ等の部分品製作々業を一個の生産機關に統一する資本に縛り付けられてゐるのである。

或る昔の一著述家は、吾人が上述した資料のこの特質を明瞭に肯定する次の如き證據を擧げてゐる。「キムラ村に於ては、他の所謂裕福なロシアの村、例へばバヴロツォ村に於けるが如く、住民の半數は、たゞ施物だけで生活してゐる乞食である……若し職人が病氣に罹り、而もそれが獨身者であつたら、次の週間には一片の麵麩さへ得ることは出来ない。」

斯様に既に六十年代に於て、我粗工業の根本は、即ち幾多の『有名な』村落の『富』と大多數の『家内工業家』の完全なプロレタリア化との間の對立は、完全に暴露されたのである。

この根本に關連して次の如き事情がある。即ち粗工業の最も典型的な職人等は、(即ち全然土地と絶縁してふか、或は殆んど絶縁するかした職人等は)資本主義の前の階程より寧ろ、次の階程に引付けられ、農民より寧ろ大機械精工工業に於ける職工の方へ接近する。

家内工業家等の文化的水準に就いて引證した資料は、明瞭にこの事を證明してゐる。多數の小作業場と小經營主との保存、土地との關係の保存、それから極めて廣い範圍に於ける家内労働の發達——これ等凡てから生れて來るものは、粗工業に於ける極めて多くの『家内工業家等』がなほ農民社會に、小經營主への轉化に、將來でなく過去に(註、恰も彼等の理想家なる民衆主義者の如く。)誘引されることと、(極端な労働の緊張を以て、節約と熟練とを以て)獨立した經營主に轉化することの可能に就いて凡ゆる妄想を懷き、斯くして自己僞瞞に陥ることとである。(註。獨立經營の單一の主人公に取つて、(ヴ・コロレンコの『バヴロフスキイ概観』に於けるドゥルーヂキンの如き人物に取つて)斯の如き轉化は、まだ粗工業時代に可能であるが、勿論多數の無産的な部分品製作労働者に取つて不可能である。)これ等の小ブルジョアの妄想に對し、ウラヂーミル縣の『家内工業的營業』の研究家は、次の如き極めて正當な批評を加へてゐる。

『小工業に對する大工業の最後の勝利、即ち多數の仕事場に散在してゐる労働職工等を一つの絹織物工場の壁の中に集めて了ふことは、たゞ時の問題である。この勝利が速く來れば來るだ

け、織工に取つて有利である。

絹織物工業の現代的組織の特色は、経済的カテゴリーの不確實並に不確定と、小生産並に農業に對する大生産の争闘とである。この争闘は、小経営主や織工を煽動の波亂の中に巻き込み、彼等に何ものをも與へず、寧ろ彼等を農業から引離し、彼等に債務を負はせ、沈滞時期に於て彼等に全責任を投げかけるものである。生産の集中は、織工の労働賃銀を低下しないが、その代り労働者を誘惑したり、彼等を結束させたり、労働者の一年間の収入に不相應な前貸金をして彼等を引き寄せたりするのを餘計なこととする。工場主等に相互的競争が弱くなるにつれて、職工に債務を負はせる爲に多額の金を消費すると云ふやうな興味を失ふのみならず、大生産は、工場主と労働職工との利害關係を、即ち一方の富裕と他方の貧困を明白に兩立させる。それで織工の心中に工場主にならうと云ふやうな希望が起る筈はない。

小生産は大生産以上のものを織工に與へないばかりか、大生産の有つてゐるやうな堅實な性質をも有つてゐない。従つて更に深刻に労働者を墮落させる。織工なる家内工業家の爲には、一種の虚偽の背景が描かれてゐる。織工は、自分自身の織機を支配することの許可の出る時期を

待つてゐる。織工はこの理想を實現する爲に凡ゆる努力をなし、負債をし、竊盜をし、虚偽を言ふ。そしてその仲間を不幸の場合の友と見ずに、寧ろこれを敵と見、遠い將來に夢見てゐる詰らぬ織機に就いての競争者と見る。小経営主は、自分の経済的貧窮を覺らない。彼は買占人や工場主に取りつて、原料品を買入れたり、工場製品を販賣したりする場處と條件とをその仲間（小経営主）に隠す。彼は自分を獨立した小経営主と想像して、大商人の手中に自由になる哀れな道具または玩具となる。

彼はまた泥濘から脱し得ず、僅かに三、四臺の織機を支配するうちに、もう経営主の境遇は苦しいものであるとか、織工が懶けたり飲酒したりして困るとか、工場主に貸金を失ふ心配のないやうに保證してやる必要があるなど、言ひ出す。小経営主——これは流行の工業的奴隸主義である。それは丁度舊時代に執事と倉庫監理人とが、農奴制度の生きた人格化であつたのと同様である。生産機具が生産者から完全に分離されず、生産者がまだ獨立經營者となり得ると思つてゐる時に、工場主と小經營者と搾取者とが、買占人と織工との間にある経済的深淵を繼ぎ合せ、低い経済的カテゴリーを支配し、利用し、高い経済的カテゴリーの利用に熱中し

てゐる時に、その時に労働職工の社會的意識は昏み、彼等の想像は虚構に依つて墮落させられる。一致共同すべき處に、競争が生ずる。その根本に於て敵視し合つてゐる各經濟團體の利害關係は、結合される。絹織物生産の現代的組織は、單なる經濟的利用に満足せず、被利用者の中にもその代理人を見出し、彼等に労働職工の意識を昏まし、その心が墮落するやうに努力させる。』(『ヴラヂーミル縣の營業』第三卷、一二四—一二六頁)

六 粗工業に於ける商業資本と工業

資本『買占人』と『工場主』

前記の資料に依つて明白である通り、吾人は資本主義發達の或る階段に於て、資本主義的大職場の外に非常に大多數の小作業場を見る。これ等の小作業場は、數の上から云ふと普通極めて優勢であるが、然しながらその生産總額の點から云ふと、全く從屬的役割を演じてゐるに過ぎない。粗工業の場合に、斯く小作業場が保存されてゐることは(吾人が既に瞥見した通り、剩へ小作業場が發達してゐることは、全く自然的な現象である。手工生産の場合、大作業場は小

作業場に對して決定的優越を有つてゐない。分業は極めて單純な部分品製作々業を作ると同時に、小職場の出現を容易ならしめる。従つて資本主義的粗工業に取つて典型的なものとなるのは、結局餘り多くない比較的大きい作業場と非常に多くの小作業場とである。

では、大作業場と小作業場との間に、何等かの關係があるのだらうか？ この兩者の間には極めて密接な關係がある。大作業場はこれ等の小作業場から生長して來たものである。小作業場は時として粗工業の外部的部分となることがある。非常に多くの場合、大作業場と小作業場との間の連絡となるものは、自から大經營主に從屬し、自分に主經營主を從屬せしめてゐる商業資本である。これ等は今まで研究して來た資料に依つて見ても疑ふ餘地はない。大職場の經營主は、廣い範圍に於て原料品の購入と製品の販賣とを行はねばならぬ。經營主が商賣に用ふる流通資本が多ければ多いだけ、商品の購入販賣や商品の選擇や保存やその他に要する費用が(生産品一個に對して)少なくなる。其處で材料を小經營者に小賣轉賣することや、粗工業家が小經營者の製品を買占め、これを自己の製品として轉賣することが行はれる。(註。前記の實例に更にも一つ實例を附け加へて置く。モスクワ縣の家具製造業に於て(一八七六年の調査。イ

サーエフ氏の著書から)最大の工業家は、ゼーニン一家である。彼等は高價な家具製造を行ひ、『技術の優れた幾多の職人を養成した。』一八四五年に彼等はその製材場を設置した。(一八九
45年には一萬二千留、労働者一四人、蒸汽動力一)この家具製造業に於ては、作業場七〇八、勞
働者一、九七九人、その中八四六人、即ち四二・七%は雇傭労働者、生産額四十五萬九千留を
算した。六十年代の初めからゼーニン一家はニーヂニイ・ノヴゴードに於て材料の卸買込み
に轉じた。薄板百枚を十三留宛で幾車輛か買込み、これを十八留乃至二十留宛で小家内工業家
等に賣付けた。七つの村落(一一六人の労働職人を有つてゐる。)では、職人の多くは、家具をゼ
ーニンに賣つた。ゼーニンはモスクワに家具と被木材との倉庫を有ち、四萬留迄の流通資本を
有つてゐる。(一八七四年設立)獨身労働者が二十人ばかりゼーニン一家の爲に働いてゐる。若
しこれ等の原料品販賣作業と製品購入作業とが、(よくある如く)經濟的隸屬及び高利的金貸と
結合するならば、若し小經營主が負債として材料を買取り、製品を貸し付けるならば、大粗工
業家はその資本によつて、雇傭労働者からは決して搾取し得ないやうな高率の利益を得ること
になる。

(分業は小經營者と大經營者との斯の如き支配關係の發達に新らしい衝動を興へる。即ち大經
營者は材料を各家庭に分配して、これを仕上げさせるか(それとも或る部分品製作々業を行は
せるか)或は『家内工業家等』から生産品の一部分を、即ち生産品の特別部類を買占めるかす
る。一口に言ふと、商業資本と工業資本との間の最も密接な斷つべからざる關係は、粗工業の
最も獨自的な特質の一つである。『買占人』は此處では殆んで常に粗工業家と(正しからざる流
行的用語法によると『工場主』と。流行の不正な用語法は、多小大きい職場を残らず『工場』の中
に入れて了ふ。)混同されてゐる。従つて非常に多くの場合に於て、大作業場の生産量に關する
資料は、我國の『家内工業的營業』に於ける大作業場の實際的意義に就いて、まだ何等の想念
をも與へるものではない。(註。本文中に書いたことを左に例證する。オルロフ縣トゥルブチェフ
スキイ市外地帯ネギーノ村にバタ製造所がある。労働者は八人で、生産額は二千留である。
(一八九〇年度)『工場案内』この小バタ製造所は、地方的なバタ製造に於ける資本の役割が、
極めて微弱であることを示してゐるかのやうである。然しながら工業資本の發達の微弱なこと
は、商業資本と高利貸的資本との偉大な發達を意味することになる。或る村落に關し自治會統

計集中に斯んなことが書いてある。『一八六戸中一六〇戸は、全然土地の製造所々有者の奴隷となつてゐる。土地の製造所々有者は、彼等凡ての爲に年貢を支拂ひ、凡ての必要なものを彼等に貸付け、(これも長年の間に)その債務の支拂として安い値段で彼等から麻を買取る。』と。オ
ルロフ縣の多くの農民は、斯の如き經濟的奴隷状態にある。かうした事情の下に於て、工業資本の發達が微弱だと云つて善ぶことが出来るであらうか? 蓋し斯の如き作業場の經營者等は自分の作業場に於ける労働者の勞力ばかりでなく、多數の家庭労働者の勞力や、または剩へ事實上多數の似而非獨立的小經營者の勞力さへも支配してゐるからである。而して彼等は小經營者に對すると『買占人』となる。(註。それ故に若し大粗工業家等を瞥見から分離し、これは家内工業ではなく、工場制工業である!)『買占人等』を『本來全く餘分な現象であり、生産品販賣の不成立に依つてのみ喚起された現象である』(ヴェ・ヴェ氏の『家内工業概観』一五〇頁)と見るならば、斯の如き『家内工業的營業』の經濟的組織が、如何に描き出されるかを想像することが出来る。(斯くロシアの粗工業に關する資料を基礎とすれば、商業資本の發達程度は、工業資本の發達程度に反比例するものであると云ふ『資本論』の著者の決定した法則は、特

に浮刻のやうに表現されてゐる。而も實際に吾人は第二節に書いた凡ての營業の特質を次の如く言ひ現はすことが出来る。即ちこれ等の營業に於て大職場が少ないだけ、それだけ激しく『買占』は發達し、またその反對になる。變化するのは、その何れの場合に於ても、支配勢力となる資本の形態のみである。その資本は、『獨立した』家内工業家等を、雇傭労働者の境遇よりも更に遙かに、比較にならぬ程悲惨な境遇に置くものである。

民衆主義的經濟學は、一面からは大小作業場間の關係を無視し、他面からは商業資本と工業資本との間の關係を無視し、若くは抹殺してゐるが、民衆主義的經濟學の根本的誤謬は、此處にあるのである。『バヴロフスキイ地域の工場主は、複雑化された一種の買占人に過ぎない』と、グリゴリエフ氏は言つてゐる。(第一集、一一九頁)これは獨りバヴロフ村に對してばかりでなく、資本主義的粗工業のタイプに依つて組織された多くの營業に對しても當然言はるべきことである。がまた粗工業に於ける買占人は、複雑化された一種の『工場主』であると云ふ反對の斷案も至當の言である。のみならず、粗工業に於ける買占人と農民の小營業に於ける買占人との根本的區別の一は、此處にある。然しながら『買占人』と『工場主』との間に關係があると云

ふこの事實の中に、(グリゴリエフ氏やその他の多くの民衆主義者等の考へる如く) 小工業に有利な一種の論據を見ると云ふことは、先入觀念の爲に事實を強いて曲けると同時に、全然勝手な結論を下すことを意味するものである。商業資本が工業資本に結合することは、直接生産者の境遇を雇傭労働者の境遇に比較して、著しく悪化し、その労働時間を延長し、その労働賃銀を低下し、経済的並に文化的發達を阻止するもので、この點は、吾人が瞥見して來た通り、幾多の資料がこれを證明してゐる。

七 粗工業の附帶物としての資本主義的家庭労働

資本主義的家庭労働は——即ち企業家から供給された材料を契約支拂に依り家庭に於て加工することは——前章に於ても指摘した通り、農民の小營業にも見られる。後にも判る通り、この資本主義的家庭労働は、工場にも、即ち大機械精工工業にも(廣い範圍に於て)見られる。斯く資本主義的家庭労働は、工業上に於ける資本主義發達の全階程に見られるが、中でも粗工業の

一大特質をなしてゐる。農民の小營業や大機械精工工業は、家庭労働がなくとも餘り困らない。所が資本主義發達の粗工業時代を——この時代に特有は労働職工と土地との關係がまだ保存され、大作業場の周圍には澤山の小作業場がある——労働の家庭分配を抜きにして想像することは困難であり、殆んど不可能である。(註。周知の如く、西歐に於ても資本主義の粗工業時代には、特に廣い範圍に於て家庭労働が、例へば織物などに於て發達してゐた。面白いことには、マルクスは粗工業の古典的實例として時計製造業を紹介し、同時に時計の數字板と發條と箱とが、粗工業そのもので製作されることが稀であることや、一般に部分品製作労働者が屢々家庭で働いてゐることなどを指摘してゐる。『資本論』) 實際資本主義的粗工業タイプに依つて組織された營業に於て、労働の家庭分配が、特に廣い範圍に於て實行されてゐると云ふことは、吾人の瞥見した通り、ロシアの資料も證明してゐる。従つて吾人は本章に於て、資本主義的家庭労働の特質を研究することを極めて當然のことと思ふ。然し後に引證する實例中の或ものは、専門に粗工業にのみ適用さるべきものではない。

家庭労働の場合には、資本家と作業者との間の仲介者が、非常に多いと云ふことを先づ指摘

する。大企業家は、時としては種々なる村々に散在してゐる數百數千の労働者に自分で材料を分配することが出来ない。仲介者の出現が必要である。(或る場合には仲介者制度の出現さへ必要ことがある。) 仲介者等は材料を卸的に引受けて、小賣的に分配する。つまり本當のスウェーデン・システム(譯者註。安賃銀自宅使役制。)である。膏血搾取制度である。最も猛烈な利用制度である。即ち作業者に接近してゐる「職場所有者」(若くは「仕事場所所有者若くはレース製造業に於ける『女商人』等)は、作業者の特に困窮した場合に巧みに乗じて、大作業場に於ては考へられないやうな、そして一種の監理監督の可能を絶対に斥けるやうな利用手段を探すのである。

スウェーデン・システムの外に、なほその形式の一つと見てもいゝトラック・システム(譯者註。物品賃銀制)がある。食糧品で賃銀の支拂をするのである。この制度は、工場に於て採用され、家内工業的營業に於て、特に労働の家庭分配の際に依然として勢力を有してゐる。この傳播された現象の實例は、前記の各營業を紹介した際に引證されてゐる。

更に資本主義的家庭労働は、必ず非常な非衛生的労働設備に結び付けられてゐる。作業者が甚だしく貧乏なこと、何等かの規則で労働條件を調節することの全く不可能なこと、住所と労働場とが同一であること——かうした事情は、家庭で仕事をする労働者の寓居を衛生的醜體と職業的疾疇との火竈と化する。大作業場に於て、斯の如き現象の撲滅はまだ不可能であるが、家庭労働はこの點に於て、最も「自由な」資本主義的利用形態である。

労働時間が無闇に長いことも、また資本家及び一般に小營業の爲に行はれる家庭労働の必然的性質の一である。「工場」に於て、または「家内工業家」の所に於て、労働時間の比較的長いと云ふことの或る實例は、既に前に擧げた通りである。

家庭労働の場合に殆んど常に見られる現象は、婦人や極めて年少の子供を生産に誘引することである。これを實證する爲にモスクワ縣に於ける婦人營業の記録から採つた或る資料を引用することとする。紙の捲返しには、一萬四人の婦人が従事してゐる。子供は五、六歳から働き始める(！) 一日の労働賃銀は、一〇哥で、一年分でも一七留である。婦人營業に於ける労働時間は、一般に一八時間に達する。編物業では、六歳から働き始める。一日の労働賃銀は一〇哥で、一年分は二三留である。婦人營業の總計は、左の如くである。即ち労働婦人は三七、五一四

人で、五、六歳から働き始める。(一九の營業中六までは。なほこの六つの營業に従事する労働婦人は三二一、四〇〇人である。)平均労働賃銀の一日分は一三哥で、一年分は二六留二〇哥である。(註。婦人の營業を書いたゴルブノワ女史は、誤つて一八哥と三七留七七營と算へてゐる。その根據は、各營業に關する平均資料のみで、各營業に於ける労働婦人の數が異つてゐることには留意してゐない。)

資本主義的家庭労働は、作業者の要求水準を低下する。資本主義的家庭労働の最も有害な方面の一は、この點にある。企業家は住民の生活水準が特に低く、土地との關係がある爲に無報酬で働き得るやうな遍鄙な場處に於て、自分の爲に労働者を募集する可能を得る。例へば、田舎に於ける靴下製作場經營者の説明する所に據れば、モスクワでは家賃が高く、女工には『白麵麩を食はせなければならぬ……所が我々の田舎では、女工等は自分の百姓小舎の中で働き、黒麵麩を食つてゐる……だからモスクワは到底我々の敵ではない。』(註。『モスクワ縣統計報告集』第七卷第二部一〇四頁)紙捲返業に於て労働賃銀が非常に安い理由は、農民の女房や娘などに取つて、これがたゞ補助的賃銀に過ぎないと云ふ點にある。『斯くしてこの現存の生産制度

は、單に生産に依る労働のみで生活する人間に取つて、労働賃銀を不可能な程度迄引下げ、單に工場労働のみで生活する人間に取つて、労働賃銀を必要の最少限度以下に低下せしめ、若くは必要水準の向上を阻止する。そしてその何れもは、極端に非常規的な條件を作る。(註。同上、二八五頁)『工場は安價な職工を求める。工場は、安價な職工を工場中心から遠いその故郷の村に於て見出す……労働賃銀が、工業中心から周圍へ擴がる程低下して行くことは、確かに疑ふ餘地なき事實である。』とハリゾメーノフ氏は言つてゐる。(註。『ウラヂーミル縣の營業』第三卷六三頁。同上二五〇頁に比較)それ故に企業家等が、住民を人爲的に田舎に喰ひ止めて置くやうな事情に乗ずることは、極めて巧妙である。

家庭労働者の分裂は、この制度の可成り有害な方面である。仕事のこの方面の浮刻的特色紹介は、次の如く買占人その者から發する。即ち『兩者の(トッヴェーリの鍛冶職から釘を買入れる大小買占人等の)商賣は、釘を買集める際に一部分は金錢で支拂をなし、一部分は鐵で支拂をすること、全然勝手に振舞ふ爲に常に自分の家に鍛冶職を抱へて置くことと云ふやうな同一の原則の上に築かれてゐる。』(註。『家内工業の調査及び研究』第一卷二二八頁。同上二八一に

比較。工場主イロドフは家庭に於ける手職人に仕事を分け與へた方が有利であると云つてゐる。(この言葉には、我國「家内工業」の「生命」に對する正直な解釋が含まれてゐる！)

家庭労働者の分裂と仲介者の夥多とは、自然に經濟的隷屬と凡ゆる個人的支配形式を盛んにし、遍鄙の田舎に「家長的」關係を伴ふのが普通である。經營者に對する労働者の負債は、「一般に」家内工業的「營業」に於てもまた特に家庭労働の場合に於ても最も廣く認められる現象である。(註。労働者が經營者に借金をしてゐる實例は、モスクワ縣の刷毛製造業に於ても(「スクワ縣統計報告集」第六卷第一部三二頁)櫛製造業に於ても(同上二六一頁)玩具製造業に於ても(第六卷第二部四四頁)籠製造業及び其他の營業に於ても見られる。絹織物業に於ける織工は、常に工場主に負債をしてゐる。工場主は織工に代つて年貢を支拂ひ、一般に「土地を賃借するやうに織工を賃借するのである。」(ウラヂミール縣の營業」第三卷五一—五五)作業者は普通 Lohnsklave (譯者註。賃銀奴隸)であるのみならず、Schuldklave (譯者註。負債奴隸)でもある。田舎關係の「家長制」は、労働者を或る境遇に置くものであるが、その境遇の或る實例は、前に舉示した通りである。(註。ニゼーゴロド縣の鍛冶業に就いてかう書いてある。「勿論

此處でも労働者の勞苦を利用してゐる。然し僅かの範圍に於てである(？)のみならずそれは一般の同意により(！)一切の誤解なく、何故か家長的に行はれてゐる。」「家内工業研究委員會報告」第四卷一九九頁)。

資本主義的家庭労働の特質研究から同労働普及の條件に移る。先づこの制度と分讓地に對する農民の固着との關係を指摘する必要がある。移動の自由がないこと、土地の束縛から脱する爲に時としては金銭上の損失を忍ばねばならぬ必要があること(それは土地の爲の支拂が土地からの収入を超過する場合である。つまり分讓地を賃貸する者は、自分の方から借地者に拂ひ足すのである)。農民の土地共有團が階級的に結束すること——凡てこれ等は、資本主義的家庭労働適用の範圍を人爲的に擴大し、農民をこの厭ふべき利用形式に人爲的に結び付けるものである。斯くして陳腐な組織と徹頭徹尾階級的な土地制度とは、農業に於ても工業に於ても最も有害な影響を發揮し、技術的に陳腐な生産形式を擁護する。而してこの技術的に陳腐な生産形式は、經濟的隷屬制度と個人的支配との最大の發達並に勤勞者の最も困難な、そして最も無援孤立的な境遇に結び付けられてゐる。(註。勿論凡ての資本主義社會には、常に農村プロレタリ

アトがある。彼等は極めて不利な條件の下に家庭労働をすることに同意する。然しながら陳腐な組織は、家庭労働の適用範囲を強め、家庭労働の撲滅を困難ならしめる。コルサーク氏はまだ一八六一年に既に我國に於ける家庭労働の大なる普及と我國の土地制度との關係を示した。(一の三〇五—三〇七)

更に資本家の爲の家庭労働と農民階級の解體との間に關係があることもまた疑ひない。家庭労働の廣い普及は、二つの條件を假定する。即ち(一)その労働力を賣り、且つ安價に賣らなければならぬ農村プロレタリアートが多數現存してゐること、(二)土地の狀況を熟知し、且つ労働分配に際して代理者の役目を引受け得る裕福な農民が現存することである。商人の派遣する番頭は、必ずしもこの役目を果し得る譯ではない。(特に多小複雑な營業に於て) 況んや『その兄弟』なる土地の農民の如き『技巧的に』その役目を果し得る筈はない。(註。吾人が既に瞥見した如く、大經營者なる工業家、買占人、仕事場所所有者、職場所有者等は——同時に裕福な農民である。例へば『職場所有者は、矢張り彼の織工のやうな農民で、たゞ織工と異り餘分の小舎や馬や牝牛を有ち、或は一日二回家族擧つて茶を飲む可能を有つてゐるだけである。』とモスクワ縣組織の記録に書いてある。(『モスクワ縣統計報告集』第六卷、第二部、一四七頁) 大企業家は、若し小企業家の一軍をその配下に有つてゐなかつたら、労働の家庭分配事業の半分も實現し得ないに違ひない。小企業家は、商品を信用を以て貸し附けるか或は商品を委託するかすることが出来る。そして彼等はその小さい商業を擴張する爲に凡ゆる機會を貪るやうに捉へようとしてゐる。

最後に極めて重大なことは、資本主義によつて形造られた過剰住民説に於ける資本主義的家庭労働の意義を示すことである。ロシアの資本主義によつて労働者の『解放』されたことをヴェグ氏、エヌ氏及びその他の民衆主義者等の如く多く語つたものは、一人もない。然しながら彼等の中何人もロシアの改革以後の時代に造られ、そして現在も造られつゝある労働者の『豫備軍』の具體的形態を分解々割しようとしなかつた。民衆主義者中の何人も、家庭労働者が我國に於ける資本主義の『豫備軍』の最も大なる部分を成してゐると云つてもいゝくらゐであると云ふ些事に氣附かなかつた。(註。この民衆主義者等の誤謬は、極めて愚かしいものである。それは、彼等の中の大多數が、マルクスの説に追隨しようとするからである。マルクスは『現代の家

庭労働』の資本主義的性質を最も力強く表現し、これ等の家庭労働者が資本主義に固有した住民相対的移動の一形式を成してゐると云ふことを専門に指摘した。『資本論』二三章、特に四節。〕企業家等は労働の家庭分配の方法によつて、職場及び其他を建築することに多額の資本と多くの時間を費すことなく、生産量を所期の量まで直ちに増大する可能を有つてゐる。所が斯の如き直接の生産増大は、多く市場の事情を條件とする。即ち工業の或る一大分派の活氣附いた(例へば、鐵道敷設の)結果か、或は戦争及びその他の事情の結果かで、需用が強められた時でなければならぬ。(註。一例を擧げる。モスクワ縣に於ては、仕立業が廣まつてゐる。(自治會の統計は、縣内に於て、一八七〇年の終りに土地の仕立職人一、一二三人、出稼仕立職人四、二九一人を算へた。)のみならず仕立職人の大部分は、モスクワの商人の爲に出來合の衣服を仕立てる。仕立業の中心は、ヘルフシエフスカヤ郡ズヴェニゴール市外地帯である。(本書第五章第一附録の三六號ヘルフシエフの仕立職人に關する資料参照)一八七七年の戦争中の如き、ヘルフシエフの仕立職人の仕事は、特に好況であつた。彼等は特別請負人の注文に依り軍用天幕を造つた。職人達はこの時三臺の裁縫機械と十人の日傭女とを使つて、一日五留乃至六留の

『利益』を得た。日傭女には一日二〇哥づゝ支拂つた。『この盛んな時代シヤドリノ村(ヘルフシエフ郡内主要の村)には、各地方村落から集つて來た日傭女が、三百人以上も住んでゐたと云ふことである。』(『統計報告集』第六卷、第二部の一、二五六頁)『この頃ヘルフシエフの仕立職人等は、殊に職場の所有者等は、非常に多くの金儲けをした。従つて何もかも殆んど凡てが立派に設備されてゐた。(同上)これ等數百の日傭女は、五年間乃至十年間熱心に労働に従事すると同時に、プロレタリアートの豫備軍と共に常に活動準備をしてゐなければならない。』(従つて吾人が第二章に於て特質附けた過程の他の方面を、數百萬の農業プロレタリアートの組織を成し立てるものは、改革以後の時代に於ける資本主義的家庭労働の偉大なる發達である。『家庭經濟から、嚴密な意味で言ふと、その家族と隣村の市場の僅かな需用とを基礎として成立つてゐる自然經濟から解放された手は、何處へやつたらいいであらうか? 過剰な労働者に滿されてゐる工場と大家庭生産の迅速な擴大とは、これに明白な回答を與へる。』(『ウラヂミール縣の營業』第三卷、二〇頁。イタリック活字) 現在ロシアに於て家庭で工業的企業家等の仕事をしてゐる労働者數が、如何に多くなければならぬかと云ふことは、次の節に引用される數字によつても明

瞭であらう。

八 「家内工業」とは何か

前記二章に於て吾人は主に我國に於て「家内」工業と名付けられてゐる工業のことを述べた。で、こん度は見出のやうな質問に回答を與へることを試みて見てもいゝ。

或る統計的資料から始めよう。それは既に前に解剖した工業形態の如何なる形態が、文献に於て一般に「家内營業」の多くを形造つてゐるかと思ふことを判断する爲である。

モスクワの統計は、農民の「營業」を研究したその結論として、凡てに、そして凡ての非農業的業務に總括を與へた。土地の營業に於て(商品の製造をする)一四一、三二九人を算へた。(第七卷第三部)而もこの中には手工業者も(靴職人や硝子職人等の一部分も)木挽職人及びその他も入つてゐる。その中八萬七千人以上は、(各營業に就いての吾人の計算に依ると)家庭労働者で、彼等は資本家の仕事をしてゐる。(註。想ひ出すのは、ハリヅメーノフ氏の計算である。その計算によると、モスクワ縣に於ける四二の營業に従事してゐる一〇二、二四五人の作業中六

六%は、家庭制度の大生産が絶對の支配力を有つてゐる營業に従事してゐる。)吾人が資料を示し得た五四の營業に於ける雇傭労働者は、二九、四四六人中一七、五六六人、即ち五九、六五%である。ウラヂーミル縣に就いても吾人は斯の如き總計を得た。「ウラヂーミル縣の營業」の五部に據る。)即ち三一の營業中作業者の總數は、一八、二八六人で、その中一五、四四七人は、資本主義的家庭労働の盛んな營業に働いてゐる。(その中五、五〇四人は雇傭労働者、即ち所謂第二階程の日傭取である。)次に農村手工業者は、一五〇人(その中四五人は雇傭労働者)小商品生産者は、二、六八九人(その中五一一人は雇傭労働者)である。資本主義的事業に従つてゐる労働者の總計は、(16,447+45+511=)16,003で、即ち八七・五%である。(註。遺憾ながら吾人はヤロスラフ縣に於ける家内工業に關する最近の著作「家内工業的營業」ヤロスラフ縣自治會統計局發行。ヤロスラヴリ市。一九〇四年。)を研究する可能を有たない。「ルースキイ・ヴェードモスチ」(一八〇四年。二四八號)に於ける詳細な評論に依つて判断するに、この著作は極めて價値ある研究で、縣内の家内工業家等は、一八、〇〇〇人と算へられてゐる。(製造所工場労働者は、一九〇三年には三三、八九八人と算へられた。)營業は沈衰しつゝある。雇傭

労働者を使ふ企業は、五分の一で、雇傭労働者は、家内工業家全数の四分の一である。所が五人またはそれ以上の労働者を有つ作業場では、家内工業家總數の一五%が働いてゐる。全家内工業家の丁度半分は、經營主の材料を用ひて經營主の爲に働いてゐる。農業は衰微しつゝある。即ち馬や牝牛を有たない家内工業家等は、六分の一で、三分の一は賃借で土地を耕作し、五分の一は播種を有たない者である。家内工業家の賃銀は、一週間一留五十哥である！（第二版の註。）（コストローマ縣に依ると、『家内工業研究委員會報告』に於けるティルロ氏の表を基礎として）土地の工業家八三、六三三人、その中林業労働者（矢張り『家内工業家』……）一九、七〇一人、資本家の爲に働く家庭労働者一九、五六四人、小商品生産者の優勢な營業に於ては、約一九、九五四人、農村手工業者約一四、四一四人（註。凡てこれ等の數字は、概算である。材料とした書物は正確な資料を報じてゐない。農村手工業者の中には、製粉業者や鍛冶職なども入つてゐる。）と算へられてゐる。ヴァーツカ縣の九市外地帯に依ると、（同じく『家内工業研究委員會報告』に據る。）土地の工業家は六〇、〇一九人で、その中製粉業者とバター製造業者とが九、六七二人、純粹の手工業者のタイプが（織物染色）二、〇三二人、一面手工業者であると同時に獨立

労働の非常に勝つた商品生産者一四、九二八人、一部分資本に従屬した營業に於て一四、四二一人、完全に資本に従屬した營業に於て四、〇八八人を算する。吾人は爾餘の諸縣に就いて『家内工業研究委員會報告』の資料に従つて、多少詳細な資料によりその組織の判明してゐる營業の表を造つた。それに依ると、營業は九七、作業者は一〇七、九五七人、生産額は二千百十五萬一千留となる。その中雇傭労働と資本主義的家庭労働との優勢な産業に於ては、労働者七〇二〇四人。（生産額一千八百六十二萬一千留）雇傭労働者と資本家の爲に家庭で働く労働者との少ない營業に於ては、労働者二六、九三五人、（生産額百七十萬六千留）最後に獨立労働が殆んど完全に優勢である營業に於ては、労働者一〇、八一八人（生産額八十二萬四千留）である。ニゼゴロード縣のゴルバトフとセミョーノフとの兩市外地帯に於ける七つの營業に關する自治會の統計的材料を資料とすると、家内工業家は一六、三〇三人で、その中四、六一四人は市場の爲に一八、五二〇人は『經營主の爲に』働いてゐる。雇傭作業者は三、一五九人を算する。即ち資本主義的に使役されてゐる労働者は、一一、六八九人となる譯である。ヘルミの家内工業記録の資料に依ると、一八九四年乃至一八九五年の間に於て、家内工業家二萬六千人中六千五百人（二

五%)は雇傭労働者で、五千二百人(二〇%)は買占人の爲に働く者で、結局四五%は資本主義的に使役されてゐる労働者である。(註。「人口調査書」一八一—一八二頁参照。此處では手工業者(二五%)も「家内工業家」中に加へられてゐる。手工業者を除くと、雇傭労働者は二九・三%、買占人の爲に働く者は二九・五%(二二二頁)で、結局資本主義的に使役されてゐる労働者は、五八・八%となる。)

これ等の資料は如何に断片的であつても、(吾人は他の資料を有たなかつた。)矢張り全體的に完全に「家内工業家」の中に資本主義的に使役されてゐる多數の労働者が入つてゐることを明示してゐる。例へば、資本家の爲に家庭で働く者は、(前記の資料に依ると)二十萬人以上を算する。これは五〇乃至六〇の市外地帯に依るもので、その凡てが幾分完全に研究されてゐる譯ではない。ロシア全體では、斯の如き労働者は、多分二百萬人に達する筈である。(註。例へば菓子製造業に於て、資本主義的家庭労働は、特に發達してゐるが、この精工業も迅速に發達しつつある。『既製衣類の如き第一必需品の需用は、年々増して行く。』(『財政通報』一八九七年、第五二號、ニゼゴード市の定期市概観)この生産は、八十年代から廣大な範圍に發達した。

現在モスクワだけでも既製衣類は、價格にして一千六百萬留以上生産され、労働者の數も二萬人に達してゐる。ロシア全體では、この生産は一億留に達するだらうと思はれる。(『ロシア工業の成功。専門家委員會の概観に依る。』サンクト・ペテルブルグ、一八九七年。一三六—一三七頁)サンクト・ペテルブルグに於ける一八九〇年の記録によると、菓子製造業に於て(團體一、階級一一六乃至一一八)工業家の家族をも加へて、三九、九二二人を算する。その中労働者は一萬九千人、家族を有する單獨經營者は一萬三千人である。(『サンクト・ペテルブルグ、一八九〇年の記録による』(一八九七年の記録によると、ロシアに於て衣類製造に従事する者の總數は、一、一五八、八六五人で、その家族一、六二二、五一一人、合計二、七八〇、三七六人である。第二版の註。))彼等に「家内工業家」の有する雇傭労働者を加へると——これ等の雇傭労働者數は、前記の資料により明かなる如く、我國に於て時々考へられるやうに、そんなに少ないものではない——所謂「製造所及び工場」以外に資本主義的に使役されてゐる工業労働者の二萬人と云ふ數字は、寧ろ最小限度の數字であると云ふことを、吾人は認めなければならぬ。(註。ロシアに於ける「家内工業家」の數は、四百萬人以下ではないと算へてゐる。(ハリヅメーノフ氏

の數字。アンドレーエフ氏は七百五十萬人と算へた。然し氏の見解は餘り大き過ぎる。従つて本文に引用した總計的資料は、『家内工業家』の總數の約十分の一を網羅するものである。

『家内工業とは何ぞや?』と云ふ問題に對して最後の二章に述べた資料は、次のやうに答へさせる。即ち家内工業とは、科學的研究には絶対に不適當な概念で、家庭營業や手工業を初め極めて大なる粗工業に於ける雇傭労働に至る迄の有りと凡ゆる工業形態が、普通この概念に網羅されてゐるのである。(註。「人口調査書」一七九頁) 經濟組織の多種多様のタイプを『家内工業的營業』に關する幾多の記録に於て、徹頭徹尾斯く混同することは、(註。工業形態を科學的に決定する爲に『家内工業』なる術語を保存したいと希望した結果、我國の文献に於て、純スホラスチックな議論が始まり、この『家内工業』なる術語を限定するやうになつた。或る學者は商品生産者のみを家内工業家と『解釋し』、他の學者は手工業者をも家内工業の中に加へた。或る學者は土地との關係を家内工業家の必然的特徴とし、他の學者は例外を許した。或る學者は雇傭労働を除外し、他の學者は労働者の數に制限を加へ、例へば労働者十六人迄を許した。で結局(工業の種々なる形態を研究する代りに)斯の如き議論をなすことには、何等の意義もあり

得ないことが分る。では何故『家内工業』と云ふやうな特別な術語が生きてゐるかと云ふと、それは先づ第一にロシアの社會の階級性に依つて説明される。『家内工業家』——それは低い階級の工業家である。それを後見することが出来る。それに就いて遠慮なく計畫を立てることが出来る。この場合工業の形態は、何うでもいゝのである。商人と貴族とを、(彼等は小工業家であつたけれども)『家内工業』の中に加へる場合は、極めて稀である。『家内工業的』營業——これは普通様々な農民の、たゞ農民だけの營業である。(一切の批判を抜きにし、一切の意味を抜きにした經濟主義者——民衆主義者の常套手段である。彼等はコルサークの如き著作家との比較によつて、一足大股に後退し、盛んに概念が混亂されるのに乗じて、奇怪極まる理論を造るのである。『家内工業』は、經濟上『資本主義』と同一種類のもの、また同等のものと見られ、『資本主義』に對立させられた(原文のまゝ)。資本主義と云ふのは、卒直に云へば、『工場制』工業である。エヌ——オン氏に實例を採つて見よう。諸君は『概観』の七九頁に、『營業の資本化(?)』と云ふ表題を見るであらう。(註。この『資本化』なる術語は、ヴェ・ヴェ氏やエヌ——オン氏等の愛用する所で、簡畧にする爲に新聞の論文には許されるが、經濟的研究には全然不適當である。

それは經濟的研究の全目的が、資本主義の種々なる形態と階程とその意義とその關係とその漸進的發達とを分解するにあるからである。『資本化』の意味は何うにでも取れる。一人の『小さい労働者』を雇ふことも、買占めをすることも、蒸汽動力を有する工場を有つことも資本化と云ふことが出来る。で、若しこれ等が皆一緒に積み重ねられてきたら、こん度はこれを何う解釋してよいのだらう！。それから直ちに、何の辯明も説明もなしに、『製造所及び工場に關する資料』と云ふ表題を見るであらう……諸君も見られる通の『資本主義』、『工場工業』、『製造工業』
= 政府筋の出版物に工場制工業と云ふ見出の下に入れてある所のもの、と云ふが如き、實に驚くべき單純さである。極めて深い『分解』を基礎としてさへ、資本主義的に使役されてゐる多數の労働者は、資本主義の計算から省かれて、『家内工業家』の中に入つてゐる。ロシアに於ける工業の種々なる形態問題は、斯の如き『分解』を基礎として、初めて生ずるのである。我國の『家内工業』と『工場制工業』との對立に關し、前者から後者が引離されて行くことに關し、『工場制工業』の『人爲的である』こと等に關する最も愚昧な、そして最も有害な謬見の一は、斯の如き『分解』を基礎として組み立てられるのである。これは確に謬見である。何故かと云へば、工業

の凡ゆる部門に互り『家内工業』と『工場制工業』との間の最も密接した斷ち難い關係を示す所の資料に、何人も決して手を觸れさへしなかつたからである。

この關係は一體何であつて、そしてロシアに於て小工業と大機械精工工業との中間に在る工業形態は技術と經濟と文化との如何なる特質を成してゐるものであるか、と云ふことを示すのが、本章の題目であつた。

一 工場の発展的歴史から工場管理工業の
発展の過程

工場管理工業の発展的歴史から工場管理工業の
発展の過程

第七章 大機械精工工業の發達

大機械精工工業の發達

一 工場の科學的概念と「製造所工場」

統計の意義

大機械(工場制)工業に移るに當つて先づ斷定して置かねばならぬことは、この大機械工業の科學的概念が、この術語の普通流行してゐる意義に全然一致してゐないことである。我國では政府筋の統計に於ても、また一般の文献に於ても、工場と云ふのは、多少多くの雇傭労働者を有する多少大きな工業的作業場を意味することになつてゐる。所がマルクスの學説が大機械(工場制)精工業と名づけてゐるのは、たゞ工業上に於ける資本主義の一定の、即ち高い階段のみである。この階段の根本的な、そして本質的な特徴は、生産に機械のシステムを用ふることである。(註。「資本論」一卷十三章)粗工業から工場への轉化は、完全な技術的變革を意味してゐる。而してその變革は、數世紀の間に職人が會得した手工を排除する。この技術的變革に續いて必ず起つて來るものは、生産の社會的關係の極めて急激な破壊と、生産に参加する人物の各種團體間の最後の分裂と、傳統との完全な絶縁と、資本主義の凡ゆる暗黒な方面の惡化と擴大

と、それと共に資本主義による労働の大衆的一般化とである。斯くして大機械精工業は、資本主義の最後の言葉となり、資本主義の消極的並に『積極的時期』に於ける最後の言葉となるのである。(註。„Das Kapital“ I, S. 499.)

〔従つて粗工業から工場への轉化が、資本主義發達問題に於て、特に重要な意義を有つてゐることは明瞭である。この二つの階程を混同する者は、資本主義の改造的進歩的役目を理解する可能を失ふ。〕而もこの誤謬を敢てする者は、我が經濟派—民衆派である。彼等は既に吾人の瞥見した通り、資本主義を一般に『工場制』工業と無邪氣に同一視してゐる。彼等は『資本主義の使命』に關する問題を、剩さへ資本主義の『統一的意義』に關する問題さへも製造所及び工場の統計資料の單純な研究により解決しようとして考へてゐる。所が、これ等の著述家が製造所及び工場の統計問題に於て、驚くべき無智を現した(後に吾人は詳細にそれを指摘する。)と云ふことは、もう言はぬとしても、更に遙かに深い彼等の過誤は、彼等が驚くべく平凡に、そして狹義にマルクスの學説を了解してゐると云ふ點にある。第一に、大機械精工業の發達問題をたゞ製造所及び工場の統計にのみ歸せしめると云ふことは滑稽である。これは獨り統計の問題である

ばかりでなく、或る國の工業上に於ける資本主義の發達が通過する形態と階程とに關する問題である。これ等の形態の本質とこれ等の形態の特異性とが闡明された後にのみ、適當な方法で造られた統計的資料を以てこれ等の形態の發達を説明することは、意味を有つ。若し祖國の統計的資料にのみ制限されるならば、その必然の結果として、資本主義の最も種々なる形態を混同することとなり、樹木の爲に林を見ないこととなる。第二に、資本主義の全使命を『製造所及び工場』の労働者を増加することに歸せしめると云ふことは、ミハイロフスキイ氏が示したやうな深い理論的解釋を示すことを意味する。ミハイロフスキイ氏は、人々は何故に資本主義による労働の綜合統一に就いてかうした解釋をするのであらうか、この凡ての一般化の結果は、一つの建物内に於て數百數千の労働者が挽いたり、切つたり、削つたり、鉋をかけたりますることではないかと云つて驚いた。

これからの叙述の題目は、二つある。即ち一方吾人は我國の製造所及び工場統計の狀態に關する問題と、該統計の有用であるか何うかの問題とを詳細に瞥見しよう。大部分否定的なこの仕事が必要なのは、我國の文獻に於て、この統計の數字を頻りに悪用する者があるからである。

他方吾人は改革以後の時代に於ける大機械精工業の生長を證明する資料をも研究して行かう。

二 我國の製造所工場の統計

ロシアに於ける製造所工場統計の根本的出所となつてゐるのは、工場主や製造所々所有者等が今世紀の初頭に發布された法律の要求に従つて、毎年商工局へ届け出る報告文書である。工場主が報告を届け出ることに関する法律の最も詳細な命令は、單に善良なる希望となつてゐるに過ぎない。それで製造所工場統計は、今もその古い純改革前の組織のまゝで、縣知事の調査書の單純な附帶物となつてゐるに過ぎない。『製造所と工場』の概念に就いても何等正確な定義はない。従つて縣政廳の機關は勿論市外地帯政廳の機關すらも、この術語を極めて雑多に用ひてゐる。正しい統一した調査を蒐集して、それを確める仕事を指導するやうな中央機關は全くない。様々な官廳（鑛山局、商工局、非徵稅局及びその他の官廳）の間に工業的作業場が分轄されてゐることは、更に益々混亂を甚だしからしめるものである。

吾人は第二の附録に於て、改革以後の時代に於ける我國の工場制工業に関する資料を引いて

置いた。この資料は、政府筋の出版物中に、一八六三年—一八七九年及び一八八五年乃至一八九一年度の出版物中にある。これ等の資料は、國產稅を附加せられない生産にのみ關するものである。のみならず時期が變る毎に、調査中の製造業の數も異つてゐる。（最も完全なのは、一八六四年、一八六五年、一八八五年度及びその後の幾年間の資料である。）それ故に吾人は、三四の製造業を選び出した。それ等の製造業に就いては、一八六四年—一八七九年度並に一八八五年—一八九〇年度の、即ち二二年間の調査がある。で、吾人はこれ等の資料の價値を判斷する爲に、先づ我國に於ける製造所工場統計に關する最も重要な出版物を瞥見しよう。六十年代から始める。

六十年代に於ける製造所工場統計の作製者等は、自分の作製した資料が、極めて不完全なものであることを立派に意識してゐた。彼等の一致した批評によると、勞働者數や生産額は、工場主の申告では著しく少なくなつてゐる。各縣は、製造所及び工場と名附くべきものに對する共通の定義さへ有つてゐない。何故かと云へば、多くの縣は、例へば、風力製粉所や練瓦燒小舎や工業的小作業場などを製造所と工場の中に算へ、また或る縣はこれ等をその計算から省いてゐる。

る。その結果各縣に於ける製造所工場の總數に就いての比較申告は、その意義を失ふ譯である。更にもつと嚴しい批評をしてゐるのは、ブーシェンやボークやティミリヤーエフなどである。彼等は更に家庭に於て仕事をしてゐる労働者が、工場労働者中に加へられてゐると云ふことや、或る工場主等が、工場そのものゝ中に生活してゐる労働者のみを申告したと云ふことなども指摘してゐる。ブーシェン氏は「粗工業と製造所工業との正確な政府筋の統計は、現在ないし、また將來も最初の材料を集める主要な根據が變る迄あるまい。」と言つてゐる。「製造所及び工場の性質を全然有たない多くの純手工業的及び家内工業的作業場さへ、勿論誤解によるものであらうが、多くの製造業では製造所と工場の表中に入つてゐる。」それが爲に「大藏省年報」の編輯部は「公衆に不正確な、そして明かに誇張された數字を傳へることを望まず」「印刷された資料に據つて結論を下すことさへ拒んだくらゐである。この明白な誇張の範圍に就いて正しい觀念を讀者に與へる爲に、年報の資料を一瞥しよう。この年報が有利にも他の資料の出所と異つてゐる理由は、これが一千留以上の生産額を有する工場と製造所との名簿を提供してゐる點にある。現在（一八八五年以來）生産額の少ない作業場は、工場中から省かれてゐる。『年報』に

依つてこれ等の小作業場を計算して見ると、小作業場で工場の總數中に入つてゐるのは、二、三六六で、労働者數は七、三二七人、生産額は九十八萬七千留であることが分る。年報によると七一の製造業から成る工場の總數は、六、八九一、労働者は三四二、四七三人、生産額は二十七萬六千二百一十一留である。それ故に小作業場は、作業場總數の三四・三%、労働者總數の二、一%、生産額總數の〇・三%となる。従つて斯の如き小作業場を（一作業場に對し平均労働者三人強、生産額五百留弱程度の）工場中に數へることの無謀であることも、また幾分でも完全に小作業場を登録すると云ふやうなことが、到底言ひ得られないことも分る。斯の如き作業場は、我國の統計では工場中に入つてゐるばかりでなく、時としては數百人の家内工業家等が、全く故意に、そして勝手に「工場」の形の下に結合されてゐたことさへあつた。例へば、例の「年報」はニゼゴード縣ゴルバトフ市外地帯イズブイレン郡に於ける製鋼業中に「イズブイレン郡の農民」の工場を擧示してゐる。「その工場の労働者は、九二九人、紡績車三〇八、生産額十萬四百留である。」（一四九頁）或は同市外地帯バヴロヴォ村には、「シエレメテフ伯の一時的負債農民の」工場がある。「鍛冶場一〇〇、指物臺（家庭のもの）二五〇、研車は馬力のもの三、手廻

し二〇、労働者九〇二人、生産額六、六一〇留である。』(二八一頁)斯の如き統計が、實際に就いて如何なる概念を與へるかば、想像に難くない! (註。工場主等が、その申告に於て、労働者數と生産額とを減少したことに就いて言へば、この點に於て前記の出所は、二つの興味ある實驗的確定を與へてゐる。ティミリャーゼフは政府筋の統計の爲に提出した百人以上の大工場主の申告と一八六五年の博覽會の爲に提出した彼等の申告とを比較した。そして後者の數字は前者の數字より二二%も多いことが分つた。一八六八年には、中央統計委員會は試験的にモスクワ縣とウラヂーミル縣とに於ける工場制工業の特別研究を行つた。(一八六八年には、歐露に於ける製造所工場の全労働者と製造所工場の全生産額との殆んど半ばが、この兩縣に集中されてゐた。)大藏省と中央統計委員會との調査した製造業を別々に計算すると、次の如き數字が出る。即ち大藏省の調査に依ると、工場一、七四九、労働者一八六、五二一人、生産額十三萬一千五百六十八留であるが、中央統計委員會の研究に依ると、工場一、七〇四、作業労働者一九六、三一五人、場外労働者三三、四八五人、生産額十三萬七千七百五十八留を算する。)

六十年代の製造所工場統計に關する資料の出所中特別の場處を占めてゐるのは、『陸軍統計

集』(第四部、一八七一年、ロシア、サントクト・ペテルブルグ發行)である。この『陸軍統計集』は、ロシア帝國內に於ける製造所工場は、鑛山業も國産品製造業も含む凡ての資料を提供するが、一八六六年の歐露では、工場七〇、六三一、労働者八二九、五七三人、生産額五十八萬三千三百七十七留を算し、これよりも少くもないと云つてゐる! これ等の奇怪な數字が出て來た理由は、第一に、これ等の數字の出所が大藏省の報告ではなく、中央統計委員會の特別調査であること、(のみならず、これ等の調査は、同委員會の何の出版物にも載つてゐなかつた。何人が如何にして何時これ等の調査を蒐集し、作製したか、その邊は不明である。)(註。これ等の調査は、多分單に縣知事の報告から取られたものらしい。縣知事の報告は、吾人が後に述べる如く、製造所と工場の數を常に著しく増加してゐる。)(第二の理由は、『陸軍統計集』の編纂者が、極めて小さい作業場を毫も躊躇することなく工場に屬せしめ、『陸軍統計集』三一九頁)且つ他の材料で、即ち商工局の調査や經理局の調査や砲兵隊並に海軍省の調査や更に『最も多様の出所からの調査で根本的調査を補足したことである。』(同上、二三三頁)(註。『陸軍統計集』が工場なる概念を如何に廣い範圍に適用したかと云ふことは、次の事實に依つても特に

浮刻のやうに明瞭である。即ち『陸軍統計集』は、『年報』の統計を『我國大作業場の統計と名付けてゐる。』（三一九頁、著者のイタリック活字體）吾人が既に瞥見した如く、これ等の『大作業場』中三分の一は、一千留以下の生産額を有つてゐる。製造所工場統計の現代的資料と比較する爲に『陸軍統計集』の數字を利用することは、許すべからざることである。何となれば、この使命は、既にツォーガン・バラノフスキ氏によつて果されたからである。（彼の著書『工場』三三六頁及びその他参照）吾人はその最も詳細な證明を省略する。それ故に現代の資料と比較する爲に『陸軍統計集』の資料を利用すると同時に、エヌーオン氏と（註。『概観』一五〇頁及び『ロシアの富』一八九四年、第六號）カールイシェフ氏と（註。『法律通報』一八八九年第九號及び『ロシアの國民經濟に關する材料』モスクワ、一八九八年）カブルコフ氏と（註。『農業經濟講義』モスクワ、一八九七年、一三頁）は、我國の製造所工業統計の根本的出所を全く知らないことを示し、この統計に對し極端に無批判的態度を採つた。

『陸軍統計集』の數字が完全に誤つてゐることを示したエヌーオン・ツォーガン・バラノフスキの報告が動機となつて軍事經濟協會に於て討論が起つたが、その際或る人々は假令労働者の數に誤りがあつても、その誤りは一〇乃至一五%の極めて僅かなものであると言つた。例へば、ヴェ・ヴェ氏の如きは（討論の速記録参照、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、一頁）さう言つた。ヴェ・ヴェ氏に『同意した』のは、ヴェ・ボクロフスキ氏である。彼は單に口頭の聲明で満足した。（三頁）これ等の人物と彼等の味方とは、我國の製造所工場統計の種々なる出所を批判的に討検しようとして試みさへせず、製造所工場統計の不満足なことに關し、最近製造所工場統計資料が、益々正確に（？）なつて來たかの如く一般に信じてゐた。

斯くしてエヌーオン氏とカールイシェフ氏との無智な誤謬に關する根本問題は、ベ・ベ・ストルーヴェが全く正しく言つた通り、單純に消滅した。（一一頁）それ故に吾人は、『陸軍統計集』の資料に於ける誇張を計算に入れるのを餘分のことと思はない。注意深く資料の出所を見る者は、誰しもこの誇張を容易に認めることが出来るし、また認むべきである。七一の製造業によると、一八六六年度の大藏省（『大藏省年報』一）と或る出所不明（『陸軍統計集』）の並行した資料がある。これ等の製造業によると、金屬品製造業を除いた以外、『陸軍統計集』は、歐露に於ける製造所工場労働者數を五萬人だけ増加した。更に『年報』がたゞ帝國內の總括的數字のみを

與へたその製造業に依ると、『陸軍統計集』はこれ等の數字が「露骨に誇大」されてゐる爲に製造業の詳細な研究を拒否して、更に九萬五千人の餘計な労働者を算へた。練瓦製造業によると、誇大された労働者數は、最小限度一萬人である。これを確信する爲には、『陸軍統計集』の縣別資料を比較し、また『大藏省管下の調査及び材料集』一八六六年の第四號及び一八六七年の第六號の資料をも比較する必要がある。金屬加工業に就いては、『陸軍統計集』は『年報』に比較すると労働者數を八萬六千人だけ誇張した。明かに鑛山労働者の一部分を加へてゐるのである。國産品製造業に依ると、『陸軍統計集』の誇張は、吾人が次の節に於て示す如く、約四萬人に達してゐる。誇張の總計は、二十八萬人である。これは最小限度の、そして不完全な數字である。何故かと云へば、『陸軍統計集』の資料を全製造業に就いて確める爲に吾人は材料を有たないからである。これに依つても、エヌーオン氏及びカールイシュフ氏の誤謬は大きくないと斷定する人々が、本問題に就いて如何に怪しい知識を有つてゐるかを判斷することが出来る！

一八七〇年代に於ける製造所工場統計の資料調査作製は、一八六〇年代より遙かに少なかつた。『大藏省年報』には、一八六七年乃至一八七九年に於ける四〇の製造業（國産税を賦課されな

い）に關する調査が掲載されてゐる。（八、十、十二部、第二附録參照）且つ爾餘の製造業を除外したことは、農村生活と關係を有ち、或は『手工的及び家内工業的營業』の附帶物となつてゐる製造業に關する『材料の極端な不備』から起つたものである。（第八部四八二頁並に第十部五九〇頁）一八七〇年代の最も價值ある資料の出所は、ベ・オルロフ氏の『製造所工場案内』（第一版、サンクト・ペテルブルグ、一八八一年度の調査。工場主が商工局に届け出た報告から採つたもの）である。この出版物は、二千留以上の生産額を有する凡ての作業場の名稱を算へ上げたものである。爾餘の作業場は、小作業場として、家内工業から分離すべからざるものとして、作業場名簿中に入れられてゐないが、然し『案内』の引用してゐる總計的資料中に入つてゐた。二千留の生産額を有する作業場に關する特別總計は、それ以上與へられてゐないから、

〔案内〕の一般的資料は、以前の出版物と同様、小作業場と大作業場とを混同してゐる。且つ種々なる製造業に於て及び種々なる縣に於て、小作業場の一樣ならざる數が、統計中に（勿論、全く偶然に）加へられてゐる。（註。實例は次の節に擧げる。此處では『案内』の六七九頁以下を引證しよう。これを見たら、何人も容易に本文に述べた所が正しいことを信ずるであらう。）

農村經濟に關する製造業に就いては、『案内』は『年報』の説明を反復し、(三九六頁)資料の不正確と不完全との結果、製造業の『略々近い總計さへ』(著者のイタリック活字體)決定することを拒絶してゐる。(註。『案内』の第三版(サンクト・ペテルブルグ、一八九四年)にこの説明は反復されてゐない。無意味に反復されてゐない。蓋し資料が極めて不満足なものとなつたかちである。)然しこの判断は(後に瞥見する如く全然正當なものである)斯の如くにして比較的信憑すべき資料と混同された特に信憑すべからざるこれ等の全資料を『案内』の總計中に加へることを妨げなかつた。歐露に依る『案内』の一般的資料を引用して、これ等の資料が前記の資料と異り、國産税を賦課される製造業をも網羅してゐることを述べよう。(一八八七年の『案内』第二版は、一八八四年度の調査を提供し、一八九四年の第三版は、一八九〇年の調査を提供してゐる。)

年次	製造所及び 工場の数	生産額、單 位千留	労働者の數
一八七九	二七、九八六	一、一四八、一三四	七六三、一五二
一八八四	二七、二三五	一、三三九、六〇二	八二六、七九四
一八九〇	二一、一二四	一、五〇〇、八七一	八七五、七六四

吾人はこれ等の資料の示す工場數の減少が、實際には全然なかつたと云ふことを後に指摘しよう。要するに問題は、小作業場が種々なる時代に種々なる數となつて工場數の中へ加へられるたと云ふ點にあるのである。例へば、一、〇〇〇留以上の生産額を有する作業場は、一八八四年には、一九、二七七であつたものが、一八九〇年には二一、一二四と算へられ、二千留及びそれ以上の生産額を有するものは、一八八四年には一一、五〇九で、一八九〇年には、一七、六四二であつた。

一八八九年以来商工局は、特別出版物として『ロシアの工場制工業に關する資料』を出版し始めた。(一八八五年及び其後の分)これ等の資料は、同一材料(工場主の通報)を基礎とするものばかりでなく、その材料の研究も到底十分ではない。前記六十年代の出版物に於ける資料の研究にも劣つてゐる。たゞ唯一の改善は、次の點にある。即ち一、〇〇〇留以下の生産額を有

する小作業場は、製造所及び工場数の中から除かれ、これ等の小作業場に關する調査は、個別的に示され、製造業別に區別されてゐないと云ふ點にある。(註。勿論これ等の小作業場に關する資料は、全く偶然的なものである。即ち或る諸縣に於て或る年には、數百數千の小作業場を算へてゐるのに、他の諸縣では、數十若くは數個しか算へてゐない。例へばベッサラビヤ縣に於ては一八八七年から一八九〇年迄一、四七九—二七二—二六二—一、六八四であり、ペンザ縣では一八八五年から一八九一年迄四—一五—〇—一、二二七—一、一三五—二、一四八—二、二六四と云つたやうな具合である。)勿論『工場』の斯の如き特徴は、全く十分ではない。即ち一、〇〇〇留以上の生産額を有する作業場を完全に登録することに就いては、調査資料蒐集の現代的方法が行はれてゐる場合、何事も言ふべきことはない。農村經濟に關係ある製造業に従つて『工場』を分離することは、全く偶然のことである。例へば水力製粉所と風力製粉所とは、或る諸縣で或る年には工場中に算へられ、他の諸縣ではさうではない。(註。『人口調査書』に於ける實例に比較。二七四頁。ツーガン・バラノフスキ氏は少し誤謬に陥つた。彼は實際の工場数は、一八八五年から一八九二年迄の間に減少したと言ひ、『工場』三五〇頁)一工場に對する勞働者

の平均数を種々なる製造業に依り、種々なる時代に依つて比較してゐる。(同上、三五五頁)ロシアに於ける工場制工業資料集』の資料は、餘りに漠然たるもので、特に整理せず、斯の如き結論の爲にこれを利用することは出来ない。『一八八五年—一八八七年度ロシア工場制工業の總計』なる論文(この年の『資料集』所載)の立論者は、屢々誤謬に陥り、各縣による資料の不同不一致を無視してゐる。最後に、『資料集』の特質批判に附け足して置きたいことは、一八九一年迄この資料集がたゞ消費税を賦課せられない製造業のみを網羅し、一八九二年以後鑛山業や國産品製造業をも含む凡ての製造業を網羅したと云ふことである。のみならず、以前の資料と比較し得るやうな資料は特に分離されてゐない。鑛業工場を製造所工場の總數中に加へる方法は、全く説明されてゐない。(例へば鑛業工場の統計は、鑛業工場の生産價值を決して示さず、たゞ生産品の量のみを示した。『資料集』の編纂者等が如何に生産額を決定したかは、不明である。)我國の工場制工業に關する調査中にも一つ一八八〇年代に屬する出所がある。その出所は、その消極的性質に依つて、それからカールイシエフ氏がこの出所の資料を利用したことによつて注目に價する。(註。エヌ・ア・カールイシエフである。ロシアに於ける加工業の主要部門の普

及に對する統計的概観。『法律通報』一八八九年、第九號。九月。『人口調査書』に於て吾人が研究したカールイシユフ氏の最近の勞作と並んで、この論文は我國の製造所工場統計の資料に注目すべきでないことと云ふことの標本となつてゐる。それは、『一八八四年—一八八五年度のロシアに於ける調査集』(サンクト・ペテルブルグ。中央統計委員會出版)である。この資料集はその表の中の一つに於て『歐露の工場工業による生産額』を示してゐる。(第三九の表) 工場と労働者の數は、縣別にせず、ロシア全體に就いて算へられてゐる。資料の出所は、『各縣知事の調査資料』である。(三一—頁) 資料は國産品製造業や鑛山業を加へて凡ての製造業を網羅してゐる。のみならず各製造業に就いて、全歐露に於ける一製造所に對する労働者の『平均』數と生産額とが算へられてゐる。カールイシユフ氏はこの『平均數量』の『分解』に取りかゝつた。平均數量の意義を判斷する爲に『調査集』と『資料集』との資料を對照して見よう。(斯の如き對照をなすには、先の資料から金屬加工業、國産品製造業、漁業及び『其他』の製造業を除去する必要がある。さうすると五三の製造業が残る。歐露による資料。)

出 所	工場數	労働者數	生産額 (千留單位)
ロシア調査集	54,179	559,476	569,705
商工局資料集	14,761	499,632	672,075
	+	39,418	+ 59,844
			- 102,374
		+ 267%	+ 11.9%
			- 15.2%

斯くして各縣知事の調査は、『工場』數の中に數萬の農的及び家内工業的小作業場を算へた！ 無論斯の如き作業場は、各個別的製造業により、各縣各市外地帯に依り、全く偶然に工場中に算へられたのである。左に或る製造業に就いて『調査集』と『資料集』とによる製造所數の實例を掲げる。即ち毛皮業は一、二〇五と二五九、皮革業は四、〇七九と二、〇二六、薦袋製造業は五六二と五五、糊製造業は一、二二八と一八四、製粉業は一七、七六五と三、九四〇、バター製造業は九、三四一と五七四、タール製造業は三、三六六と三二八、煉瓦製造業は五、〇六七と一、四八八、製陶業及び化粧瓦製造業は二、五七三と一四七である。斯の如き『工場』計算を

基礎とする『平均數』によつて、我國の工場制工業に於ける『企業範圍』を律するならば、如何なる種類の『統計』が出来上るか、想像に難くない。所が、カールイシエフ氏は斯の如く判斷して、一製造所に對し(全ロシアによる)労働者の前記『平均數』が百人以上に達する製造業のみを大工業に屬せしめてゐる。斯の如き幻想的研究方法により得られる結論は、『前記の範圍に於て解釋された大工業が、僅かに全生産額の 1/4 を負擔するに過ぎないと云ふことである!』(引用論文の四七頁)(註。『斯く一年間に於ける全生産の 3/4 は、比較的小規模の企業が負擔してゐる。この現象の根源は、ロシアの國民的經濟上に於ける多くの重大な根本的要素の中に横はり得る。中でも、此處に屬せしめねばならぬものは、大衆的住民の土地に依る生活と我國に於て製造所工場労働者の職業的階級の發達に力強き妨害を與へる土地共有村の活氣(原文のまゝ)とである。それと結合されてゐるのは、(一)ロシアの(中央)地帯に生産品加工の家庭的形態が、普及してゐることである。この中央地帯は、我國に於ける製造所及び工場の主要なる所在地となつてゐる。』(同上。カールイシエフ氏のイタリック活字)哀れな『土地共有村』である! この土地共有村だけが、凡ての責任を、學識ある土地共有村崇拜者の統計的誤謬に對する責任さへも負擔せねばならぬのである!)以下吾人は、百人及びそれ以上の労働者を有する工場が實際に於て我國の工場制工業の全生産額の大半を占有してゐることを指摘しよう。

序に言つて置くが、地方に於ける縣統計委員會の(縣知事の調査材料となつてゐる所の)資料は、常に『製造所及び工場』の概念の全く不定であることと、小作業場の偶然的登録とに依つて特質付けられてゐる。例へば、スモレンスク縣では一八九三年—一八九四年度に於て或る市外地帯は、數十の小バタ製造所を工場に屬せしめ、或る市外地帯は、バタ製造所を一つも工場中に加へなかつた。縣内のタール『製造所』は、一五二を算へられるが、(一八九〇年の『工場案内』に依ると、タール製造所など一つもない。)それは個々の市外地帯に就いて偶然的登録をしたものである。(註。デ・ヂバンコフ氏の著書『スモレンスク縣に於ける製造所及び工場の衛生的研究』中からの資料。(スモレンスク、第二部、一八九四年。))ヤロスラフ縣では、九十年代に於て地方的統計は、製造所及び工場を(一八九〇年度の『工場案内』による四七二に對し)三、三七六と算へ、(各市外地帯別に)數百の製粉所、鍛冶場、小澱粉製造所及びその他をこの製造所及び工場中に加へてゐる。

最近に至つて我國の製造所工場統計は、改革された。その結果調査材料蒐集のプログラムが變つた。『製造所及び工場』の概念も變つた。(新特徴が、即ち機械的原動力の存在することや労働者数が十五人以上であるべきことなどが採用された。)工場監督が調査材料の蒐集と檢證とに關與するやうになつた。吾人は詳細を知る爲に讀者に我が『人口調査書』中の前記の論文を紹介しよう。その論文では、新プログラムにより編纂された『製造所及び工場一覽』(サンクト・ペテルブルグ、一八九七年)が詳細に研究されてゐる。(註。カールイシエフ氏の計算によると、歐露の方で『一覽』の資料の總計は、工場一四、五七八、労働者八八五、五五五人、生産額一、三四五、三七六留となつてゐる。)その論文は、改革されたにも拘らず、我國の製造所工場統計に改良の跡が殆んど認められないと云ふことを示してゐる。資料が従來通りどれもこれも皆偶然的なものであることや、従つてこれ等の資料の取扱ひには非常な警戒を要することも示されてゐる。(註。商工省で發行された工場監督者報告集(一九〇一年—一九〇三年度)には、製造所と工場との數に關する調査や、それからまたそれ等の製造所と工場に於ける労働者數に關する調査がある。(ロシア六十四縣の)製造所と工場とは、労働者の數に應じて(二〇以内、二一—五

〇、五一—一〇〇、一〇一—五〇〇、五〇一—一、〇〇〇、一、〇〇〇以上)分類されてゐる。これは、我國の製造所工場統計の一大進歩である。大職場(二一人及びそれ以上の労働者を有する)に關する資料は、多分——せめて幾分か有望であらう。二〇人以下の労働者數を有する『工場』に關する資料は、明かに偶然的なもので、何の役にも立たない。例へば、一九〇三年度にニゼゴード縣では、二〇人以下の労働者數を有する工場は、二六六も擧げられてゐる。それ等の工場に於ける労働者は、一、九七五人で、平均八人弱である。ベルミ縣では、斯の如き工場は一〇、労働者一五九人である! 勿論滑稽なことである! 六四縣による一九〇三年度の總計は工場一五、八二一、労働者一、六四〇、四〇六人であるが、若し九〇人以下の労働者數を有する製造所と工場とを除けば、製造所工場は一〇、〇七二、労働者は一、五七六、七五四人となる。第二版の註。)たゞ正確な、ヨーロッパ流に組織された工業記録のみは、我國の工業統計をその混沌状態から救ひ出すことが出来る。(註。一八九六年の『財政通報』第三五號、ニゼゴード會議に於ける報告と討論概観に比較。ミハイロフスキイ氏は製造所工場統計の混亂状態の性質を極めて浮刻のやうに示した。調査用紙は『下級警察官にまで及ぶ。この警察官は遂に受領證と

引換へに勿論注意に價するやうに思はれる工業的作業場にこの調査用紙を配布する。その中でも特に前年既に配布したことのある作業場へ持つて行く。『この調査用紙は『去年の通りに』書かれた回答により、(その正しいことを信ずる爲には、各縣に於ける各製造業に就いての商工局『資料集』を一瞥する必要がある。)或は全く何の意味もなく書かれた回答によつて満される。』

我國の製造所工場統計を解剖して見ると、非常に多くの場合に於て、特にその統計的資料はこれを整理せずに利用すべきでないことと、それからこの資料整理の主要目的となるべきものは、比較的役に立つ資料と絶對に役に立たぬ資料とを區別するにあることが分る。吾人は次の節に於て、この點で最も重要な生産に關する資料を瞥見することとし、今はロシアに於ける工場數が果して増加してゐるか、それとも減少してゐるか? と云ふ問題を提起することとしよう。この問題の主なる難點は、『工場』なる概念が我國の製造所工場統計に於ては、極めて漠然とした意味で用ひられてゐることである。従つてこの問題に對する消極的の回答は、製造所工場統計の資料に就き時として與へられた消極的の回答は、(例へば、カールイシエフの與へた如き回答は)何等の意義をも有ら得ない。先づ『工場』なる概念に就いて何等か正確な特徴を定めて

かゝらねばならぬ——この條件なしでは、大機械精工業の發達を作業場に關する資料を以て説明することは、下らぬことになつて了ふ。その作業場としては、小製粉場、バタ製造所、煉瓦製造所等が、その時に應じて様々に算へられてゐる。作業場に一六人以上の労働者を有つてゐることをその特徴としよう。さうすると吾人は斯の如き工業的作業場が、一八六六年には歐露にマクシマムで二千五百——三千、一八七九年には約四千五百、一八九〇年には約六千、一八九四年——一八九五年には約六千四百、一九〇三年には約九千であつたことを知る。(註。資料は鑛山業を除く(國産品製造業を含む)凡ての製造業に關するものである。一八七九年、一八九〇年及び一八九四年——一八九五年度の資料は、『工場案内』と『一覽表』とから既に吾人が算へ上げた通りである。『一覽表』の資料からは、以前製造所工場統計中に算へられてゐなかつた印刷所が除かれてゐる。(『人口調査書』二七三頁参照)一八六六年度には、七一の製造業に關する『年報』の資料によると、一六人及びそれ以上の労働者を有する作業場は、作業場總數六、八九一の中一、八六一を算する。一八九〇年には、これ等七一の製造業は、一六人またはそれ以上の労働者を有する作業場總數の約五分の四となつた。吾人はその採用した『工場』の概念の特徴を最も

正確なものと認める。何故かと云へば、一六人またはそれ以上の労働者を有する作業場が、工場中に属すると云ふことは、我國の製造所工場の統計の最も種々なるプログラムに取つても、また凡ての製造業に取つても疑ふ餘地がないからである。製造所工場統計が、時として一六人またはそれ以上の労働者を有する凡ての作業場を登録し得なかつたし、また現在でも登録し得ないことは、疑ひないが、(六章二節の實例参照)然し吾人はこの遺漏が今日よりも以前の方が多かつたのだと考へる何等の根據をも有つてゐない。(一九〇三年度——『財政監督報告集』からの資料。歐露五十縣。二十人以上の労働者を有する製造所工場八、八五六による。第二版増訂。) (三) それ故にロシアに於ける工場数は、改革以後の時代に至つて増加し、且つ極めて迅速に増加しつゝある譯である。

三 大工業の發達に關する歴史的統計資料の研究

既に前にも述べた通り、製造所工場統計の資料を基礎として大工業の發達を論ずるには、こ

の製造所工場統計中に於ける比較的役に立つ資料と絶対に役に立たぬ資料とを區別する必要がある。この目的を以て、吾人は我國の加工々業中の最も主要なる製造業を討検することとする。

(一) 織物業

獸毛加工業の中心となつてゐるのは、羅紗製造業である。この羅紗製造業は、一八九〇年には生産額三千五百萬留以上、労働者四萬五千人を有してゐた。この製造業に關する歴史統計資料は、労働者數が著しく減少したことを、即ち一八六六年の七二、六三八人から一八九〇年の四六、七四〇人に減少したことを示してゐる。(註。特に説明をしない場合、吾人は必ず一八六六年度は『年報』の資料を採り、一八七九年及び一八九〇年度は『工場案内』の資料を採つてゐるのである。『歴史統計概観』(第二卷)は、一八五五年から一八七九年迄の羅紗製造業に關する年報を提供してゐる。一八五五年—一八五九年から一八七五年—一八七九年までの五年間宛の労働者平均數は、左の如くである。一〇七、四三三人、九六、一三一人、九二、一一七人、八七、九

六〇人及び八一、四五八人。この現象を評價する爲に注意しなければならぬことは、一八六〇

年代まで羅紗製造業が獨特の組織を有つてゐたことである。即ち羅紗製造業は、比較的大きい作業場に集中されてゐた。然しその比較的大きい作業場は、決して資本主義的工場精工業に属するものではなく、農奴または一時的義務を負はされた農民の勞力を基礎とするものであつた。

従つて六十年代の『工場制』工業を概観すると、諸君は羅紗工場が(一)地主若くは貴族の工場と(二)商人の工場に區別されてゐるのを見るであらう。そして先の地主若くは貴族の工場の方は、主として軍用羅紗を作つた。のみならず官用品の請負は、機械の數に應じて平等に各工場に分配された。義務労働の結果は、斯の如き作業場の技術が退歩し、自由な雇傭労働を基礎としてゐる商人の工場と比較して遙かに多くの労働者が使役されることとなつた。

羅紗製造業に於ける労働者數の著しい減少は、地主の縣に起つてゐる。例へば一三の地主の縣『織物工業概観』に數へられた)に於て、労働者數は三二、九二一人から一四、五三九人に減少してゐる。(一八六六年及び一八九〇年)然るに五の商人の縣(モスクワ縣、グロドノ縣、リフリヤンディヤ縣、チエルニーゴフ縣、サンクト・ペテルブルグ縣)に於ては、三二、二九一人か

ら二八、二五七人に減少した。其處で吾人が二つの反對な傾向に衝突つてゐることが明白である。然しこの二つの傾向は、資本主義の發達を示してゐる。即ち一面財産世襲的制限占有的性質を有する地主の所有する作業場の没落を示し、他面商人の作業場から純資本主義的工場の發達して來ることを示してゐる。六十年代の羅紗製造業に於ける労働者の大多數は、この術語の正確な意味に於ける工場労働者では決してなかつた。それは、地主の爲に働く束縛された農民であつた。(註。左に自治會統計中から二つの實例を擧げる。サラトフ縣ウォーリスキイ市外地帯に於けるエヌ・ベ・グラドコフの羅紗工場(一八六六年には、三〇六人の労働者が働いてゐた。)に就いて、同市外地帯の自治會統計集(二七五頁)には、農民は旦那の工場で働かされたと書いてある。『農民等は結婚する迄工場で働いた。その次には納稅義務を負擔する眷族の中へ加へられた。』と書いてある。一八六六年にはリヤザン縣ラネンブルグ市外地帯リヤスイ村に一八〇人の労働者を有する羅紗工場があつた。農民等は工場で働いて地主に對する義務労働を果した。その工場は一八七〇年に閉鎖された。『リヤザン縣統計情報集』第二卷、第一部、M一八八二、三三〇頁)羅紗製造業は、ロシアの歴史に於て獨特の現象となつてゐる。即ち工業に農

奴の労働を適用した實例となつてゐる。吾人は此處で改革以後の時代に制限されてゐるから、製造所工場統計に於けるこの現象の反映に就いては、前記の簡単な指摘に満足しなければならぬ。なほこの方面に於ける大機械精工業の發達を論ずる爲に、蒸汽動力統計中から更に左の如き資料を引用せねばならぬ。即ち一八七五年—一八七八年には、歐露に於ける獸毛紡績業及び羅紗製造業に於て、機械作業場は一六七、蒸汽機械は二〇九、馬力は四、六三二を算したが、一八九〇年には、作業場は一九七、蒸汽機械は三四一、馬力は六、六〇二を算した。それ故に蒸汽の應用は、餘り急速に進歩しなかつた。それは、一部分は地主の工場の傳統により、一部分は羅紗織物を最も安價な綿羊の毛を混ぜ織りした織物を以て壓迫することにより説明される。一八七五年—一八七八年の毛織物業に於て、機械作業場七、蒸汽機械二〇、馬力三〇三であつたが、一八九〇年には、機械作業は二八、蒸汽機械六一、馬力一、三七五となつた。

獸毛加工業中なほフェルト製造業を挙げねばならぬ。これは各時期に於ける製造所工場統計資料の比較すべからざることを特に明瞭に示してゐる。即ち一八六六年には工場七七、労働者二九五人を算し、一八九〇年には工場五七、労働者一、二一七人を算した。先の數の中で、二

千留以下の生産額を有する小作業場は六〇、労働者一三七人、次の數の中からは、作業場一、労働者四人で、ニゼゴード縣セミョーフ市外地帯に於ける一八六六年の小作業場は、三九を算した。そして同市外地帯に於ては、今でも漂布業は非常に發達してゐる。然しその漂布業は「家内工業的」製造業に屬するもので、「工場制」製造業に屬するものではない。(第六章、第二節の二参照)

なほ織物業の中で特に有力な位置を占めてゐるのは、綿花加工業で、今では二十萬人以上の労働者を擁してゐる。吾人は茲で我國の製造所工場統計の最大誤謬中の一を観察することとしよう。即ちその最大誤謬の一と云ふのは、工場労働者と資本主義的に仕事をさせられてゐる家内労働者とを混同してゐることである。大機械精工業の發達は、茲では(他の多くの場合に於けるが如く)家内労働者を工業へ吸引することにあつた。若し作業分配事務所や仕事場までが「工場」中に算へられるならば、若し家内労働者が工場労働者と混同されるならば、この過程が如何に破壊された形態を成してゐるかが諒解される! 一八六六年に(『年報』による)吾人は二萬二千人の家内労働者が、工場労働者中に含まれてゐるのを算へた。(のみならずこの數は、

まだ遙かに全部ではない。何故かと言へば、モスクワ縣では、『年報』に於て——全く偶然の原因に依り——『各村々の労働』に關する註が、確かに見落されてゐるからである。その註と云ふのは、ウラヂーミル縣では非常に豊富である。(一八九〇年には、『工場案内』によると)吾人は斯の如き労働者を約千人ばかり算へた。製造所工場統計の數字が、(一八六六年——木綿工場に於ける労働者五萬九千人、一八九〇年には、七萬五千人)實際に起つた工場労働者數の増加を減少しつゝあることは明白である。(註。ツーガン・バラノフスキイ第一集四二〇頁に比較。各村落に於て資本家の仕事をしてゐる手織職工の總數は、セミョーノフの判定するところに依ると、一八五九年には約三八五、八五七人であつた。(第一集、第三卷、二七三頁)なほ彼はこれに各村々に於て『他の工場的製造業』に従事してゐる二十萬人の労働者を附け加へた。(同上、三〇二頁)現在では吾人が既に瞥見した通り、資本主義的に仕事をしてゐる家内労働者數は、比較にならぬ程著しい。如何に種々なる作業場が、時を異にして木綿『工場』中へ數へられてゐるかと云ふことに就いての資料を左に掲げる。(註。二、〇〇〇留以下の生産額を有する作業場は、仕事場の方へ加へられてゐる。一八六八年に行はれたモスクワ、ウラヂーミル兩縣の

製造所工場の専門的研究の資料に於て、中央統計委員會は、小織物作業場の生産額が、單に労働賃銀に過ぎないと云ふことを一度ならず指適してゐる。各家庭に仕事を分配する作業場は、作業分配事務所に加へられてゐる。一八六六年度にはこれ等作業場の數は、まだ、全部擧げられてゐない。それは、モスクワ縣の中で明かに遺漏があつたからである。)

年次	木綿織工場總數	工場	その中分配所	仕事場
一〇六六	四三六	二五六	三八	一四二
一八七九	四一一	二〇九	六六	一三六
一八九〇	三一一	二八三	二二	七

斯く『統計』の示す『工場』數の減少は、實際に於ては、作業分配事務所と仕事場とが工場に壓迫されたことを意味するものである。これを二つの工場の實例に採つて、表で説明しよう。

年次	シユイ市に於けるイ・エム・テレンチエ フの工場				イワノヴォ・ウオズネセンスク市に於ける イ・エヌ・ガレリーリンの工場			
	織物 機械 数	労働者 数	生産 額 千 位	留 位	織物 機械 数	労働者 数	生産 額 千 位	留 位
一八六六	—	二〇五	一三〇	—	—	一、九七	一、九七	一、五
一八七九	六六	九〇	一、三六	—	八三	一、二七	二、二七	—
一八九〇	一、五〇	一、〇四	一、二四	—	一、二四	一、四三	二、〇六	—
一八九四 ⁵	?	一、二〇	一、八六	—	?	二、二四	二、九三	—

それ故にこの方面に於ける大機械精工業の發達を論ずるには、先づ織物機械の數に關する資

料を採るのが最も便利である。一八六〇年に織機械は、約一萬二千臺であつた。一八九〇年には、約八萬七千臺であつた。従つて大機械精工業は、非常な速力で發達したと云はねばならぬ。綿花紡績業に於ても、木綿織物業に於ても、一八七五年—一八七八年には、機械作業場は一四八、蒸汽機械は四八一、馬力は二〇、五〇四であつたが、一八九〇年には機械作業場は一六八、蒸汽機械は五五四、馬力は三八、七五〇であつた。

この統計は綿布製造業に就いても、誤つて製造所工場労働者數の減少を指摘すると同時に（一八六六年には一七、一五一、一八九〇年には一五、四九七）全く同様の誤謬を敢てしてゐる。實際、一八六六年には綿布製造業者は、一六、九〇〇臺の中から僅かに四、七四九臺だけをその作業場内に所有し、殘餘の一、一五、一五二臺は、仕事場所所有者が有つてゐた。それ故に一八六六年には工場労働者中に加へられた家内労働者は、一萬二千人であつたが、一八九〇年には僅かに三千人に過ぎなかつた。（『工場案内』の計算による。）織物機械の數は、一八六六年の一、二六三臺から（『陸軍統計集』による計算）一八九〇年の四、〇四一臺までに、縲軸は九五、四九五から二二八、〇一二までに何れも激増した。一八七五年—一八七八年に於ける亞麻紡績業及び麻

織物業に於ては、機械作業場が二八、蒸汽機械が四七、馬力が一、六〇四であつたが、一八九〇年には機械作業場は四八、蒸汽機械は八三、馬力は五、〇二七になつた。(註。絹織物業では一八七九年に織物機械が四九五臺、手廻し織臺が五、九九六臺〔歴史統計的概観〕であつたものが、一八九〇年には前者は二、八九九臺、後者は七、五〇〇臺以上になつた。)

最後に織物業の中で更に染物業、模様染色業及び仕上業を挙げねばならぬ。これら等に就いて製造所工場統計は、一人―二人の労働者と數百留の生産額とを有する極めて小さい手工的作業場を工場と混同してゐる。(註。例へば一八七九年に於けるこれ等の製造業には、七二九の工場を數へた。その中四六六の工場は、九七七人の労働者と十七萬留の生産額とを有してゐた。今も斯の如き多くの『工場』を――例へばヴァーツカ及びベルミ兩縣の家内工業の記録中に幾分でも見ることが出来る。)大機械精工業の迅速な成長を阻止してゐる少なからざる紛糾が、此處から發生したものであることは、察するに難くない。この發生に關する資料は、次の如くである。即ち獸毛洗滌業、染色業、漂布業及び色揚業に於ては、一八七五年―一八七八年に機械作業場八〇、蒸汽機械二五五、馬力二、六三四であつたが、一八九〇年には、機械作業場一八九、蒸汽

機械八五八、馬力九、一〇〇となつた。

(二) 材木加工業

この部門では、以前小作業場は製材業の中に算へられてゐたが、製材業に關する資料は、最も信頼すべきものである。改革以後の時代に於けるこの製材業の長足の發達は、(一八六六年には四百萬留、一八九〇年には千九百萬留)労働者數(四千及び一萬五千)と蒸汽力作業場の數(二六及び四三〇)との著しき増加を伴ひ、特にその増加が林業の生長を明瞭に證明してゐるのに興味がある。製材業は林業中の一事業をなしてゐるに過ぎない。そしてこの事業は、大機械精工業の初步の必然的同伴者である。

この部門の他の製造業なる家具製作業、筵製造業、タール製造業などに關して言へば、これ等の製造業に關する製造所工場統計の資料は、特に混沌としてゐる。これ等の製造業に極めて豊富な小作業場は、以前は勝手な數だけ『工場』中に算へられてゐたが、今でも時によると工場に算へられてゐる。(註。例へば、一八七九年には九一の筵製造工場中三九は、千留以下の生産

額を有つてゐた。(『人口調査書』一五五頁比較) タール製造業では、一八九〇年には、二千留以上の生産額を有する製造所一四〇を算した。一八七九年には六六九の製造所を算へた。(帝國內に於て) 所が『陸軍統計集』は三、一六四と迄算へてゐる! (『人口調査書』一五六及び二七一頁比較)

(三) 動物生産品の化學的加工業及び製陶業

本來化學的製造業に關する資料は、比較的正確である。左に化學的製造業の生長に關する材料を擧げる。即ち一八五七年にはロシアに於て一千四百萬留(生産額三百四十萬留、輸入額一千六十萬留)の化學的生産品が消費された。一八八〇年には、三千六百二十五萬留(生産額七百五十萬留、輸入額二千八百七十五萬留)一八九〇年には四千二百七十萬留(生産額千六百萬留、輸入額二千六百六十萬留)だけ化學的生産品が消費された。(註。『陸軍統計集』、『歴史統計概観』及び『ロシアの生産力、九の一六』によると、労働者數は一八六六年が五、六四五人、一八九〇年が二五、四七一一人、一八七五年—一八七八年が機械作業場三二八、蒸汽機械三四、

馬力三三二であつたものが、一八九〇年には機械作業場が一四一、蒸汽機械が二〇八、馬力が三、三一九となつた。) これ等の資料が特に興味があるのは、化學的製造業が大機械精工業の補助的材料を、即ち生産需用(個人需用でなく)の對象を製作するものとして、極めて重大な意義を有つてゐると云ふことである。ポターシ製造業及び硝石製造業に就いて言へば、また小作業場が混合されてゐる結果、工場數が甚だ不正確であると云はねばならぬ。

獸脂加工業は、改革以後の時代になつて疑ひもなく衰微した。例へば、獸脂蠟燭製造業及び製脂業の生産額は、一八六六年—一八六八年に於て、千三百六十萬留を算し、一八九〇年に於て五百萬留を算した。(註。此處でも六十年代並に七十年代には、多數の小作業場が製造所中に加へられてゐる。) この衰微は、燈火用として礦物性の脂を使用することが盛になり、礦物性の脂が舊式な獸脂蠟燭を壓迫したことと説明される。

皮革製造業によると(一八六六年には作業場二、〇三八、労働者一一、四六三、生産額千四百六十萬留、一八九〇年には作業場一、六二二、労働者一五、五六四人、生産額二千六百七十萬留)統計は常に製造所と小作業場とを混同してゐる。材料の價格が比較的高いことは、生産額

を高める條件となるが、この材料の價格が比較的高いことと、この製造業が労働者を極めて僅かに要求すると云ふ事情とは、家内工業的企業と製造所企業との區別を特に困難ならしめる。一八九〇年には製造所の總數(一、六二二)中に二千留以下の生産額を有するものが、僅かに一〇三だけ入つてゐた。一八七九年には——三、三三〇の總數中へ二、〇〇八だけ入つてゐた。(註。一八七五年にキッターイ教授は、その『ロシアに於ける皮革業圖解』に於て四千七百五十萬留の生産額を有する作業場一二、九三九を算へたが、製造所工場統計は、二千六百五十萬留の生産額を有する作業場二、七六四を算へた。『歴史統計概観』この部門の他の毛皮業に於ては、矢張り工場と小作業場との混同が見られる。一八七九年及び一八九〇年度の『工場案内』に比較。一八六六年には二、〇三八の製造所中一、〇四二は一千留以下の生産額を有つてゐた。(この一、〇四二の製造所に對して二、〇五九留であつた。そして生産額は四十七萬四千留であつた。)それ故に、製造所工業統計は、製造所の減少を示してゐるが、製造所の數は、増加したのである。今も製革作業場は極めて多い。例へば大藏省發行の『工場制工業とロシアの商業』(サンクト・ペテルブルグ。一八九三年。)は、家内工業的製造所約九千五百、労働者二一、〇〇〇人、生産額

千二百萬留を算してゐる。これ等の『家内工業』的企業は、六十年代に『製造所及び工場』に屬してゐるものよりも遙かに大きい。小作業場は『製造所及び工場』中に加へられてゐるが、その數は縣により、年によつて同様ではない。それ故にこの製造業に關する統計的資料に屬せしめる場合には、大なる警戒を要する。蒸汽動力の統計は、この製造業に於ては、一八七五年—一八七八年には、機械附製造所二八、蒸汽機械三三、馬力四八八を算へたが、一八九〇年には機械附製造所は六六、蒸汽機械は八二、馬力一、一一二であつた。これ等六六の製造所に、五、五二二人の労働者(總數の三分の一以上)と千二百三十萬留の生産額(全生産額の四六%)とが集中されてゐる。それ故に生産の集中は非常なもので、最大作業場に於ける労働の生産力は、遙かに平均以上に達してゐる。(註。若し一八九〇年度の『工場案内』に示されてゐる製造所をその創立の時期に應じて區別すれば、一、五〇六の製造所中創立時期の不明なもの九七、一八五〇年迄に創立されたもの三三一、一八五〇年代に創立されたもの一四七、六〇年代に創立されたもの二三九、七〇年代に創立されたもの三二〇、八〇年代に創立されたもの三五二、一八九〇年に創立されたもの二二と云ふことになる。その後十年目毎に創立された製造所は、前の十年目毎に

創立されたものより多い。)

製陶業は、製造所工場統計の性質によると二つの部類に分たれてゐる。即ち一方には殆んど大製造業と小製造業との混同が見られない。従つて統計の資料は、比較的正確なものである。

これに屬する製造業は、硝子製造業、陶器及磁器製造業、雪花石膏及びセメント製造業である。特にセメント製造業の生長の速いことは目立つてゐる。この速力は建築工業の發達を證明する。即ち生産額は一八六六年には五十三萬留を算し、『陸軍統計集』一八九〇年には三百八十二萬六千留を算した。機械附作業場は、一八七五年—一八七八年には八であつたものが、一八九〇年には三九となつた。その反對に、壺製造業や煉瓦製造業には、非常に多くの小作業場が含まれてゐるのを見る。それ故製造所工場統計の資料は、不完全なもので、特に六十年代並に七十年代の分は誇張されてゐる。例へば、壺製造業に於て一八七九年には、五五二の作業場を算し、一、九〇〇人の労働者と五十三萬八千留の生産額とを算し、一八九〇年には作業場一五八、労働者一、九七八人、生産額九十一萬九千留を算した。小作業場(二千留以下の生産額を有する)を除くと、一八七九年には作業場七〇、労働者八四〇人、生産額五十萬五千留、一八九〇年には、作業場一四三、労働者一、八五九、生産額八十五萬七千留と云ふことになる。つまり統計は『工場』数の減少と労働者数の停滞とを示してゐるが、實際にはこの兩者は著しく増加してゐるのである。煉瓦製造業に就いての一八七九年度政府筋資料によると、作業場二、六二七、労働者二八、八〇〇人、生産額六百九十六萬三千留、一八九〇年度は作業場一、二九二、労働者二四、三三四人、生産額七百二十四萬九千留であるが、小作業場(二千留以下の生産額を有する)を除くと、一八七九年度は作業場五一八、労働者一九、〇五七人、生産額五百六十二萬五千留となり、一八九〇年度は作業場一、〇九六、労働者二三、二二二人、生産額七百二十四萬留となる。(註。これ等の製造業に於ける小作業場は、現今では家内工業に屬してゐる。模範として小營業表(第一附録)若くは『人口調査書』(一五八一—一五九頁)參照。『大藏省年報』(第一部)は、資料を明かに誇張してゐる結果、これ等の製造業に就いての總計を示すことを拒絶した。統計の進歩は、その頃から大膽に、そして無雜作に材料の價値を誇張することであつた。)

(四) 冶金業

冶金業の製造所工場統計に於て、混亂の根源となつてゐるのは、第一に小作業場を加へてゐることと、(特に六十年代及び七十年代に於て。)(註。例へば六十年代には或る諸縣では、數十の鍛冶場が『製鐵所』の中に加へられてゐた。また一八六六年度の『年報』によると、前にも引證したやうに(第二節に)バヴロフスキイ地帯の小家内工業家等が、『工場主』の中に加へられてゐた例もある。)(第二に主として鑛業工場を商工局ではなく、鑛山局の『管下』に置いたこと)である。大藏省の調査報告は、普通「原則として」鑛業工場を除外してゐるが、然し鑛業工場をその他の工場から分離するに就いては、何等一定不變の法則があつた譯ではない。(そんな法則を作らうとしても、恐らく出來はしまい。)それ故に製造所工場統計に關する大藏省の出版物には、一部分必らず鑛業工場を含んでゐる。而もこの含有量は縣が異り、年が異なる毎に一様ではない。改革以後冶金術に蒸製動力の應用が發達したと云ふことに就いての一般的資料は、以下鑛山工業を瞥見する場合に引用することとする。

(五) 食料品製造業

この製造業は、吾人の興味を惹いてゐる問題から云ふと、特別な注意に價すべきものである。何故かと言へば、製造所工場統計資料の混亂が、この製造業に於ては、極度に達してゐるからである。所が、この製造業は、我國の工業制工業を總計して見ると、目立つた場處を占めてゐる。例へば、一八九〇年の『工業案内』によると、歐露に於ける工場總數二二、二二四、労働者總數八七五、七六四人、生産總額十五億一百万留の中から、この食料品製造業の中に入つてゐるものは、工場七、〇九五、労働者四五、〇〇〇人、生産額一億七千四百萬留である。それは、この部門の主要な製造業——製粉業、碾割麥製造業及びバター製造業——それ自體が、農産物の精製だからである。この精製に従事する小作業場は、ロシア内の各縣に數百數千を算へる。而もこれ等の作業場中から『製造所と工場』とを分離すべき一般に規定された何等の法則も存在してゐる譯でないから、統計は全く偶然にこれ等の小作業場を網羅したものである。従つて年を異にし縣を異にする毎に、『製造所及び工場』の數は、驚くべき飛躍をなしてゐる。例へば、製粉業に於ける製粉所の數は、年を異にし、資料の出所を異にする毎に次のやうに變つて來る。即ち一八六五年—八五七(大藏省の調査報告集)一八六六年—二、一七六、『年報』一八六六年—

八、四二六、〔陸軍統計集〕一八八五年—三、九四〇、〔資料集〕一七、七六五、〔全露統計報告集〕一八八九年、一八九〇年及び一八九一年—五、〇七三、五、六〇五及び五、二〇一、〔註。そ

の外『製造所及び工場』中に數へられてゐない『小製粉所』は、三三二、九五七もある。〔資料集〕、一八九四年—一八九五年が二、三〇八、〔一覽表〕と云つた具合である。一八九二年に算へられた〔資料集〕小製粉所五、四〇一の中、蒸汽力によるものが八〇三、水力によるものが二、九〇七、風力によるものが一、三三三、馬力によるものが八であつた。所が、或る縣はたゞ蒸汽力による小製粉所だけを算へ、或る縣はたゞ水力によるものだけを算へ（一から四二五までの中）また或る縣は（少數は）たゞ風力によるものと（一から五三〇まで）馬力によるものだけを算へた。其處で、斯の如き統計と、この統計の資料に信頼して作り出した結論とが、如何なる意義を有つてゐるか云ふことは、想像するに難くない。〔註〕で吾人は大機械精工業の生長を論ずる爲に、當然先づ『工場』なる概念を定める一定の特徴を決定してかゝらねばならない。吾人は蒸汽動力を有してゐると云ふことを斯の如き特徴としよう。即ち蒸汽力による小製粉所は、大機械精工業時代の特質的附隨者なのである。〔註〕水力による大製粉所もまた勿論工業の性質を有つてゐるが、然しながら水力による小製粉所中から大製粉所を分離すべく、吾人は材料を有つてゐない。一八九〇年度の『工業案内』によると、吾人は十人乃至それ以上の労働者を有する水力製粉所二一五〇を算へた。これ製粉所に於ける労働者は六、三七八人であつた。この方面に於ける工場的製造業の發達を見ると、次の如き表となる。

歐露の五十縣による。

年次	蒸汽力製粉所數	労働者數	生産額。單位千留。
一八六六	一二六	?	?
一八七九	二〇五	三、六二一	二一、三五三
一八九〇	六四九	一〇、四五三	六七、四八一
一八九二	八〇三	一一、九二七	八〇、五五九

パタ製造業の統計も、同様の理由によつて不完全なものである。例へば、一八七九年には製

造所が二、四五〇、労働者が七、二〇七人、生産額が六、四八六留と算へられてゐるが、一八九〇年には、製造所が三八三、労働者が四、七四六人、生産額が一二、二二三留と算へられてゐる。然しながらこの製造所数と労働者数との減少は、たゞ表面的に過ぎない。で若し一八七九年と一八九〇年との資料を比較し得るとするならば、即ち二千留以下の生産額を有する作業場（製造所工場名簿に入つてゐないもの）を除くならば、一八七九年には製造所が二七二、労働者が二、九四一人、生産額が五、七七一留と云ふことになり、一八九〇年の方は製造所が三七九、労働者が四、七四一人、生産額が一二、二二三留となる。而してこのバタ製造業に於ては大機械精工業が製粉業に於ける程迅速な發達を見なかつたことも、蒸汽動力の統計によつて見て明白である。即ち一八七五年—一八七八年には、蒸汽力製造所が二七、蒸汽機械が二八、馬力が五二一であつたものが、一八九〇年には、機械を据え附けた作業場が一三、蒸汽機械が一六、馬力が一、八八六となつた。

この部門に屬する他の製造業は、比較的小さい。例へば、芥子製造業や漁業に於て、六十年代の統計は、數百の斯の如き小作業場を算へてゐた。これ等の作業場は、工場に共通した點を

少しも有つてゐない。従つて現在では工場に屬してゐない。なほ種々な年の我が製造所工場統計の資料を如何に訂正する必要があるかと云ふことは、左の數字によつても明白である。即ち一八七九年度の『工場案内』は、この部門に於て製粉業を除いて、作業場三、五五、労働者一五、三二三人を算したが、一八九〇年には、作業場一、八四二、労働者一九、一五九を算へた。七つの製造業（註。バタ製造業、糊製造業、糖蜜製造業、麥芽製造業、菓子製造業、罐詰製造業及び酢製造業）に就いて見ると、一八七九年に入れられてゐる小作業場（二千留以下の生産額を有する）は二、四八七で、労働者數五、一七六人、生産額九一六、〇〇〇留であつたが、一八九〇年に入つた作業場は七で、労働者數は一〇、生産額は二、〇〇〇留であつた。それ故にこの資料を比較するには、或る場合には五千人の労働者を計算から省き、他の場合には十人の労働者を計算から省かなければならない！

(六) 國産品製造業及びその他

或る國産品製造業に於て、吾人は一八六〇年から現在まで製造所工場労働者數の減少を觀

る。然しこの減少量は、到底エヌーオン氏の断定するが如きものではない。彼は印刷された数字を悉く盲目的に信用してゐる。要するに問題は、大部分の國産品製造業に就ての調査報告の唯一の出所が、『陸軍統計集』であると云ふことである。吾人が知つてゐる通り、この『陸軍統計集』は、製造所工場統計の總計を非常に誇張してゐる。然しながら吾人は『陸軍統計集』の資料を確める爲には、遺憾ながら多くの材料を有つてゐない。酒造業に於て『陸軍統計集』は、一八六六年に酒造所三、八三六、労働者五二、六六〇人（一八九〇年には酒造所、一六二〇、労働者二六、一〇二人）を算へたが、この酒造所の數は、大藏省の資料と一致してゐない。大藏省は、一八六五年—一八六六年に於て現に經營されてゐる酒造所二、九四七、一八六六年—一八六七年には三、二八六を算した。（註。全酒造所數は（經營されてゐないものも加へて）四、七三七と四、六四六とであつた。）これによつて判斷すると、労働者數は、五千乃至九千も誇張されてゐる。火酒製造業に於て、『陸軍統計集』は、火酒製造所四、八四一、労働者八、三二六人を算へてゐる。（一八九〇年には、火酒製造所二四二、労働者五、二六六）その中ベッサラビヤ縣では、火酒製造所が三、二〇七、労働者か六、八七三人となつてゐる。この數字の馬鹿氣てゐることは、直ぐに

眼に映ずる。實際大藏省の報告に依つて見ても、ベッサラビヤ縣に於ける火酒製造所の實際數は、一〇一二で、全歐露の分を算へても、一、一五七であることが分る。それ故に労働者數は、最少で六千人は誇張されてゐる。誇張の原因は、明かにベッサラビヤの『統計家等』が葡萄園所有者を製酒場所所有者中に加へたことである。（下記の煙草製造業参照）ビール製造業と蜂蜜製造業について、『陸軍統計集』は製造所二三、七四、労働者六、八二五人（一八九〇年には、製造所九一八、労働者八、三六四人）と算へてゐる。所が、『大藏省年報』は、歐露に於て一八六六年には蜂蜜製造所二、〇八七を算へてゐる。労働者數は此處でも誇張されてゐる。（註。例へばシムビルスク縣に於て『陸軍統計集』は、蜂蜜製造品二一八（一）労働者二九九人、生産額二一、六〇〇留と算へてゐる。『年報』によると、この縣内には蜂蜜製造所は七つであつた。）多分、それは小さい家庭的作業場か或は農民の作業場からであらう。甘菜製糖業及び棒砂糖製造業に於て、『陸軍統計集』は労働者數を一萬、一千人も誇張して、『大藏省年報』の資料が八〇、九一九人と算へてゐるのに反し、九二、一二六人と算へてゐる。（一八九〇年には、労働者七七、八七五人）煙草製造業に於て、『陸軍統計集』は工場五、三二七（一）、労働者二六、一一六人（一八九

〇年には、工場二八一、労働者二六、七二〇人)を算へてゐる。そしてその中工場四、九九三、労働者二〇、〇三八人は、ベッサラビヤ縣に入れてゐる。所が、實際にはロシアに於ける煙草工場は、一八六六年に三四三で、ベッサラビヤ縣が一三であつた。従つて労働者数の誇張は、約二萬人くらゐである。また『陸軍統計集』編纂者自身さへも、『ベッサラビヤ縣の中に入れてゐる煙草工場は、煙草栽培場に過ぎない。』(四一四頁)と言つたくらゐるである。エヌーオン氏は、自分の引用した統計出版物の原書を一瞥することを餘計なこととも思つてゐるらしい。それ故に彼は誤謬に氣附かずに、眞面目になつて『煙草工場に於ける労働者数の増加が著しくない』などと論じ立てた。(引用論文一〇四頁)！ エヌーオン氏は國産品製造業に於ける労働者数の總計を、直接一八九〇年度の『陸軍統計集』と『工場案内』とから採り、(一八六、〇五三人及び一四四、三三二人)減少の割合を割り出してゐる……『二十五年間に仕事を有つた労働者数は、著しく減少して、二二・四%も少なくなつた。』……『此處で(即ち國産品製造業に於て)吾人は増加したなどと言ふことが出来ない、労働者数は單純に前の數の 1/4 に減少されたのを見る。』(同上)實際、其處には一體何んと云ふ『單純さ』があることだらう！ 手當り次第の數字を

捉へて、割合を割り出したに過ぎないのだ！ 然し『陸軍統計集』の數字が、労働者を四萬人だけ誇張してゐると云ふやうな小さい事情を認めないことも出来る。

(七) 結 論

最後の二節に於て述べた我國の製造所工場統計批判は、左の如き最も主要なる結論に吾人を導いて行く。

一、ロシアに於ける工場數は、改革以後の時代に於て迅速に増加しつゝある。

我が製造所工場統計の數字から流れ出る反對の結論は、誤謬である。それは、我國では小營業的作業場や家内工業的作業場や農業作業場が工場數の中に加はつてゐるからである。のみならず、吾人が現在からより遠く離れば離れるだけ、工場數の中に入つてゐる小作業場の數は、多くなるのである。

二、製造所工場労働者數と製造所及び工場の製造量とは、從來我國の統計により同様に誇張されてゐる。誇張されるのは、第一に、以前は小作業場がより多く含まれてゐたためである。

従つて家内工業的營業と接觸してゐる製造業に就いての資料は、特に信用すべからざるものである。(註。若し凡ての製造業に就いての十把一束的資料を長い年月に亙つて採用するならば、前記の原因から發生する誇張は、餘り大きくはなるまい。何故かと云へば、小作業場の提供する労働者總數と生産總額との割合が多くないからである。この場合、同一の根源から取つた資料の比較が豫想されることは勿論である。(大藏省の報告と、各縣知事の報告若くは『陸軍統計集』の報告との比較に就いては、最早何も言ふことはない。第二に、誇張されたのは、從來は製造所工場労働者數の中に、資本主義的な仕事をさせられてゐる家内労働者が、今よりもより多く加へられてゐた爲である。

三、我國では普通次のやうに考へることが許されてゐる。即ち政府筋の製造所工場統計の數字が一度採用された以上、その數字は、その統計の他の數字と比較され得るものと認められなければならぬ、反對のことが證明されるまで、多少信憑すべきものと認められなければならぬと考へることである。所が、吾人が今迄述べて來た所からは、反對の斷定が生じて來る。即ち各時代と各縣とに於ける我國の製造所工場統計資料を様々に比較して見ると、それは、反

對のことが證明されるまで、信憑すべからざるものと認めなければならぬと云ふ斷定である。

四 鑛山工業の發達

ロシアの改革以後に於ける發達の出發期に於て、鑛山業の主要中心地點は、ウラルであつた。最近まで中央ロシアから截然と隔絶されてゐたウラルは、一工業地帯を形造ると同時に、それ自體からして工業の獨創的組織を成し立てゝゐた。ウラルに於ける『労働組織』の根底になつてゐるのは、昔から農奴制度であつた。この農奴制度は、今日に至るまで、即ち十九世紀の末葉に至るまで、鑛業生活の最も主要なる方面に於て保存されてゐる。が、その全盛時代には、農奴制度はウラルの繁榮とその繁榮がロシアに於てばかりか、一部分はヨーロッパに於ても優勢であつたこととの根底となつた。十八世紀に於て、鐵はロシアの輸出品の主要項目の一つであつた。鐵の輸出高は、一七二八年には、約三百八十萬ブロードであり、一八〇〇年—一八一五年には、二百萬ブロード乃至百五十萬ブロードであり、一八一五年—一八三八年には、約百萬ブロード

1/3であつた。更に「十九世紀の二十年代には、ロシアはフランスより一倍半多く、プロシアより四倍半多く、ベルギーより三倍多く銑鐵を産出した。」然しながら同時にヨーロッパの資本主義がまだ萌芽的發達をなした時代に既にウラルをして斯く高い發達を遂げさせた農奴制度そのものは、資本主義全盛時代に於けるウラルの衰微の原因となつた。製鐵事業の發達は、ウラルに於て極めて徐々に進行した。一七一八年にロシアは約六百五十萬ブードの銑鐵を産し、一七六七年には、約九百五十萬ブードを、一八〇六年には、千二百萬ブードを、三十年代には九百萬乃至千百萬ブードを、四十年代には千百萬乃至千三百萬ブードを、五十年代には千二百萬乃至千六百萬ブードを、六十年代には千三百萬乃至千八百萬ブードを、一八六七年には千七百五十萬ブードを産出した。百年の間に製鐵業は、倍加し得なかつたばかりか、ロシアは他のヨーロッパ諸國の背後に遠く取り残されて了つた。他のヨーロッパ諸國では大機械精工業が、冶金術の長足の進歩を喚起したからである。

ウラルに於ける鑛業停滯の主要原因は、農奴制度であつた。鑛山業者等は地主でもあれば工場主でもあつた。彼等は資本と競争に對してばかりか、獨占權と(註。ウラルの鑛山業者等

は、農民解放の際に、工場地帯に火力を用ゆる作業場の開設を禁止する法律を保存して置くことを特に強要した。)所有權をも支配する勢力の基礎を作つた。ウラルの製造所々有者等は、今も大土地所有者である。一八九〇年には、帝國內の製鐵所二六二に附屬してゐる土地は、千四百四十萬デシヤチーナ(譯者註。一デシヤチーナは我國の約一町一段四畝八歩に相當する。)(その中八百七十萬デシヤチーナは森林。)で、その中千五十萬デシヤチーナは、一一一のウラル製鐵所に附屬するものであつた。(森林七百七十萬デシヤチーナ。)それ故にこれを平均しても、ウラルの各工場は十萬デシヤチーナと云ふやうな莫大な占有地^{ツァイフンディ}を有つてゐる譯である。これ等の莊園地から農民に分讓地を割讓することは、今日までまだすつかり終つてはゐない。ウラルに於ける勞働力を得る方法は、雇傭勞働ばかりでなく、請負勞働もある。例へば、ヘルミ縣クラスノウフイムスキイ市外地帯に關する自治會統計は、製造所の土地や牧場や森林などを、或は無料で、或は安價に使用する農民經濟を數千も算へてゐる。然しこの無料使用が實際には極めて高價なものに當つてゐることは勿論である。何故かと云へば、この使用のお蔭で勞働賃銀が非常に低下されるからである。各製造所は製造所に結びつけられてゐる「自分の」安い勞働者を得る

ことになる。(註。ウラルの「労働者は、半ばは土地所有者となつてゐる。それ故に鑛業上の作業は、労働者にとつて經濟上の有利な補助である。尤も他の鑛業地帯に於けるより安い賃銀を支拂はれてはゐるけれども。』一八九七年の『財政通報』第八號。周知の如く、ウラル農民が農奴から解放された條件は、鑛業上の作業に對する農民の態度を十分に考慮したものであつた。鑛業地の住民は、土地を有たずに一年ぢう工場作業に従事しなければならぬ職工と、分讓地を有つてゐて、補助的作業をしなければならぬ農村作業者とに分たれてゐた。ウラルの労働者に對して今日迄保存されてゐた術語、即ちウラルの労働者等は作業に従事すべき「負債を有つてゐる。」と云ふ術語は、如何にも特長のある言葉である。例へば自治會統計中に於て「アルティンスキイ製造所の組合作業により負債を有つた労働團體への報告」を讀むならば、思はず表紙を見、日附を調べて見たくなるだらう。實際、これは九十四年で、或る四十四年ではないのではあるまいか?)
ヴエデ・ペーロフ氏は、この關係を次のやうに特質づけてゐる。

ペーロフ氏はかう物語つてゐる。「ウラルは『原始的な』歴史に養はれた労働者を有つてゐるか
ら心強いのである。他の外國の製造所及工場若くはサンクト・ペテルブルグに於ける製造所及
び工場に於てさへ、労働者はこれ等の製造所の利害に關係がない。彼は今日此處にゐるかと思
へば、明日は他の場處にゐる。工場が来るから、彼は働くのである。儲けの代りに損失が生ず
れば、彼は自分の行李を携へて、來た時と同様に速かに易々と出て行く。彼と工場經營主——
これは二つの永久の敵である……所が、ウラル製造所の労働者は、全く別な状態にある。彼は
土地の住民で、その製造所以外に更に自分の土地と自分の經濟と、最後に自分の家族とを有つて
ゐる。製造所の幸福な状態に、彼自身の幸福状態が密接に、離れぬやうに結びつけられてゐる。
製造所の方が好都合に行けば、彼もまた好都合になるのである。製造所の方が甘く行かなけれ
ば、彼もまた甘く行かない。所が逃げ出す譯にも行かない。(原文のまゝ!) 其處にはたつた一
つの行李があるのではない。(原文のまゝ!) 逃げ出すことは、自分の凡ての世界を破壊し、土
地を棄て、經濟を棄て、家族を棄てることである。……其處で彼は幾年でも辛抱しようと思ふ
氣になる。労働賃銀の半分でも働かうと思ふ氣になる。或はまた斯の如き土地の他の労働者に
麵麩の一片を稼ぎ出す可能を興へる爲に、自分の労働時間の半ばを作業せずに過さうと思ふ氣
にもなるのである。一言で盡すと、彼は若し製造所に留つて居ることが出来さへすれば、その

主人との間に何んな協定でも結ぶ氣になるのである。斯くウラルの製造と労働者との間には、斷ち難い關係がある。その關係もまた以前と、彼等が農奴制度から解放される迄と同様であつた。變つたのは、たゞこの關係の形式だけに過ぎない。たゞそれだけに過ぎないのである。以前の農奴制度の原則が、相互的利益と云ふ偉大な原則に變つただけなのである。』

この相互利益の偉大なる原則は、先づ第一に労働賃銀の特別の低下となつて現はれて來る。『南露では……労働者の價値は、ウラルより二倍または三倍も高い。』例へば、數千の労働者に就ての資料によると、(一年一労働者に付き)一七七留對四五留でこある。南露では『故郷の自分の家であらうが、或は何處か別な處であらうが、野良仕事をして容易に儲けることの出来る可能が一寸でも判ると、労働者等は製造所や炭坑や鑛山を棄てて了ふ。』(一八九七年の『財政通報』第十七號二六五頁)所が、ウラルでは容易な儲け口などを空想し得ることは、決してあり得ない。

ウラルの労働者の労働賃銀が低く、その境遇が奴役的であることに自然な、そして斷つべからざる關係を有つてゐるのは、ウラルの技術が舊式であることである。ウラルに於ける鉄鐵製造は、主に薪を燃料とし、舊い組織の熔鑛爐によるもので、氣管など冷たいか、でなければ餘り熱くない。一八九三年には、冷却通風の熔鑛爐は、ウラルに於ては一一〇の中三七、南露では一八の中三であつた。鑛物燃料を用ゆる一熔鑛爐は、年平均百四十萬ブードを産するに對し薪を用ゆるものは、二十一萬七千ブードを産するに過ぎない。一八九〇年にケブペン氏はかう書いた。即ち『精銑爐による製鐵方法は、矢張りまだウラルの製鐵所に於て行はれてゐる。所が、ロシアの他の部分では、その方法は既に全く煉鐵法により壓倒されつゝある。』と。ウラルに於ける蒸汽動力の應用も、南露より遙かに遅れてゐる。最後に是非言つて置かねばならぬことは、ウラルの邊鄙なこと、即ち距離が遠く、そして鐵道がない爲にロシアの中央から遮斷されてゐることである。最近まで生産品をウラルからモスクワへ運ぶことは、主に年一度の原始的河川『航行』の方法によつて行はれてゐた。註。マーミン・シビリヤーク氏の短篇小説『闘技者』にこの『航行』のことが書いてある。この作家の作品には、改革前の生活状態に近いウラルの特殊な生活状態が、即ち製鐵所に結び付けられた住民の蹂躪された暗黒な生活状態、『且那達』の『卒直な子供らしい淫蕩生活』、ロシアは勿論凡ての國の資本主義的發達に特有な中流階級人(雜

階級や智識階級のゐない生活状態が、浮刻のやうに描かれてゐる。

（それ故に改革前の制度の最も直接的な残骸、請負仕事の非常な發達、労働者の束縛、低い労働生産力、舊式な技術、低い労働賃銀、手工生産の優勢、幼稚なそして掠奪的原始的な地方に於ける天然富源の利用、獨占、競争壓迫、邊鄙、時代の一般的な商工業運動からの遮断——これがウラルの全景である。

鑛業の南方地域は、（註。鑛業統計に於て「南部ロシア及び西南ロシア」と云はれてゐるのは、ウオルインスク、ドンスク、エカテリノスラフ、キエフ、アストラハン、ベッサラビヤ、ボドリスク、タウリーツ、ハリコフ、ヘルソン及びチェルニーゴフの諸縣で、引用した數字はこれ等の縣に關係するものである。以下の南方に關する凡ては、（僅かに變更すれば）ポーランドにも適用されるものである。このポーランドは改革以後の時代には、鑛業地域として有名であつた。）多くの點に於てウラルとは正反對をなしてゐる。ウラルは古く、ウラルを支配してゐる制度は「數世紀の間に神聖化されてゐる」だけ、それだけ南方は若く、そして組織時代にある。最近十年間に此處で生長した純資本主義的工業は、傳統も階級も國民性も幽閉された一定の住

民も知らない。南部ロシアには、外國資本と技師と労働者とが、續々と移住したし、また移住しつつあるが、現時の熱中時代（一八九八年）には、アメリカの製造所が相次いで其處へ移されてゐる。國際資本は、易々と税關の壁の内部へ入り、「他人の」地盤に根を卸した。即ち *bene, ibi patria*……（譯者註。住みよい處に祖國があるの意。）である。左にウラルが南方に壓迫されてゐることの統計的資料を示す。

年次	銑鐵製造量 (單位千ブロード)				帝國内に於ける石炭產出總量 (單位百萬ブロード)	
	帝國内の總量	%	ウラルに於て	%		
一八六七	一七,〇八	一〇〇	二,〇八四	六五,一	〇,三	二六,七
一八七七	一四,五九	一〇〇	一六,一五七	六五,四	一,五九六	一一〇,一
一八八七	三〇,三九	一〇〇	二三,七五九	六三,三	四,一五八	二七六,八
一八九七	二四,七六	一〇〇	四,一八〇	三五,八	四,三四九	六八三,九
一九〇二*	一五,六六	一〇〇	四,七七五	二六,二	八四,二七三	一,〇〇五,二

*一八九八年に於ける帝國內の銑鐵製造量は、一億三千三百萬ブードで、その中六千萬ブードは南露で、四千三百萬ブードはウラルであつた。(一八九九年の「ルースキヤ・ヴェードモスチ」第一號。)

これ等の數字によつても、現在ロシアに於て如何なる技術的革命が行はれつゝあるか、また資本主義的大精工業が、生産力發達の爲に如何に偉大な技量を發揮しつゝあるかと、一目瞭然である。ウラルの支配力は、奴役労働と技術的陳腐と停滞との支配力に等しかつた。(註。勿論ウラルの鑛業家等は、幾分異つた事情を描き出してゐる。彼等は前年の會議に於て、次のやうに雄辯に泣きごとを述べた。『ウラルの歴史的功績は、周知の通りである。二百年間に互つて、ロシア全體はウラル製鐵所の製品を以て耕したり、刈つたり、鍛へたり、掘つたり、伐つたりしたのである。ロシアはその胸にウラルの銅で作つた十字架を懸けて來た。ウラルの車軸を附けた馬車に乗つて來た。ウラルの鋼鐵で作つた小銃で射撃した。ウラルの鍋で揚菓子を揚げた。ポケットの中ではウラル製の五哥貨幣の音をさせた。ウラルは全ロシア國民の需用を満して來たのである。』……(ロシア國民は殆んど鐵を用ひなかつた。一八五一年には、ロシアに於ける銑鐵需用量は、一人に對し約一四フントであり、一八九五年には、一、一三ブードであり、一

八九七年には、一、三三ブードであつた。)……『ロシア國民の必要と趣味とに應じて生産品を作つた。ウラルは寛大に(?)その天然富源を消費し、流行を追はず、レールや煖爐のロストルや紀念碑の製作に誘惑されなかつた。そして彼はその永久の奉仕の爲に、勝手な時に忘れられ、見棄られた。』(一八九七年の『財政通報』第三二號、即ち『ウラルに於ける鑛業家會議の總計』)實際『數世紀の間に神聖にされた』基礎に對する何と云ふ侮辱だらう! 此處で悪いのは、矢張りこの狡猾な資本主義である。資本主義は、我國の國民經濟に『斯の如き動搖性』を齎したのである。舊習によつて生活し、『レール製造に誘惑されず、』ウラルの鍋で揚菓子を揚げるばかりが能ではあるまい! これに反し今吾人の見る所では、ロシアに於ける鑛業の發達は、西歐に於けるそれより、また一部分は北アメリカに於けるそれより迅速である。一八七〇年ロシアは世界製造量の二・九%の銑鐵、(七億四千五百萬ブードの中二千二百萬ブード)を産出し、一八九四年には五・一%を(十五億八千四百二十萬ブードの中八千三百三十萬ブード)を産出した。(一八九七年の『財政通報』第三二號)最近十年間に(一八八六年—一八九六年)ロシアに於ける銑鐵製造は、三倍になつた。(三千二百五十萬ブードが九千六百五十萬ブードに)然るに例へばフラ

ンスの如きは、二十八年間に（一八五二年—一八八〇年）漸く斯の如き進歩を遂げた。合衆國は二十三年間に、（一八四五年—一八六八年）イギリスは二十二年間に、（一八二四年—一八四六年）ドイツは十二年間に、（一八五九年—一八七一年。一八九七年の『財政通報』第五〇號参照）斯の如き進歩を遂げた。若い國々に於ける資本主義の發達は、古い國々の前例と援助とにより、著しく速められる。勿論、最近の十年間（一八八八年—一八九八年）は、特別な熱中時代である。この時代は、凡ての資本主義的全盛時代の如く、必ず危機を招來する。然し資本主義的發達は、さうでなしには、即ち一般を飛び超えては進み得ないのである。
 製造に機械を用ゆることと、労働者數の増加とは、南露に於てはウラルより遙かに速く行はれた。（註。ボゴリューブスキイ氏の計算によると、一八六八年に、鑛山事業に用ひられた蒸汽機械は、五六八臺で、蒸汽力は一三、五七五であつた。）

年次	鑛山業に應用された蒸汽機械と蒸汽力				鑛業労働者數		
	ロシアに於ける總數	ウラルに於て	南部に於て	ロシアに於ける總數	ウラルに於て	南部に於て	
一八七七	八九五	二七、八八〇	二六八	一六二	二五六、九九	一四、四四五	一三、八六五
一八九三	二、八五三	二五、四九元	五五〇	三〇、七五九	四四、六六六	二二、六三〇	五、六七〇

斯くしてウラルに於ける蒸汽力の數は、僅かに二倍半だけ増加してゐるのに、南露では六倍に増加してゐる。ウラルに於ける労働者數は、 $1\frac{2}{3}$ 倍になつてゐるのに、南部では殆んど四倍になつてゐる。（註。鑛業に於ける労働者數は、ウラルでは一八八六年に一四五、九一〇人、一八九三年に一六四、一二六人であつたのが、南露に於ては、五、九五六人と一六、四六七

入とであつた。増加は $1\frac{3}{4}$ 倍(約)と $2\frac{3}{4}$ 倍とである。(一九〇二年度の蒸汽機械數と蒸汽力數に關する資料はない。鑛業労働者數は、(製鹽労働者を除いて)一九〇二年にはロシア全體で六〇四、九七二人であつた。その中ウラルの方に二四九、八〇五人で、南露の方は一四五、二八〇人であつた。(第二版増補。編輯者。))^①それ故に實際資本主義的大工業は、労働者の労働生産力を著しく高上させると共に労働者數をも迅速に増加させる。

南露と共にカフカズのことをも言つて置く必要がある。カフカズは改革後の時代に鑛山業が驚くべき生長を遂げたことにより特質附けられてゐる。六十年代には百萬ブードにも達しなかつた(一八六五年には五十五萬七千ブード)重油產出量は、一八七〇年になると、百七十萬ブードに達し、一八七五年には五百二十萬ブードに、一八八〇年には二千五百五十萬ブードに、一八八五年には一億一千六百萬ブードに、一八九〇年には二億四千二百九十萬ブードに、一八九五年には三億八千四百萬ブードに、(編輯者註。初版には「一八九五年には約四億ブード、一八九六年には四億二千九百九十萬ブード」となつてゐる。)^②一九〇二年には六億三千七百七十萬ブードに達してゐる。而も重油は殆んど全部バクー縣に於て產出するのである。そしてバクー市は

「眼にも留らぬやうな小さい町から人口十一萬二千を有するロシア内第一流の工業中心地となつた。採油業と製油業との長足の發達は、ロシアに於て石油の需用を盛んならしめた。その石油は、アメリカ産の石油を全く壓倒した、(工場的製油により、石油が安くなると共に各個人の需用量が増加した。)そして重油の殘存物は、燃料として益々盛んに工場や製造所や鐵道などで使用されるやうになつた。(製造上の需用が増加した。)(註。一八八二年には汽關車の六二%以上は薪を焚いてゐたが、一八九五年—一八九六年には薪を焚く汽關車は二八・三%、重油を焚くものは三〇%、石炭を焚くものは四〇・九%となつた。)(生産力」第一七の六二。)重油工業は國內市場を征服すると、國外市場を探し始めた。アジアへの重油輸出は、非常に迅速に生長したが(「一八九七年の『財政通報』第三二號)これはロシアの資本主義の爲に國外市場はあり得ないと説明したがる或るロシアの經濟學者の絶對的豫言に反するものである。))カフカズの鑛山工業に従事する労働者數は、矢張り非常に迅速に、即ち一八七七年の三、四三一人から一八九〇年の一七、六〇三人にまで生長した。つまり五倍に増加したのである。

南露に於ける工業組織を説明する爲にドネツク流域地帯の採炭業に關する資料を採ること

労働数による 炭坑の分類	ドネーツク炭産地に於て		一炭坑に對する割合	
	の坑炭	の坑横と坑堅	者働勞	炭石
一、十人以上の労働者を有つ炭坑	二七	三三	六、四	六、四
二、十人以上の労働者を有つ炭坑	七	一〇二	一六、二	五四、三
三、二十人以上の労働者を有つ炭坑	二九	三三九	四八、三	二四一、一
四、百人以上の労働者を有つ炭坑	二九	一六七	二四〇、四	二、〇三八、九
五、五百人以上の労働者を有つ炭坑	五	六七	七三九、六	四、六三三、八
六、千人以上の労働者を有つ炭坑	五	三、六九八	一、七六六、八	一七、八六八、三
労働者数不明の炭坑	九	四〇(二、二九六)	一五、〇〇八	一八
合計	二六九	七六二、三五、一六七	一八三、一六	二二八
			五、八二六	九三、五
			六八一、三	〇、九
			二二、六	七、一

にしよう。(此處では炭坑の中位のものは、ロシアの他の凡ての地域に於けるものよりも小さい。)労働者の数によつて炭坑を分類すると、斯んな光景を呈する。(二八六頁参照)

斯くこの地域には、(たゞこの地域に於てのみ)極端に小さい農民の炭坑がある。然しこれ等の炭坑は、その数が多いにも拘らず、一般の採炭業に於ては全く微々たる役目を演じてゐるに過ぎない。(一〇四の小炭坑は、全炭産量の二%を出すに過ぎない。)そして特に労働生産力が著しく低い。その反對に三七の大炭坑は、労働者總数の約五分の三を占め、全採炭量の七〇%以上を出してゐる。労働生産力は、炭坑の規模が大きくなるに従つて、剩へ機械の應用に無關係に高まる。例へば、蒸汽力の數により、または一労働者の生産量によつて、炭坑は五種類または三種類となる。)ドネーツク流域地帯に於ける採炭業の集中は、益々發達して來た。即ち一八八二年—一八八六年の四年間に、五二二人の石炭搬出者の中から二一人は各々五、〇〇〇車以上(即ち三百萬ブード)を運び出し、全部で四八〇、八〇〇車中二二九、七〇〇車を、即ち畧半数近く運び出したことになる。一八九一年—一八九五年の四年間に、搬出者は八七二人で、その中五五人は各々五、〇〇〇車以上を出した。一人が全部で一、一七八、八〇〇車の中から九二五、四

〇〇車を、即ち總數の十分の八以上を運び出した譯である。(註。エヌ・エス・アヴダーゴフ氏の資料「ドネツク採炭工業の簡單なる統計的概観」ハリコフ、一八九六年。)

鑛山工業の發達に關して今迄述べた資料は、二つの關係に於て特に重要視されてゐる。即ち第一に、これ等の資料は、特に明瞭に社會經濟關係變遷の本質を示してゐる。その變遷は、ロシアに於ける國民經濟の凡ての範圍に於て行はれてゐるものである。第二に、これ等の資料は、發達しつつある資本主義社會に於て、製造材料を、即ち個人的需用の對象でなく、製造上の需用の對象を造る所の工業範圍が、特に迅速に生長しつつあると云ふ理論的斷定を説明するものである。社會經濟に於ける二様の組織の變遷は、鑛山工業に於て特に明瞭に示されてゐる。それは、此處では特別地域が二様の組織の典型的代表者となつてゐるからである。即ち一方の地域に於ては、資本主義以前の古い習慣を見ることが出来る。幼稚で平凡な技術と場處に縛り付けられた住民の個人的束縛と堅固な階級的傳統と獨占とを見ることが出来る。他の地域に於ては一切の傳統との完全な分離、技術的變革、純資本主義的大精工業の迅速なる成長を見ることが出来る。(註。最近ウラルも新生活條件の影響の下に革新されるやうになつて來た。而してこの革

新は、鐵道が若しウラルを更に密接に「ロシア」と結び付けるやうになつたならば、一層迅速に行はれるであらう。この點に於て、特に重要な意義を有ち得るものは、豫定通りにウラルと南露とが鐵道により連結され、ウラルの鑛石とドネツクの石炭とが交換されるやうになることである。今日迄ウラルと南露とは、殆んどお互に競争せず、異つた市場に於て活動し、主に官廳の注文で立つてゐた。然し、豊富な雨のやうに降り注いだ官廳の注文は、決して永續するものではない。(この實例から見ると、特に經濟派——民衆派の誤謬が明白である。彼等はロシアに於ける資本主義の進歩を否定し、我國の企業家等は農業に於ては好んで請負仕事に走り、工業に於ては作業の家庭分配に走り、鑛山業に於ては労働者の固着と小作業場間の法律による競争禁止とに走ると云ふことを指摘してゐるが、斯の如き議論は非論理的である、この議論には歴史的背景が、全然無視されてゐることが眼に映ずる。實際、我國の資本主義は、資本主義前の經濟方法の利益に乗じようとする我國企業家の傾向を計算に入れて置かなければならないのに、資本主義の發達を阻止し、而も多くの場合法律の力を以て支へられてゐる舊習慣の遺風の方は、それを計算に入れなくてもよいのは、一體何故であらうか！例へば、南露の鑛山業者等

が、労働者の固定と小作業場の競争に對する立法的禁止とを渴望してゐると云ふことは、何も驚くに當らない。何故かと云へば、鑛山業の他の地域に於て、この固定とこの禁止とは、昔から今日迄存在してゐるからである。何故かと云へば、他の地域に於て、製造所所有者等は技術が拙劣で労働者が極めて安く、且つ従順である爲に、鐵道製造に於て何の心配もなく「一哥に對して一哥を得、また時としては一哥に對して一哥半も得る」(註。エグーノフの「家内工業研究」第二卷一三〇頁)ことが出来るからである。で、寧ろロシアの資本主義前の經濟制度を理想化する能力ある人々が、即ち資本主義の發達を阻害する凡ての陳腐な施設を根絶することの最も痛切な成熟した必要に眼を閉ぢてゐる人々が、斯の如き條件の下にあることに驚くべきではなからうか?(註。例へばエヌーオン氏の如きその凡ての悲歎を單に資本主義にのみ向けた。(殊に南露の鑛山業に關し、「家内工業概観」二二一及び二九六頁)そしてロシアの資本主義關係を我國の鑛山業の資本主義前の組織に全然變へて了つた。)

他面鑛山業の生長に關する資料が重要な譯は、その資料が個人的需用品生産の生長に比較すると生産需用品の爲の資本主義と國內市場の方が遙かに迅速な成長を遂げてゐることを示してゐるからである。エヌーオン氏の如きは、この事情を無視し、鑛山業生産品に對する國內的全注文が「多分極めて速かに滿されるであらう。」などと判斷してゐる。「家内工業概観」二二三)それは、金屬や石炭やその他のものの需用量(一住民に對して)が、資本主義社會に於て不變のまま停滯せず、また不變のまま停滯し得ずに、必然的に高められて行くからである。鐵道網が新たに一露里延長される毎に、職場が新たに建てられる毎に、農村のブルジョアが鋤を仕入れる毎に、鑛山業生産品に對する需用量は高まるのである。例へば、若し一八五一年から一八九七年までのロシアに於ける鉄鐵の需用が、一住民に對し一四フントから一 $1\frac{1}{3}$ ブードにまで生長したとすれば、この後の量は、更にまだ餘程生長するやうになる。それは、先進各國に於ける鉄鐵需用量に接近する爲である。(ベルギーやイギリスでは、一住民に對し六ブード以上である。)

五 資本主義的大企業に於ける労働

者數は増加するか?

吾人は工場制工業と鑛山工業とに關する資料を瞥見したので、こん度は此處に掲げた問題に對して回答を試みてまい。經濟派——民衆派はこの問題に興味を有ち、この問題を消極的に解決した。(ヴェー・ヴェー氏、エヌ——オン氏、カールイシェフ氏、カブルコフ氏等は、ロシアに於ける製造所工場労働者数は、増加しつゝあるが——假令増加しつゝあるとしても——住民の増加より遅いと断定した。)先づ言つて置かねばならぬことは、この問題の本質が、商工民は農業住民のやうに増加してゐるか何うか、(この事は後に述べる)と云ふ點か、或は大機械精工業に於ける労働者数は、増加してゐるか何うかと云ふ點かにある筈だと云ふことである。工業的小作業場若くば粗工業に於ける労働者数は、發達しつゝある資本主義社會に於て増加すべきであるとは断定出来ない。何故かと云へば、工場により多く幼稚な形態を帯びた工業を不斷に壓迫するからである。先に詳述した如く、我國の製造所工場統計資料は、必ずしもこの工場なる術語の科學的意味に於て工場に屬する譯ではない。

吾人は吾人の興味を惹く問題に就いての資料を瞥見する爲に、第一に凡ての製造業に關する報告を、第二に長い期間に亘る報告を取らねばならぬ。たゞこの條件の下にのみ、資料の多少

の比較が保證されるのである。吾人は一八六五年及び一八九〇年を——改革後の時代の二十五年間の時期を取り、手許にある統計的資料に總計を與へることとする。製造所工場統計は、一八六五年度分として、最も充實した報告を提供し、その中酒造業、ビール製造業、甘菜製糖業及び煙草製造業を除いた歐露の凡ての製造業に於ける製造所工場労働者を三八〇、六三八人と算へてゐる。これ等の製造所に於ける労働者数を決定する爲には、手許にある唯一の『陸軍統計集』の資料を採用することとなる。而もこれ等の資料は、先に證明した如く、訂正さるべきである。前記の製造業に於ける一二七、九三五人の労働者を付け加へると、(註。ビール製造業に於ては、六、八二五人。此處にも誇張がある。然し訂正する爲に材料がない。甘菜製糖業に於ては、六八、三三四人『大藏省年報』による。)煙草製造業に於ては、六、一一六人(訂正濟)酒造業に於ては、四六、六六〇人(訂正濟)吾人は一八六五年の歐露に於ける製造所工場(國産税を賦課され、または賦課されぬ製造業)労働者總數五〇八、五七三人と云ふ總計を得る。(註。ツীগン・バラノフスキイ氏は一八六六年度の分にヴィシニコフ氏の四九三、三七一人と云ふ數字を引用してゐる。『工場』三三九頁)吾人は如何にして斯の如き數字が得られたかを知らない。然

しこの數字と吾人の引用した數字との差は、極く僅かである。(六五%の増加で、住民の増加より更に著しい。然しながら注目する必要のあることは、實際上の増加は、疑ひもなく、これ等の數字の示す以上であつたと云ふことである。即ち既に詳細に證明された如く、一八六〇年代の製造所工場の資料が誇張されてゐるのは、小さい家内工業的、手工業的及び農業的各作業場は勿論家庭労働者までもこれに含まれてゐる結果である。たゞ遺憾ながら吾人は、材料が不足である爲に、これ等凡ての誇張を完全に訂正し得ない。殊に後に最大工場に於ける労働者數に關するもつと正確な資料を引用することになるから、此處では寧ろ部分的な訂正を避ける方がいゝと思ふ。

製鐵所の統計に移る。一八六五年には鑛夫の數は、製銅業並に製鐵業と、それから金坑と白金坑とに就いてのみ算へられてゐる。歐露では一三三、一七六八である。一八九〇年には、これ等の製造業に於ける労働者は、二七四、七四八人であつた。即ち二倍よりもつと多い譯である。この最後の數は、一八九〇年度の歐露に於ける鑛夫總數の八〇・六%に當る。前記の製造業は、一八六五年に鑛夫總數の八〇・六%を網羅してゐたことを認めると、(註。諸他の鑛山業

中には、労働者數が餘り増加しないらしいものもあれば、(製鹽業)労働者數が非常に盛んに増加すべき筈のものもあれば、(採炭業及破石業)また一八六〇年には全くなかつたものもある。

(例へば水銀採取業)吾人は一八六五年には鑛夫總計一六五、二〇三人を得、一八九〇年には三二四〇、九二二人を得る。一〇七%の増加である。

更に資本主義的大企業に於ける労働者數には、矢張り鐵道労働者も屬してゐる。(一八九〇年歐露に於ては、ポーランド及びカフカズを合して、鐵道労働者は二五二、四一五人であつた。

(註。『鐵道並に内地水路の統計的概観』サント・ペテルブルグ。一八九三年。二二頁。交通省發行。遺憾ながら吾人はたゞ歐露だけを區別する材料を有つてゐなかつた。吾人は鐵道労働者中に常備労働者ばかりでなく、臨時労働者(一〇、四四七人)と日雇労働者(七四、五〇四人)を算へる。臨時労働者の一年の平均給料は、一九二留で、日雇労働者の方が二三五留である。一日の平均日當は、七八哥である。それ故に臨時労働者も日雇労働者も一年の大部分は仕事をしてゐる。従つてエヌ——オン氏がしてゐるやうに『家内工業概観』(二四頁)彼等を見通すことは誤りである。)一八六五年に於ける鐵道労働者數は、不明であるが、然しその數は略々近い見當

で決定出来ぬこともない。何故かと云へば、鐵道網の一露里の中にある鐵道労働者數は、餘り激しく動搖しないからである。一露里に九人宛と算へて、一八六五年に於ける鐵道労働者數は三二、〇七六人となる。(註。一露里に對する鐵道労働者數は、一八八六年が九・〇、一八九〇年が九・五、一八九三年が一〇・二、一八九四年が一〇・六、一八九五年が一〇・九であつた。斯くこの數は、明かに増加の傾向を帯びてゐる。『一八四五年の終りに於けるロシアの鐵道は三、五六八露里であつた。』——第二版には漏れてゐる。編輯者。一八九〇年及び一八九六年の『ロシアに於ける報告集』、一八九七年の『財政通報』第三九號參照。辯明して置くが、吾人は本節ではただ一八六五年と一八九〇年との資料を比較するだけにしたのである。それ故に吾人が鐵道労働者數を帝國全體から取らうが、或はたゞ歐露だけから取らうが、一露里に九人宛としようが或はそれ以下としようが、鑛山工業の全範圍に互らうが、或はその中から一八六五年度の資料を有つてゐるものだけに止めようが、そんなことは全く何うでもいふことになる。)

吾人の計算を總計することとしよう。

資本主義的大企業に於ける労働者數。(單位千人)			
年次	工場制工業に於て	鑛山工業に於て	鐵道に於て
			總數
一八六五	五〇九	一六五	三三一
一八九〇	八四〇	三四〇	一二五三
			一、四三二

斯く資本主義的大企業に於ける労働者數は、二十五年間に二倍以上に増加した。即ち労働者數は一般住民より遙かに速く増加したばかりでなく、都會住民よりも迅速に増加した。(註。歐露に於て一八六三年には、都會住民は六百十萬人であつたものが、一八九七年には一千二百萬人になつた。)それ故に労働者が農業から、小營業から工業的大企業へ益々多く引離されて行くことは、最早疑ふ餘地がない。(註。資本主義的大企業に於ける労働者數に關する最も新しい資料は、左の如くである。一九〇〇年度の國産税を賦課されない企業に於ける製造所工場労働者數に就いての資料がある。一九〇三年度の國産品製造業に關する資料がある。一九〇二年度の鑛夫に關する資料がある。鐵道労働者數は、一露里に對し一人宛と算へてこれを決定するこ

とが出来る。(一九〇四年一月一日までの報告) 一九〇六年の『ロシア年報』及び一九〇二年の『鑛山工業に關する調査報告集』参照。

これ等の資料を綜合すると、左の如き結果となる。歐露五十縣に於て、一九〇〇年—一九〇三年まで製造所工場労働者は、一、二六一、五七一一人。鑛山労働者は四七七、〇二五人。鐵道労働者は四六八、九四一人。合計二、二〇七、五三七人。ロシア帝國全體では、製造所工場労働者は一、五〇九、五一六人、鑛山労働者は六二六、九一九人、鐵道労働者は六五五、九二九人で、合計二、七九二、三七四人である。本文に述べたことは、更にこの數字をも證明してゐる。(第二版の註。) 我が民衆派が屢々引用し、また屢々悪用したその統計資料は、かう言つてゐる。然しながら彼等の統計悪用の最頂點となつてゐるのは、實際幻想的な左の如き方法である。即ち全住民に對する製造所工場労働者數の關係が採用されてゐる(一)そして得られた數字(約一%)を基礎として、労働者のこの『一握』は、實に微々たるものであるなど、言つてゐる! 例へばカブルコフ氏の如きは、『ロシアに於ける工場労働者』の住民に對する割合計算を反復して、次の如くに言ひ續けてゐる。『西歐では(一)加工々業に従事する労働者數は……』『工場労働者』と

『加工々業に従事する労働者』とは、全然同一ではないと云ふことは、何んな中學生でも承知してゐることではあるまいか?……イギリスに於ける五三%からフランスに於ける二三%まで『全住民に對し全く異つた關係を成してゐる。』『工場労働者階級の關係に於ける差異は(一)西歐でも我國でも極めて大きく、我國の發達步調と西歐の發達步調とを同一視すると云ふやうなことは、あり得ないことである。』斯んなことを書いた者は、教授で、専門の統計學者である! 彼は異常の勇敢を以て一氣に二つの過言を敢てしてゐる。即ち(一)工場労働者は、加工々業に従事する労働者と置き換へられてゐると。(二)加工々業に従事する労働者は、加工々業に従事する住民と置き換へられてゐると。我國の學識ある統計家達の爲に、これ等の差別の意味を説明しよう。一八九一年の記録によると、フランスでは加工々業に従事する労働者は、三百三十萬人——住民の十分の一以下(仕事別にされた住民は、三千六百八十萬人。仕事別にされない住民は、百三十萬人)であつた。これは、獨り工場労働者であるばかりでなく、凡ての工業的作業場や企業に於ける労働者である。加工々業に従事する住民は、九百五十萬人(全民の約二六%)であつた。此處では經營主及びその他(百萬人)も労働者數に加へられてゐる。次に従業員は

二十萬人、家族は四百八十萬人、使用人は二十萬人であつた。(註。『The Statesman's Yearbook』一八九七年。四二七頁。)ロシアに於けるこれ等の關係を説明する爲には、實例として各部分的中心地を捉へることとなる。何故かと云へば、全住民の職業統計は我國にないからである。ペテルブルグでは製造所工場統計は、一八九〇年に製造所工場労働者五一、七六〇人を算へてゐるが、『工場案内』による)一八九〇年十二月十五日のサンクト・ペテルブルグの人口調査によると、加工々業に従事する者は、三四一、九九一人であつた。而して加工々業による職業別は、左の註の如くである。(註。『一八九〇年の人口調査によるサンクト・ペテルブルグ』サンクト・ペテルブルグ。一八九三年。二乃至十五の營業別總計がある。營業に従事してゐるものは、全部で五五一、七〇〇人、その中二〇〇、七四八人は、商業、運送業、飲食店の營業に従事するものである。『獨立労働者』と云ふのは、雇傭労働者を有たぬ小生産者である。)

男 女 數

	獨立労働者(即ち自給労働者)	家族及び使用人	合計
經營者	一三、八五三	三三、一〇九	五〇、九六二
管理者(従業員)	一一、二二六	四、五七四	六、八〇〇
労働者	一四八、一一一	六一、〇九八	二〇九、二〇九
單獨労働者	五一、五一四	一一三、五〇六	七五、〇二〇
總計	二一五、七〇四	一二六、二八七	三四一、九九一

他の實例がある。即ちニゼゴード縣ゴルバトフスキイ市外地帯ボゴロドスコエ村(この村は、前述した通り、農業地でなく、『まるで皮革製造所』の觀を呈してゐる。)では、一八九〇年度の『工場案内』に依ると、三九二人の製造所工場労働者が算へられてゐる。然るに營業に従事してゐる住民は、一八八九年の自治會記録によると、約八千人ばかりになる。(住民全體は九、二四一人で、營業に従事してゐる家族は、十分の九以上である。)エヌ——オン氏、カブル

ニコフ氏一派は、この數字を考へて見るが良い？

第二版の増補。現在吾人は全住民の職業統計に關する一八九七年の一般的記録の資料の結果を有つてゐる。左に吾人が全ロシア帝國に就いて作つた資料を掲げて置く。(註。「一八九七年一月廿八日の最初の全人口調査資料研究の結果を帝國全體に就いて集めた一般資料集」中央統計委員會發行。第二卷、二一の表、二九六頁。爾餘の職業分類は左の如くである。(イ)一、二及び四、(ロ)三及び五―一二、(ハ)一四及び一五、(ニ)一六及び六三―六五、(ホ)四六―六二(ヘ)四一―四五、(ト)一三、(チ)一七―二二、(リ)二二―四〇。(單位百萬)

職業	獨立者		家族	全人口
	男	女		
(イ)官吏及び軍人	一、五	〇、七	二、二	二、二
(ロ)僧侶及び自由職業者	〇、七	〇、九	一、六	一、六
(ハ)座食者及び恩給生活者	一、三	〇、九	二、二	二、二
(ニ)自由を失へる者、淫賣婦	〇、六	〇、三	〇、九	〇、九
(三)職業未定者、職業不明の者	四、一	二、八	六、九	六、九
非生産住民の合計				

(ホ)商業家	一、六	三、四	五、〇
(ヘ)通信交通事業關係者	〇、七	一、二	一、九
(ト)民間事業勤務者、使用人、日雇人足	三、四	二、四	五、八
半生産住民の合計	五、七	七、〇	一二、七
(チ)農業家	一八、二	七五、三	九三、七
(リ)工業家	五、二	七、一	一二、三
生産住民の合計	二三、四	八二、六	一〇六、〇
總計	三二、二	九二、四	一二五、六

これ等の資料が、製造所工場労働者數を全人口に比較しようとする民衆派の方法の馬鹿氣たものであると云ふことに就いて前に述べた所を完全に確定してゐることは、言ふ迄もない。

ロシアの全人口を職業別にするに就いた引用した資料を、先づ第一にロシアに於ける全商品生産と資本主義との基礎としての社會的勞役類別の説明の爲に分類するのは、興味のあることである。この見地から全住民は三つの大きな項目に區別さるべきものである。即ち一、農業住

民、二、商工業住民、三、非生産（もつと正確に言ふと、經濟的活動に参加しない）住民である。引用した九組（イからリまで）の中で、たゞ一つの組だけは、この根本的な三項目中の何れにも直ちに、そして完全に屬せしめることが出来ない。それは、トの組、即ち民間事業勤務者使用人、日雇人足等である。この組は、商工業住民と農業住民との略々中間ぐらゐに配置しなければならぬ。吾人はこの組の中で都市に居住してゐるものとして申告された部分（二百五十萬人）を第一の項目に屬せしめ、市外地帯に居住する者（三百三十萬人）を第二の項目に屬せしめた。さうすると、ロシアの全住民分類表は、左の如きものとなる。

農業住民	九七、〇（百萬單位）
商工業住民	一一、七（〇同）
非生産住民	六、九（〇同）
合計	一一五、六（百萬單位）

この分類表で明かである通り、一面商品流通と、それから商品生産とは、ロシアに於て全く堅固な脚で立つてゐる。ロシアは、資本主義國である。他面それによつて判ることは、ロシアが他の資本主義諸國に比すると、その經濟的發達に於て、まだ非常に遅れてゐると云ふことである。

更にまだある。吾人が本書に於て行つた分解の後に擧げたロシアの全住民の職業的統計は、ロシアの全住民がその階級的状態に應じて、即ち社會的生産組織に於けるその境遇に應じて區別されるのは、一體如何なる根本的カテゴリーに據るものであるかと云ふことを略々決定する爲に利用され得るし、又利用されるべきものである。

斯の如き——つまり大略的な——決定の可能な理由は、吾人が經濟的な根本集團に農民を一般的に分類することを知つてゐるからである。所が、ロシアの農業住民の全大衆は、これを全部農民社會と見ることが出来る。何故かと云へば、地主の數は、その總計に於て全く微々たるものだからである。のみならず、地主の大部分は、座食者官吏、上流貴顯及びその他のものとして算へられてゐる。九千七百萬人の農民大衆に於て、三つの根本的集團を區別する必要があ

る。即ち下の組は——住民中のプロレタリア及び半プロレタリア級で、中の組は——貧乏な小經營者で、上の組は——裕福な小經營者である。異つた階級的要素としてのこれ等集團の根本的經濟的特徴は、吾人が前に詳細に解剖した通りである。下の組は——無産住民で、主として若くは半ばまでは勞働力賣却によつて生活してゐる。中の組は——極めて貧乏な小經營者である。何故かと云へば、中流農民は良い年でさへ辛ふじて辻褄を合せてゐるからである。然し此處での生活の主なる根源は、——「獨立した」(勿論、獨立したかのやうな)小營利事業である。最後に上の組は——裕福な小經營者で、相當に多數の小作人や日傭人夫や分讓地を有つてゐる者、概して凡ての雇傭勞働者を擲取してゐる者である。

總額の中で、これ等の集團に落ちて行く金額の大略は、五〇%、三〇%及び二〇%である。吾人はこれまで絶えず戸數若くは事業數の分前を取扱つて來た。でこん度は住民の分前を取扱ふことにしよう。この變更の爲に下の組は増加し、上の組は減少する。然し實際に斯の如き變更は、疑もなく過ぎ去つた十年間にもロシアに於て起つた。これを争ふ餘地なきまでに證明してゐるのは、農民の間に馬がなく、農民社會が瓦解し出したことや、それから農村が貧乏で、

仕事がないことなどである。

つまり吾人は農業住民の中から約四千八百五十萬人のプロレタリア住民と半プロレタリア住民と、約二千九百十萬人の最も貧しい小經營者とその家族と、約千九百四十萬人の裕福な小營利事業に従事してゐる住民とを有つてゐる譯である。

更に商工業住民と非生産住民とを如何に割り當てるかと云ふ問題が起る。非生産住民の中には、明かに大ブルジョアの住民の要素がある。即ち凡ての座食者は(資本と不動産とからの收入で生活する者は)——我が統計に於ける第十四組の最初の項目は——九十萬人である。次にブルジョア智識階級の部分と軍人や文官等の大官吏及びその他の部分とがある。此處へ持つて來なければならぬものは、全部で約百五十萬人ある。この非生産住民中の他の極地には、陸軍や海軍や憲兵隊や警察などの下級者(約百三十萬人)と使用人と多數の勤務者(全部で五十萬人以内)と殆んど五十萬人の乞食と浮浪者などが立つてゐる。此處では根本的經濟的タイプは最も接近してゐる集團をたゞ概算的に割當ることが出来る。即ち約二百萬人をプロレタリア住民と半プロレタリア住民とに(一部分は人足の一團に)約百九十萬人は最も貧乏な小經營者に、そ

して約百五十萬人は裕福な小經營者に割當てることが出来る。裕福な小經營者中には、従業員、官廳勤務者、ブルジョア知識階級などの大部分も算へられてゐる。

最後に、商工業住民中には、疑もなくプロレタリアートが最も多く、プロレタリアートと大ブルジョア間の淵が最も深い。然しながら調査書は、この住民の經營主、單獨労働者、労働者などに割當ることに關する何等の資料をも提供してゐない。たゞペテルブルグの工業住民に關する前記資料を模範とするより仕方がない。ペテルブルグの工業住民は、製造業に於ける境遇に従つて割當てられてゐる。これ等の資料を基礎として、概算的に約七%を大ブルジョアに、一〇%を裕福な小ブルジョアに、一二%を貧乏な小經營者に、六一%をプロレタリアートに屬せしめることが出来る。ロシア全體に於て、工業上の小製造業は、勿論ペテルブルグに於けるよりも遙かに活氣がある。然しその代り吾人は多數の單獨労働者と經營主の爲に家庭に於て働いてゐる家内工業家等とを半プロレタリア住民に屬せしめない。それ故にこの一般的に、そして全體的に採用した關係は、多分實際と僅かに異なるであらう。さうすれば吾人は約百五十萬人の大ブルジョアと、約二百二十萬人の裕福なブルジョアと、約四百八十萬人の貧乏な小生産者と、約千

三百二十萬人のプロレタリア及び半プロレタリア階級の住民とを商工業住民の爲に得た。
農業住民と商工業住民と非生産住民とを一緒に合すると、ロシアの全住民の爲に階級的境遇による大略的割當が得られる。

全 住 民	
大ブルジョア、地主、高級官吏等	約 三、〇 (百萬單位)
裕福な小經營者	同 三、〇 (同)
貧乏な小經營者	同 三、五、八 (同)
プロレタリアと半プロレタリア	同 六、三、七 (同)
合 計	約 一、二、五、六 (百萬單位)

吾人は我がカデット(譯者註。立憲民主黨)及びカデット化した經濟學者や政治家等の方面からロシアの經濟に關する斯の如き「單純化された」思想に對し憤激の聲が發せられることを疑は

ない。それは——嚴密なる解剖に於て經濟的矛盾の深淵を消滅させ、同時にこれ等の矛盾の全體に對する社會主義的見解の『粗雜』であることを訴へるのは、極めて便利であり、極めて有利である。吾人の到達したやうな結論に對する斯の如き批評は、勿論科學的意義を有つてゐるものではない。

それ等の數字の接近程度に關しては、勿論部分的不一致はあり得る。この見地からロシーツキイ氏の勞作、即ち『一八九七年ロシヤに於ける人口調査書』に注意を拂ふことは、興味がある。(『ミール・ボージイ』第八號、九五)著者は、勞働者と使用人との數に關する調査の直接資料を利用した。ロシヤのプロレタリア住民を彼は、この資料に據つて、二千二百萬人と算定し、農民と土地所有者とを八千萬人とし、經營者と商工業従事者とを約千二百萬人とし、非生産住民を約千二百萬人とした。

この資料に據ると、プロレタリアートの數は、吾人の結論に餘程接近してゐる。(註。此處でロシーツキイ氏の利用した勞働者と使用人との統計に就き詳細に論じてゐる餘地がない。この統計は、一見して分る如く勞働者數を餘りに減少し、過ぎてゐる。『賃銀』の影響を受ける農民の

貧困者中に、家内工業家及びその他の中に、半プロレタリア住民の偉大な大衆を否定すると云ふことは、ロシヤの經濟に關する凡ての資料を嘲笑することになる。たゞ記憶して置かねばならぬことは、歐露だけで、馬を有たぬ家が三百二十五萬戸、馬一頭だけを有つてゐる家が、三百四十萬戸であることや、賃借、『賃銀』、豫算及びその他に關する自治會統計報告の統一されてゐることを想ふだけでも、半プロレタリア住民の莫大なる數は、疑がはれなくなる。プロレタリア住民と半プロレタリア住民とを一緒にすれば、農民社會の半數を成すと云ふことを承認することは、多分農民社會の數を減少するもので、決してそれを誇張するものでないことを意味する。然るに農業住民を除くと、プロレタリア及び半プロレタリア階層の割合は、必ずまだ高い。

若し全一な經濟的光景を細分したくなければ、更に商工業監督者、従業員、ブルジョアの階級、官吏階級などの大部分を裕福な小經營者に屬せしめる必要がある。此處で吾人は非常に高い數字を以て斯の如き住民の數を決定すると同時に、極めて細心な行動をしたやうである。即ち貧しい小經營者の數を増加し、裕福な經營者の數を低下して、譯である。然し斯の如き

區別は、勿論統計の絶對的確實性を要求するものではない。統計は、多方面的な解剖を以て既定の社會的經濟的關係を説明すべきもので、吾人の間に屢々見るやうなそれ自體に於て目的を有つ態度に變ずべきものではない。ロシアの住民中に小ブルジョア階層の多いことを抹消することとは、取りも直さず我國の經濟的活動光景の虚飾を意味するものである。

六 蒸汽動力の統計

蒸汽動力を生産に應用することは、大機械精工工業の最も特質的な特長の一である。従つて、この問題に就いて有たれてゐる資料を瞥見するのは、興味あることである、一八七五年——一八七八年間に於ける蒸汽動力數を報じてゐるのは、『ロシア帝國の蒸汽動力統計用材料』(サンクト・ペテルブルグ、一八八二年、中央統計委員會發行)である。(註、十三部類の製造業の中から、一八九二年と比較する爲に、左の部類を、即ち一(農業)、十二(印刷業と石版刷業)十三(水道及びその他)を除くこととする、蒸汽運轉車は、蒸汽機械と一緒に數へる。)なほ一八九二年度の爲に、吾人は凡ての製造所工場と鑛山業とを網羅する數字『工場制工業に關する資料集』を有つてゐる。左にこれ等の資料を比較する。

工業に於ける蒸汽動力數

歐露(五十縣) ポーランド カフカズ シベリアと トルケスタン	一八七五年—一八七八年			一八九二年		
	蒸汽々罐	蒸汽機械	その蒸汽力	蒸汽々罐	蒸汽機械	その蒸汽力
帝國内總數	八、五〇	六、三三	二四、九七	一四、二四	一三、〇八	三四五、二〇
	七、三四	五、四〇	九、八八	一一、七二	一〇、四六	二五、四九
	一、〇七	七、七	一四、四〇	二、三六	一、九八	八、三六
	一一五	五	五三	五四	五四	五、二八
	一〇〇	七五	一、〇天	二三四	二三五	二、一一

十七年間に蒸汽動力數は、蒸汽力から云ふと、ロシアに於て三倍に、歐露に於て二倍半に増加したが、蒸汽機械數は、餘り多く増加しなかつた。それ故一臺の蒸汽機械の平均力は、著し

く高まつた。即ち歐露では一千八百蒸気力から二千蒸気力迄に、ポーランド王国では、一千八百蒸気力から四千百蒸気力迄に高まつた。従つて大機械精工業は、この期間に於て極めて迅速に發達したのである。蒸気力によると、一八七五年——一八七八年には、左の諸縣が他の諸縣より進んでゐた。即ちペテルブルグ縣(一七、八〇八蒸気力)モスクワ縣(一三、六六八蒸気力)キエフ縣(八、三六三蒸気力)ベルミ縣(七、三四八蒸気力)ウラヂーミル縣(五、六八四蒸気力)で——これ等の五縣を合すると、五八、三五二蒸気力となり、歐露に於ける總數の約五分の三に當る——次にはボドリスク縣が(五、四八〇)ペトロコフ縣が(五、〇七二)ワルシャワ縣が(四、七六〇)である。所が、一八九二年には、この順序は變つて、ペトロコフ縣(五、九〇六三)ペテルブルグ縣(四三、九六一)エカテリノスラフ縣(二七、八三九)、モスクワ縣(二四、七〇四)、ウラヂーミル縣(一五、八五七)キエフ縣(一四、二二二)となり——最後の五縣に於ける蒸気力は、一二六、五七二、即ち歐露に於ける總數の殆んど二分の一に相當するやうになつた——次にはワルシャワ縣(一一、三二〇)及びベルミ縣(一一、二四五)である。これ等の數字は、二つの新粗工業中心地が形造られたことを明示してゐる。即ち一はポーランドで、

他は南露である。ペトロコフ縣では、蒸気力の數は、一一、六倍に生長した。エカテリノスラフ縣とドン縣とを合すると、(註。一八七八年以後この兩縣の境界が變更されたので、吾人は兩縣を合するのである。)二、八三四から三〇、九三二に、即ち一〇、九倍に生長した。斯く迅速に生長したこれ等の精工業中心地は、後の場處から前の場所へ移動し、舊工業中心地を壓迫した。特に注意を惹くのは、これ等の資料に於て、生産需用品を作る工業、即ち鑛山業と金屬工業との特に迅速な生長が現はれてゐる點である。一八七五年——一八七八年には、この工業に於て、一、〇四〇の蒸気機械と二二、九六六の馬力とが、(歐露に於て)需用されたが、一八九〇年には、一、九六〇の蒸気機械と七四、二〇四の馬力とが需用された。即ち十四年間に於ける増加は、十六年間に於ける全工業の蒸気動力總數の増加以上で、生産材料を作る工業は、全工業中に於て益々大きい部分を占めるに至つたのである。(註。一八九二年以後のロシアに於て、蒸気動力の應用が如何に進歩したかと云ふことは、次の事實によつても分る。即ち一九〇四年には、工場監督者等の調査によると、六四縣に於て製造所工場用蒸気々罐が二七、五七九、農業用のものを除き、全部で三一、八八七の汽罐を算へた。(第二版の註。))

七 大工場の生長

我國の製造所工場統計資料の前記の如き不確實は、ロシアに於ける大機械精工業が、改革以後如何に發達したかを決定する爲に、吾人をして更に複雑な計算に走らしめた。吾人は最大の工場に關する、即ち作業場内に百人またはそれ以上の労働者を有する大工場に關する一八六六年、一八七九年、一八九〇年並に一八九四年——一八九五年度の資料を選擇した。(註。資料の出所。『大藏省年報』一、(七一の製造業だけの資料。『工場案内』第一版及び第三版——凡ての製造業に就いての資料。『一覽表』に於ても同様。然し『一覽表』と『工場案内』との資料を比較するには、『工場案内』中に入つてゐる製造業の中からレール製造業を除かなければならぬ。製造所工場労働數の中に家庭労働者をも加へるやうな作業場は、除かれてゐた。時としてはこの家庭労働の除外は、前記の出版物の註の中に直接に述べられてゐることもある。また時としては、この除外は、種々な年度の資料を對立させることから明白になることもある。例へば、サラトフ縣綿織物業に關する一八七九年、一八九〇年及び一八九四年——一八九五年度の

資料に比較。(第六章、第二節の「比較」)——Sinzheimer (『Ueber die Grenzen der Weiterbildung des fabrikmässigen Grossbetriebes in Deutschland,』Stuttg. 1893) (譯者註。シンツハイマー著) ドイツに於ける機械大企業發展の界限に就いては、五〇人及びそれ以上の労働者を有する大工場の企業に屬してゐる。この標準は、決して低いとは思はれない。然しロシアの資料を精算することの困難な爲に、たゞ大工場だけに制限されることとなつたのである。(註。工場外労働者は、一八九四年——一八九五年度の『一覽表』の資料に於てのみ嚴重に分離されてゐる。それ故前年度の(殊に一八六六年及び一八七九年の)資料が、註に於て述べたやうに訂正されたにも拘らず、矢張り幾分誇張されたまゝになつてゐるのは、あり得ることである。

これ等の大工場に關する調査報告を引用して置く。(次の頁參照)

一八六六年——一八七九年——一八九〇年度の資料から成るこの表の解剖を始める。大工場の總數は、この數十年間に次の如くに變つた。即ち六四四——八五二——九五一若くは%にすると、一〇〇——一三二——一四七に變つた。それ故に二四年間に大工場數は、殆んど一倍半も増加した譯である。のみならず、若し大工場の各書類に就いての資料を採るならば、工場が

歐羅に於ける最大工場 (左の年度の)

労働者数によ る工場類別	A 'するもの 九の労働者を有 九の労働者有			B 'するもの 五〇〇—九九 九の労働者有			C 'するもの 一〇〇— それ以上の労働 者有するもの 合計**		
	工場数	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數	工場数	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數	工場数	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數
勞働者數によ る工場類別	一八六六年	一八七九年	一八六六年	一八七九年	一八六六年	一八七九年	一八六六年	一八七九年	一八六六年
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六

工場數	A 'するもの 九の労働者を有 九の労働者有			B 'するもの 五〇〇—九九 九の労働者有			C 'するもの 一〇〇— それ以上の労働 者有するもの 合計**		
	工場數	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數	工場數	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數	工場數	總の有する 力動汽蒸する の數	勞働者數
一八九〇年	一八九五年	一八九〇年	一八九五年	一八九〇年	一八九五年	一八九〇年	一八九五年	一八九〇年	一八九五年
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
總の有する 力動汽蒸する の數	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四	五三〇〇四
勞働者數	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六
生單位	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六	九〇六

一はてし關しこれこ。るよに業造製の一七—料資の度申〇九八—年九七八—年六六八—年
 ばたま。のもたれさ課賦を税産國。るよに業造製の一七—料資の度申〇九八—年九七八—年六六八—年
 造製ルーベし但。るよに業造製の一七—料資の度申〇九八—年九七八—年六六八—年

大きければ大きいだけ、それだけより速くその数が増加するのを見る。(A、工場五一二—六四一—七二二。B、九〇—一三〇—一四〇。C、四二—八一—九九)。これは製造業の集中が盛んになりつゝあることを示すものである。

(機械を有する作業場の数は、工場の總數より迅速に生長しつゝある。即ち%にすると、一〇〇—一七八—一二二六となる。大作業場の数は、益々多く蒸汽動力の使用に移りつゝある。工場が大きいだけ、それだけより多くその中に機械附作業場がある。これ等の作業場の割合を、

此處に挙げた部類の工場總數に加へると、次の如き數字を得る。即ちA、三九%—五三%—六三%、B、七五%—九一%—一〇〇%、—C、八三%—九四%—一〇〇%。蒸汽

動力の應用は、製造業の規模擴張と、製造業に於ける協業の擴張とに密接な關係を有してゐる。

凡ての大工場に於ける労働者數は、一〇〇—一六八—二〇〇と云ふやうな%に變つた。

二四年間に労働者數は二倍になつた。即ち『製造所工場労働者』の總數の増加を決定した。一つの大工場に對する労働者の平均數は、年別にすると、三五九—四五八—四八八人であり、部類別にすると、A、二二三—二二二—二二〇、B、六六五—七〇六—六七三、C、

一、四九五—一、九三五—二、一五四であつた。それ故に最大の工場は、労働者の大部分を集めつゝある。

一、〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する工場は、一八六六年には大工場に於ける労働者總數の二七%を、一八七九年には四〇%を、一八九〇年には四六%を占めてゐた。

凡ての大工場の生産額の變化は、一〇〇—二四三—二九二の%で現はれ、部類別にすると、A、一〇〇—二〇一—一八七、B、一〇〇—二四五—三〇八、C、一〇〇—三二〇—四七七となる。それ故に凡ての大製造所の生産額は、殆んど三倍に増加した譯である。のみならず、工場が大きいだけ迅速にこの生長も行はれた。然しながら若し吾人が年々の労働生産力を各部類別に比較すると、幾分異つた現象を見る。凡ての大工場に於ける一労働者に割當てられる平均生産額は、八六六留—一、二五〇留—一、二六〇留となり、部類別にすると、A、九〇一留—一、四二〇留—一、一九一留、B、八〇〇留—一、二八二留—一、五七四留、C、八四一留—一、〇八二留—一、一八八留となる。それ故に(一労働者に割當てられる)生産額が、低い部類から高い部類へ増加するのは、毎年見られる譯ではない。

かうなる理由は、未製原料品の種々異つた價格により、それ故に一労働者に對する種々異つた年生産額により區別されてゐる種々な製造業に屬する工場が、不平均な關係に於て、各種の都類に入つてゐる點にある。(註。例へば、一八六六年度には、Aの部類に一七の棒砂糖製造所が入つてゐた。その製造所で一労働者に割當てられる年生産額は、約六千留である。然るに(高級部類に入つた)織物工場に於て一労働者に割當てられる年生産額は、五〇〇留——一、五〇〇留である。)

吾人は一八七九年——一八九〇年度の資料並に一八七九年——一八九〇年——一八九四年——一八九五年度の資料をこれまでのやうに詳細に分解研究することを餘計なことと認める。何故かと云へば、それはたゞ幾分異つた割合關係を端緒として、今迄述べたことを更に反復することになるからである。

最近に至つて『工場監督報告集』に労働者數に據る製造所工場の部類別に就いての資料が擧げられてゐる。左に一九〇三年度のこの資料を掲げる。

工場制作業場の部類	ロシアの六四縣に於て		歐露の五〇縣に於て	
	作業場の數	労働者數	作業場の數	労働者數
労働者二〇人以内のもの	五、七九	六三、六五	四、五三	五、七六
二一—五〇人のもの	五、〇六	一五、〇六	四、二五	一三、一九
五一—一〇〇人のもの	二、七二	一五、七九	一、八九	一三、〇六
一〇一—一五〇人のもの	二、〇九	四三、三六	一、七五	三三、〇〇
一五〇—一〇〇〇人のもの	四〇四	二七、四八	三〇九	二四、四〇
一〇〇〇以上のもの	二、三六	五二、五二	三〇	四七、五四
合 計	一五、八二	一、六四、四六	二二、九七	一、三九、五八

これ等の資料は、これを前に擧げた資料と比較することが出来る。たゞその場合、或る程度の不正確を許さねばならぬ。然しその不正確は、一寸したものである。何れにしても、これ等

の資料は、(労働者九人以上若くは一〇〇人以上)の大工場数と、これ等の工場に於ける労働者数とが、迅速に増加しつつあることを示すものである。またこれ等の大工場数の中の最大の工場に於ける労働者の——従つて生産の——集中も増加生長する譯である。)

吾人は大工場に就いての資料と我國官邊の統計中に於ける全「製造所工場」に就いての資料とを對照させると、一八七九年に大工場が全「製造所工場」の四・四%を成し、製造所工場労働者總數の六六・八%をなし、そして全生産額の五四・八%を集中したのを見る。一八九〇年には、大工場は全「製造所工場」の六・七%を成し、製造所工場全労働者の七一・一%と全生産額の五七・二%とを集中してゐた。一八九四年——一八九五年には大工場は、全「製造所工場」の一〇・一%を成し、製造所工場全労働者の七四%と全生産額の七〇・八%とを集中してゐた。一九〇三年には一〇〇以上の労働者を有する大工場は、歐露に於て製造所工場總數の一七%を成し、製造所工場労働者總數の七六・六%を集中してゐた。(註。「工場案内」と「一覽表」による我國の工場制工業に關する總計的資料は、前の第二節に掲げた通りである。〔「人口調査書」二六七頁に比較)「製造所工場」總數に對する大工場数の割合關係の増加は、先づ第一に我國の統計に於

けるこの「製造所工場」なる概念が、次第に狭められつつあることを示すものであると云ふ點に注目しなければならない。(一九〇三年度の調査報告は、本文中では第二版に於て増訂されてゐる。編輯者)斯く大工場は、即ち主として蒸汽機械附工場は、その數が極めて少ないにも拘らず、労働者數と全「製造所工場」の生産額との優越な、そして益々生長しつつある部分を集中してゐるのである。なほこれ等の改革以後の時代に於ける大工場が、如何に偉大な速力を以て生長しつつあるかと云ふことは、吾人が既に瞥見した通りである。で、こん度は鑛山工業に於ける大企業に關する資料を掲げることとしよう。(註。資料は「一八九〇年度の鑛山工業に關する統計報告集」中にも擧げられてゐるのみならず、「工場案内」に入つてゐる製造所は、除去されてゐる。この除去の爲に、歐露に於ける鑛業労働者の總計は、三萬五千人だけ減少してゐる。

340,000—35,000=305,000))

Year	Number of workers	Total production value
1890	340,000	305,000

歐露に於ける工業上の最大企業。一八九〇年

工場、製造所、 鑛山炭坑及 その他の類別（労働者数 による）	鑛山工業に於て		工場制工業並に鑛山工業に於て	
	企業 数	労働 者 数	企業 数	労働 者 数
A、労働者一〇〇—四九九を 有するもの	三六	八九	一、三六九	三〇、九〇六
B、労働者五〇〇—九九九を 有するもの	三	三八	二五六	一七、一六〇
C、労働者一、〇〇〇及びそ れ以上を有するもの	七	一九、〇九八	一八六	三九、〇三五
合 計	三六〇	一、六一	一、八二二	八二、一〇〇

鑛山工業に於ける大企業労働者の集中は、一層甚だしい。（尤も、製造業に蒸汽動力を應用する企業の割合は低いが。）労働者三十萬五千人の中から二十五萬八千人は、即ち鑛山労働者の八四・五％は、百人またはそれ以上の労働者を有する企業に集中されてゐる。鑛山労働者の殆んど半数は、（二十萬五千人中十四萬五千人は）千人またはそれ以上の労働者を有する少数の最大製造所に占領されてゐる。歐露の製造品工場労働者と鑛業労働者との總數（一八九〇年には五十七萬人）中の四分の三（七四・六％）は、百人またはそれ以上の労働者を有する企業に集中されてゐる。殆んど半数（百十八萬人中五十七萬人）は、五百人またはそれ以上の労働者を有する企業に集中されてゐる。（註。ドイツに於ける、一八九五年の工業登録は、ロシアでは登録されてゐないやうな鑛山建築工業を加へて、千人またはそれ以上の労働者を有する作業場二四八を算へてゐる。それ故にロシアの最大工場は、ドイツの工場より大きい譯である。（第一版に部分の代りに「ドイツには」と云ふ言葉で始まつて、終末まで讀んで行くと、「千人以上の労働者を有する一八五の企業——巨人が、プロシアにある。」と書いてある。これ等の企業中には三十二萬一千人の労働者が占領されてゐた。『ルースキヤ・ヴェードモスチ』紙、一八九七年。第三〇三號。編輯者。）」

此處でエヌ—オン氏の提起した問題に、即ち一八八〇年—一八九〇年の期間に於ける資本主義の發達と「工場民」の生長とが、一八六五年—一八八〇年の期間に比して「遅々としてゐる」と云ふ問題に觸れるのも、滿更餘計なことではあるまいと思ふ。（註。『ルースコエ、

ボガートストゥヴォ」一八九四年。第六號、一〇二頁以下。吾人の擧げた大工場に關する資料は、一八七九年——一八九〇年間の増加の割合が、一八六六年——一八七九年間に比較すると、遙かに少いと云ふことを證明してゐる。エヌ——オン氏はこの素晴らしい發見から出發して、氏独自の異彩ある論理により、狡猾にも『資本主義がその發達の或る境界に達すると、それ自身の内部的市場を縮小する』と云ふ『家内工業概観』に擧げた斷案を『事實が完全に立證してゐる』かの如く結論しようとした。——第一に、『増加が遅々としてゐる』と云ふ點から内部市場の縮小を結論することは、亂暴である。製造所工場労働者數が、住民より速かに増加してゐる（これはエヌ——オン氏自身の資料によるもさうである。即ち一八九〇年までは、二五%も増加してゐる。）と云ふことは、住民が農業から引離されつゝあることを、國內市場が、個人需用品の爲にさへ膨脹しつゝあることを意味するものである。（吾人は生産需用品の爲めの市場に就いてもう言ふまい。）第二に、割合に於て表現されてゐる『増加の減小』は、或る發達程度に達した資本主義國に於て必ず起る筈のものである。何故かと云へば、小さいものは、大きいものより割合に速く生長するからである。資本主義發達の初歩が、特に迅速に進行すると云ふ

事實から、若い國には、古い國を追い越さうとする大勢がより多いと云ふ結論を下すことも出来る。最初の期間に於ける膨脹の割合をその次の期間の標準とすることは、間違ひである。第三に、『増加の減小』と云ふ事實そのものは、エヌ——オン氏の採用した各時期の比較によつて決して證明されるものではない。資本主義的工業の發達は、必ず周期的に行はれるものである。従つて、種々異つた時期を比較するには、或る數年間の資本を取て見る必要がある。（例へば、ツーガン・バラノーフスキイ氏は、その著書『工場』の三〇七頁とその圖解とに於てさうしてゐる。圖解によると、一八七九年、更に一八八〇年並に一八八一年は、特別勃興の年であつた。それは、特別な隆盛勃興の年と衰微の年とが判然と區別される爲である。エヌ——オン氏はそれをせずに、深い誤謬に陥つた。氏は一八八〇年が特別勃興の年であつたことに氣附かなかつたのである。のみならず、エヌ——オン氏は寧ろ反對の斷案を『組み立てること』さへ遠慮しなかつた。『更に注目しなければならぬ點は、中間的な（一八六五年と一八九〇年の間の）一八八〇年が豊年でなかつたことと、従つてこの年に登録された労働者數が、正常の數より少なかつたことである！』（同上。一〇三頁——一〇四頁）と彼は論じてゐる。エヌ——オン

氏は、一八八〇年度の數字を取つたその出版物『工場案内』(第三版)の原文に、一寸と一瞥を加へると——其處に一八八〇年の特長が、工業上の、特に皮革製造業と機械製造業上の『躍進』であつたこと、(四頁)並にこれが戦後製造品に對する需用の多くなつたのと政府の注文が殺倒したのに起因することを讀むことが出来るに相違ない。この躍進の範圍を明瞭に思ひ浮べる爲には、一八七九年度の『工場案内』を繰つて見るだけで十分である。然しながらエヌ——オン氏は、そのロマンチックな理論の利益ならば、如何に事實を曲けても意としないのである。

八 大工業の配置

(生産が最大の作業場に集中されるものであると云ふ問題以外に、大機械工業の特質を評價する所の更に重大な問題は、製造業が工場制工業の各中心地に集中されると云ふ問題と、工場中心地の種々なる形態の問題とである。)遺憾ながら、我國の製造所工場統計は不充分で、而も比較すべからざる材料を提供するのみならず、その材料の整理が甚だ杜撰である。例へば、現時

の出版物に於て、工業の配置は、たゞ各縣別に示されてゐるに過ぎない。(六十年代の立派な出版物に於ては、都市別及び市外地帯別に、工業の配置が示されてゐる。これ等の出版物は、圖面を以て工場制工業の配置を説明してゐる。)然しながら大工業の配置に關する正確な觀念を與へる爲には、各中心地別の資料を採用する必要がある。即ち各都市別に、工場村別に若くは互に近距離に配置されてゐる工場村集團別に資料を採用する必要がある。縣若くは市外地帯は——地域の單位としては餘りに大きい。(註。……『市外地帯(モスクワ縣)の地域別にする』と、製造所と工場との配置は、決して整然たるものではない。最も工業の發達した市外地帯には、工場的作業場が多く密集してゐる爲に、眞の工場中心地と名づけることの出来るやうな土地の外、凡ての工場制工業を殆んど有たない幾多の郡がある。その反對に、一般に製造所と工場との少ない市内地帯には、様々な營業が多少著しい程度に於て發達した地域がある。のみならず、家内工業家の百姓小舎と仕事場と並んでより大きい作業場と大製造業の凡ゆる屬性とが發生した地域がある。『モスクワ。縣統計報告集』衛生の部、第四卷、第一編。モスクワ。一八九〇年。一四二頁)この出版物は、現時の製造工場統計文献中の優れたもので、詳細に編

纂した圖面で、大工業の配置を説明してゐる。工場制工業の配置の完全な圖面の爲には、工場と労働者の數並に生産額による中心地類別だけでは不十分である。③それ故に吾人は、一八七九年並に一八九〇年度の「工場案内」中から、我國の工場制工業が主要中心地に集中してゐることに關する資料を選び出すことを必要と認めた。附録(第三附録)に入つてゐる表の中に、歐露の一〇三の工場中心地に關する資料がある。その中心地は、製造所工場労働者總數の約半數を集中してゐる。(註。表の中に入つてゐるのは、二千留以上の生産額を有する作業場のみと、製粉所では蒸汽力による製粉所だけで、工場外労働者は、除かれてゐる。除かれてゐる處には、彼等が工場労働者中に加へられてゐることが示してある。斯の如き除外例は、*印で示されてゐる。一八七九年に於ける工業の勃興は、これ等の資料の中にも現はれざるを得なかつた。))

表はロシア内に於ける工場中心地の三つの主要タイプを吾人に示してゐる。即ち(一)は都市である。都市は第一の場處に立つてゐて、其處には最も多くの労働者と作業場とが集中されてゐる。この關係に於て特に優秀なのは、大都市である。一八九〇年には各首都は(その郊外を

も入れて)七萬宛の工場労働者を集中し、リガ市は一萬六千人、イワノヴォ・ヴォズネセンスク市は一萬五千人、ボゴロドスク市は一萬人の労働者を集中してゐた。その他の都市は、一萬人以下である。或る大都市に於ける製造工場労働者數の政府筋の調べ(一八九〇年にはオデッサ市の八千六百人、キエフ市の六千人、ドン河畔ロストフ市の五千七百人及び其他)を一見したゞけでも、これ等の數字が滑稽なほど少ないのを十分に納得することが出来る。先に掲げたペテルブルグ市の實例は、斯の如き中心地に於ける工業労働者の總數を得る爲にこれ等の數字を幾倍しなければならぬかと云ふことを示してゐる。都市と並んで指摘せねばならぬのは、郊外地帯である。大都市の郊外は、それ自體屢々著しい工業中心地となつてゐる。然しながら吾人の資料に依ると、斯の如きたゞ一つの中心地を——ペテルブルグの郊外を分離することが出来る。其處では、一八九〇年度に一萬八千九百人の労働者を數へてゐる。吾人の表に入つてゐるモスクワ市外地帯の或る村落も、矢張りそれ自體郊外をなしてゐるのである。

中心地の第二のタイプは——工場村である。この工場村は、モスクワ縣、ウラヂーミル縣及びピコストローマ縣に特に多い。(吾人の表に入つてゐる六三の最も主要な工場村中心地總數中

の四二は、これ等の諸縣にあるものである。これ等の中心地の頭になつてゐるのは、オレホーヴ・ブーエヴと云ふ土地である。(表にはオレホーヴとブーエヴとは別々に挙げられてゐるが、これは同一中心地である。)この土地は、労働者数から云ふと、たゞ首都だけに及ばない、(一八九〇年には、一萬六千八百人)(註。一八七九年には此處では僅かに一萬九百人を算した。明かに種々なる登録方法が應用されたものと見へる。)前記の三縣と、それからヤロスラフ及びトゥヴェーリ兩縣とに於て、工場村中心地の大多數は、最も大きい織物工場(綿絲紡績、木綿織工場、綿布織工場、毛織物工場及び其他)を形造つてゐる。以前はこれ等の村々には、殆んど必ず分配事務所があつた。即ち資本主義的粗工業の中心があつた。この中心は、地方に於ける多數の手織職人を支配してゐた。統計が家内労働者と工場労働者とを混同しないやうな場合には、これ等の中心地の發達に關する資料は、大機械精工業の生長と、この大機械精工業が數千の農民を返在から吸ひ集めて、これ等の農民を工場労働者に變化することを浮刻のやうに示してゐる。更に工場村中心地の大多數を形造つてゐるのは、工業上や金屬業上に於ける大製造所である。(ポプロヴォ村に於けるコローメンスキイ製造所やユゾーフスキイの製造所やアリヤン

スキイ製造所及びその他である。)その中の大多數は、鑛山工業に屬するもので、従つて吾人の表の中には入つてゐない。西南諸縣の各村各地に散在してゐる甘菜製糖所の如きも矢張り相當に大きい工場村中心地を形造つてゐる。吾人は最大の中心地の中の一を——キエフ縣に於けるスメーラと云ふ土地を實例に採つた。

工場中心地の第三のタイプは——『家内工業』村である。この家内工業村に於ける最大作業場は、多く『製造所及び工場』に算へられてゐる。吾人の表の中に於て、斯の如き中心地の標本となつてゐるのは、バヴロヴォ村、ヴォルスマ村、ボゴロドスコエ村、ドゥーボフカ村等である。斯の如き中心地に於ける製造所工場労働者数とこの中心地の全營業民との比較は、既にボゴロドスコエ村に就いて行つた通りである。

吾人の表の中に入つてゐる全中心地を、各中心地に於ける労働者数により、また中心地の種類により(都市か村落かにより)類別すると、次の如き資料が得られる。

歐露に於ける工場制工業の主要中心地

労働者数並に中心地の種類による中心地の類別	一八七九年				一八九〇年			
	中心地の數		製造所及び工場生産額		中心地の數		製造所及び工場生産額	
	都市に於けるもの	村落に於けるもの	計	單位千留者數	都市に於けるもの	村落に於けるもの	計	單位千留者數
一萬人又はそれ以上の労働者を有する中心地	四	一	五	一、三九三	六	一	七	三六、三七二
五千人乃至一萬人の労働者を有する中心地	六	一	七	二七九、三九八	一〇	四	一四	一五、〇二九
一千人乃至五千人の労働者を有する中心地	三	一	四	六五、九七四	一七	四	二一	九〇、二二九
一千人またはそれ以上の労働者を有する中心地の總計	一三	三	一六	一、七四、一七一	三三	一〇	四三	一四、二五五
一千人以下の労働者を有する中心地	三	三	六	一、〇二九	一	三	四	四一、三四六
労働者なき中心地	八	三	一	五九、五四三	六	三	九	九、八九八
總計	二一	六	二七	一、八〇、一七四	三九	一六	五五	一五、一五九
都市(及び郊外)	四〇	三	四三	三、五七〇	四〇	三	四三	四、五七一
村落(市外地及び場末)	一	三	四	一、七四、一七一	一	三	四	一、七四、一七一

この表によつても分る如く、一八七九年には一〇三の中心地に於て労働者が三十五萬六千人も集中され(總數十五萬二千人中から)、一八九〇年には四十五萬一千人(八十七萬六千人中から)も集中されてゐた。それ故に労働者數は、二六・八%も増加した譯である。然るに大工場(二〇〇人またはそれ以上の労働者を有する)に於ては、一般に僅かに二二・三%の増加を見たに過ぎない。製造所工場労働者の總數は、この間に一六・五%も増加した譯である。斯く最大中心地に於ては、労働者の吸収が行はれてゐる。一八七九年には、僅かに一一の中心地が五千人以上の労働者を有つてゐるに過ぎないが、一八九〇年には最早二一の中心地になつた。特に眼に附くのは、労働者五千人乃至一萬人を有する中心地の數が、増加したことである。かう云ふことが起つたのは、二つの原因による。それは、(一)南露(オデッサ市、ドン河畔のロストフ市及びその他)に於ける工場制工業が著しく生長したこと(二)中央諸縣に於ける工場村が生長したこととである。

都市中心地と村落中心地とを比較して見て、村落中心地が一八九〇年には主要中心地に於ける労働者總數の約三分の一(四十五萬一千人中十五萬二千人)を網羅してゐることが分つた。

この關係は、ロシア全體にすると、もつと高くなる筈である。即ち製造所工場労働者の三分の一以上は、都市以外にゐる筈である。實際に有力な都市中心地は、悉く吾人の表の中に入つてゐる。然るに労働者數百人宛を有つてゐる村落中心地は、吾人の舉示した以外に非常に多い。(硝子製造場、煉瓦製造所、酒釀造所、甘菜砂糖製造所及び其他を有する村は、非常に多い。) 鑛業労働者も矢張り主に都市以外に住んでゐる。それ故に歐露の製造所工場労働者及び鑛業労働者總數中の半數以下は(或は半數以上は)都市以外に散在してゐるものと思ふことが出来る。この結論は、重大な意義を有つてゐる。何故かと云へば、この結論は、ロシアに於ける精工業住民がその量に於て都市住民を遙かに超過してゐることを示すからである。(註。一八九七年一月二十八日の人口調査は、この結論を完全に證明した。帝國全體に於ける都市住民は、男女共二七、八二八、三九五人と算定され、商工業住民は、吾人が先に示した通り、二千百七十萬人と算定された。(第二版の註。))

都市中心地と村落中心地とに於ける工場制工業の發達が、比較的迅速であると云ふことに就いての問題に移ると、吾人は村落中心地の方がこの關係に於て絶對に進んでゐるのを見る。一、

〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する都市中心地の數は、舉示した期間には、極めて微々たる増加を示したに過ぎない。(三三二から三三三まで) 四〇〇の都市中心地に於ける労働者數は僅かに一六・二%だけ(二十五萬七千人から二十九萬九千人まで) 増加したに過ぎないが、六三の村落中心地に於ては、五四・七%だけ(九萬八千五百人から十五萬二千五百人までに) 増加した。都市の一中心地に對する労働者の平均數は、僅か六千四百人から七千五百人までに高まつたに過ぎないのに、村落の一中心地に對する労働者の平均數は、二千五百人から二千四百人まで高まつてゐる。それ故に工場制工業は、一見した所では、都市以外に非常な力を以て擴張らうとする傾向を、即ち新工場中心地を造り、これを都市中心地よりも速く進歩發展させ、斯くして資本主義的大企業の世界から遮斷されたかのやうに見へる田舎の僻地の奥深くにまで入つて行かうとする傾向を有つてゐるかのやうである。この非常に重大な事情は、**第一に大機械精工業が如何なる速力で社會經濟的關係を形造りつゝあるかを各人に示すものである。**從來數世紀の間に組織されたものが、今や僅かに數十年間に實現されつゝあるのである。例へば、前章に舉げた「家内工業村」即ちボゴロドスコエ村、バヴロヴ村、キムラ村、ホテイーチ村、

ヴェリーコエ村及びその他の村の如き非農業中心地の形成を、數千の農村住民を一度に精工業部落に吸引する現代の工場を以て新中心地を形造らうとする過程に比較して見る必要がある。(註)「クリヴォイ・ログ市外地帯に於ける住民は、一八八七年から一八九五年までの間に六、〇〇〇人から一七、〇〇〇人に増加した。ドゥネーブル會社の石材製造所に於ては、二一、〇〇〇人から一八、〇〇〇人までに増加した。一八九二年頃にはまだ停車場の建築物だけしかなかったドゥルヂコーフカ停車場附近には、今では六、〇〇〇人の住民が発生した。グダンツェーフスキイ製造所には、約三、五〇〇人の労働者がある。幾多の製造所が建てられたコンスタンチノーフカ停車場附近には、新移民地點が形造られてる。ユーズフカには、二九、〇〇〇の人口を有する都市が形造られた。……ニヂネドネプロフカに於ては、エカテリノスラーフ附近の曠原砂地には、今では幾多の製造所が出来て、六、〇〇〇の人口を有する新移民地が形造られた。マリウーボリの製造所は、一〇、〇〇〇人の新移民を吸収しつつある。各炭坑には、移民中心地が形造られてる。」「財政通報」一八九七年、第五〇號)「ルースキヤ・ヴェードモスチ」(一八九七年十一月二十一日附第三三三號)の報導によれば、バフムート市外地帯自治會々議は、

人口一、〇〇〇人の商業村を市外地に、人口五、〇〇〇人の商業地を都市に改變するやうにとの請願をしてる。……「我國には、商業村や工場村の異例の生長が見られる。……純アメリカ流の速力で發生し、生長する小村は、既に全部で三〇を算へる。ヴォルインツェーヴォ村では、十一月初旬から大規模の金屬品製造所が開設される筈で、其處には二つの熔鑛爐が据えつけられてる。製造所は、鋼鐵製造所とレール製造所とに分れてる。このヴォルインツェーヴォ村には、五千人乃至六千人の住民を算する。彼等はまだ近頃まで殆んど無人の曠野のやうな處に居住してゐたのである。労働住民が流れ込んで來ると同時に、商人や職人や一般に小工業家等が押し寄せて來るのも見られる。彼等は労働住民に凡ゆる商品を容易に、そして迅速に賣り付けることが出來ると考へて來たのである。①社會的分業は、大衝動を受ける。經濟生活の必然的條件となるものは、從來の土着と蟄居の代りに住民の移動である。②工場が田舎へ移轉することは、資本主義が農民の土地共有團の階級的蟄居から起つて來る障碍を打破し、この蟄居から自分の爲に利益を引出すことを示すものである。田舎に於ける工場設置は、少なからず不便を忍んでゐるが、その代り安い労働者によつて保證されてる。百姓を工場の中へ入れず

——工場が百姓に接近して行くのである。(註。「工場は安い職工を探し、それを故郷の田舎に見出す。工場は職工の後を追ふて行かねばならぬ。」「ウラヂーミル縣の工業」第三卷六三頁) 百姓は最も有利な雇傭者を自分の爲に探す完全な自由を(連帶保證と土地共有團脱退に對する壓迫により)有つてゐないが、雇傭者は實に巧みに最も安い労働者を探し出す。第三には、工場村中心地の大多数とその迅速なる生長とは、ロシアの工場が農民の大衆から遮斷されてゐるとか、農民に對する工場の勢力が薄弱であるとか云ふやうな説が、如何に根據のないものであるかと云ふことを示してゐる。で、寧ろその反對に、我國に於ける工場制工業の配置の特質は、工業の影響が極めて廣いことと、その影響が作業場の壁により決して制限されるものでないことを示してゐる。(註。エカテリノスラフ縣バフムートスキイ市外地帯に於ける鑛山工業が、土地の農業制度に影響を與へると云ふことに就いて先に引用した事實(第三章第四節)を想起する。——また特質的なのは、普通農民等が、工場による住民の「腐敗墮落」を訴へたことである。)然しながら他面我國の工場制工業の配置に關する前記の特質は、大機械精工業がこれに従事する住民に與へる優越な行爲を一時阻止する力とならぬ譯に行かない。工場は、僻地

に住む百姓を直ちに労働者に變化すると同時に、或る期間最も安く、發達程度が最も低く、その要求程度が最も少ない「手」を以て自分を保證することが出来るのである。然しながら斯の如き阻止は、勿論決して永續すべきものではない。その阻止は、大機械精工業の影響の現はれてゐる分野を、更に大きく擴張すると云ふ價で贖はれるのである。

九 林業と建築工業との發達

大機械精工業生長の必然的條件の一となつてゐるのは、(大機械精工業生長の最も特質的な同伴者となつてゐるのは、)燃料と建築材料とを提供する工業の發達と、建築工業の發達とである。先づ林業の方から始める。

森林伐採と自分自身需用の材木粗製とは、農民の昔からの仕事となつてゐる。この仕事は、殆んど何處でも農民の作業の一般圈内に入つてゐる。然しながら吾人の所謂林業と云ふのは單に販賣用の製材をすることである。改革以後の時代は、この工業の特別の生長により特質附けられてゐる。即ち材木に對する需用は、個人需用品としても、(都市の膨脹、田舎に於ける非農

業民の増加、農民解放の際に於ける農民の森林喪失）殊に生産需用品としても、迅速に生長した。商業、工業、都會生活、軍事、鐵道及びその他の發達は——これ等の悉くは、材木の需用を著しく増大した。それは人間が材木を要求したのではなく、資本がそれを要求したのである。例へば、工業諸縣に於ける薪の値段は、「一日毎ではなく、一時間毎に」高くなつた。即ち「最近五年間に（一八八一年までに）薪の値段は二倍以上になつた。」「材木の値段は、長足に高まり始めた。」（註。「ウラヂーミル縣の工業」）コストローマ縣に於ては、「工場が薪を喰ふので、薪の値段は、七年間に倍に騰貴した。また木材商品の外國輸出も、一八五六年の五、九四七留から一八八一年の三〇、一五三留及び一八九四年の三九、二〇〇留までに高上した。即ち100:500:650」と云ふ比例で生長したのである。（註。「生産力」。ロシアの對外貿易、三九頁。（一九〇二年の木材輸出——五千五百七十萬留、一九〇三年——六千六百三十萬留。第二版の註。）」歐露に於ける内地水路によつて輸送された木材建築材料とは、一八六六年——一八六八年には、平均一年一億五千六百萬ブードであつたが、（註。「陸軍統計集」四八六——四八七頁）一八八八年——一八九〇年には、一年平均七億百萬ブードに達した。（註。「鐵道及び内地水路の統計的

概観」サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、（交通省發行）四〇頁）即ち、輸送量は四倍以上に増加した譯である。鐵道では、一八八八年——一八九〇年には、平均二億九千萬ブードを輸送したが、（註。同上。二六頁）一八六六年——一八六八年には、多分七千萬ブード以内であつたらしい。（註。鐵道の全貨物の約五分の一に近い。「陸軍統計集」五一頁、五一八—五一九頁）即ち六十年代に於ける木材商品の全輸送量は、約二億二千六百萬ブードであつたが、一八八八年——一八九〇年には、九億九千萬ブードとなり、四倍以上に増加した譯である。斯く改革以後の時代に林業が偉大な生長を遂げたことは、疑ふ餘地がない。

この林業は如何に組織されてゐるであらうか？純資本主義的組織である。（企業家等は、土地所有者から材木を仕入れる。企業家と云ふのは、伐採、製材、搬出その他の爲に労働者を雇ふ「林業家」である。例へば、モスクワ縣に於て、自治會統計は、林業に従事する農民二萬五千人中林業家を僅かに三三七人だけ算へてゐる。（註。「モスクワ縣統計調査集」第七卷第一部第一編。我國では林業に於て、多く主人と労働者が嚴重に區別されてゐない。労働者をも矢張り林業家と名づけてゐる。シヴァートカ縣スロボードスキイ市外地帯に於ては、一二三人の林業家

を算へた。〔小林業家等は、大部分大林業家の請負人となつてゐる。〕大林業家は僅かに十人である。林業に従事する労働者は一八、八六五人で、その賃銀は、労働者一人に對し十九留五十哥宛である。エス・コロレンコ氏は、歐露全體に於て林業に従事してゐる農民が、二百萬人に達すると算へたが、この數は恐らく誇張されてゐるのではあるまいか。何故かと云へば、例へばヴァートカ縣の九市外地帯(一一の中)に於けるが如き約五六、四三〇人の林業労働者を算へ、全コストローマ縣に於ては、約四萬七千人を算へたからである。森林の作業は、最も報酬の悪いものゝ中に屬してゐる。その衛生狀況の如きは、實に嫌惡すべきものである。労働者の健康は、どしどしと破壊される。森林の奥深く投げ込まれた労働者の境遇の如きは、全く孤立無援であつて、工場のこの範圍に於ても、奴役制度や、物品拂賃銀制度トランプシステムなどの「家長的」農民營業の同伴者が、その全力を揮つてゐる。この特質批判を立證する爲に、地方の研究家等の意嚮を幾つか擧げることとする。モスクワの統計家等は、「食糧品を必ず通帳買にしなければならぬ」ことを指摘してゐる。これは林業労働者の賃銀を普通著しく低下するものである。コストローマの林業労働者は、「森林中に各組を作つて、粗末な掘立小舎の中に生活してゐる。小舎の

中には煖爐もなく、居爐裡の焚火で溫度を採つてゐる。食物は酷ひ物で、粗末な煮物と一週間に化石したやうな麵麩とで、空氣は不潔極まるもので……衣服の如き常に半ば濕つてゐる……これ等は皆林業家の健康に悲しむべき影響を與へずには置かない。」「林業を營む」諸郡に於ける人民は、「不潔な諸郡(即ち不潔な營業の盛んな諸郡)に於ける人民より遙かに汚ない」生活をしてゐる。ノヴゴロド縣ティフヴィンスキイ市外地帯に就いては、斯う書いてある。「農業は、収入の根源としては、傍系である。尤も、凡ての政府筋の資料に於て諸君は人民が農業に従事してゐることを發見するだらうけれども……農民がその根本的な必要に對して得る所の凡ては、林業家の許で製材や材木搬出をやることによつて稼ぎ出すのである。然しながら程なく危機が來るに相違ない。即ち五年乃至十年も経つと、材木はもう無くなつて了ふだらう……林業に従事する者は、寧ろ宿無労働者である。彼は林の中の掘立小舎の製材機械の上で冬を過ぐす……が春になると、家内作業に慣れてゐない爲に、もう材木の搬出流送に走る。たゞ收穫期と刈入期にだけ、彼は已むなく土着民となる。」「……農民等は林業家に「永久に經濟的に從屬してゐる。」(註。「家内工業研究委員會の調査」第八卷、一三七三頁、一四七四頁。「ティフヴィンスキ

イ市外地帯では、林業の要求のお蔭で、鍛冶業、皮革業、毛皮業及び一部分製靴業が發達した。鍛冶業は馬口を提供し、皮革業以下のものは、靴や毛皮半外套や手袋などを提供する。『殊に吾人は此處に生産材料の製造(即ち資本主義的經濟に於ける第一部類の生長)が、需用品製造(即ち第二部類)に衝動を與へるものであると云ふことの實例を見るものである。生産が需用の後に随つて行くのではなくして、需用が生産の後に随つて行くのである。』(ヴァーツカの研究者等は、林業作業の爲の雇傭が普通徴税時期に行はれる、経営主から生活用品を借りることは、甚だしく賃銀を低下するものであるなど、言つてゐる。……)『材木伐採者も薪伐採者も、夏期一日約十七哥、馬を有つてゐる者で一日約三十三哥ばかり貰つてゐる。斯の如き些少の支拂は——若しこの營業が極めて非衛生的な情況の下に行はれてゐると云ふことを想つたゞけでも、不十分な勞働報酬である云々』(註。『家内工業研究委員會の調査』第十二卷、三九九—四〇〇、四〇五、四四八頁? オルロフ縣トゥルプチェフスキイ市外地帯に就いての自治會資料集であるが、それには『農業は第二義的意味を有つてゐる。』主なる役目は營業に、特に林業にあると云ふことが到る處に指摘されてゐる。『トゥルプチェフスキイ郡に就いての統計報告集』オリョール市、

一八八七年。)

それ故に林業勞働者等は、それ自體農村プロレタリアートの大なる構成分子の一を成してゐる。このプロレタリアートは、些細な土地の一隅を有ち、その勞働力を最も不利なる條件の下に賣ることを餘儀なくされてゐる。この仕事は、極めて正しからざるもので、非恆久的である。従つて林業勞働者等は、豫備軍の(若くは資本主義的社會に於ける相對的な移民の)一形態を形造つてゐる。理論はこの形態を隠された形態と名づけてゐる。(註。『資本論』1. S. 668) 即ち農村住民の或る部分は、(而も吾人が既に瞥見した通り、少なからざる部分は、)常に斯の如き仕事に取りかゝるつもりでゐなければならない。斯の如き仕事に常に使はれなければならない。これは、資本主義の存在と發達との條件である。林業家の強奪的經濟の下に於て、森林が絶滅されて行くに従つて、(所が、この過程は、非常な速力で進んでゐる。)—薪の代りに石炭を用ふることの必要が、益々痛感されて來る。炭坑業は、益々迅速に發達して來る。この炭坑業一つだけは、大機械精工業に取つての堅固な根據地となり得る。必要な時期に、必要な量を一定の、そして餘り動搖せぬ値段で獲られるやうな安價な燃料があると云ふこと——これ

が現代工場の要求である。林業はこの要求を満す能力を有つてゐない。(註。この明瞭な説明は、『ポーランドの中央に於ける工場制工業研究委員會の報告』(サンクト・ペテルブルグ、一八八八年、第一編)の提供する資料中から得られる。ポーランドに於ける石炭は、モスクワに於けるものより二倍も安い。ポーランドに於て一ブードの紡績に對する燃料の費用は、一六哥——三七哥であるが、モスクワ地方に於ては、五十哥——七三哥である。モスクワ地方に於ける燃料の貯藏は、十二月——二十ヶ月を要するが、ポーランドに於ては、三ヶ月以上を要しない。大部分は、一ヶ月——四ヶ月で十分である。〽それ故に燃料採取業に於て、炭坑業より林業が優勢であることは、資本主義状態の未發達から來るものである。製造業の社會的關係に就いて言へば、この關係に於て林業は、炭坑業に屬してゐる。それは資本主義的粗工業が、大機械精工業に屬してゐるのと略ぼ同様である。林業は、技術上から云ふと、最も幼稚な技術的狀態であつて、原始的方法を以て天然の富源を利用することである。所が、炭坑業に至つては、完全に技術の範圍に移り、廣い範圍に機械を使用せねばならぬ。林業は、生産者を農民のまゝにして置くが、炭坑業は、農民を工場労働者と化して了ふ。林業は、凡ての舊家長的生活組織

に殆んど全く手を觸れず、森林の奥深く投げ込まれた労働者等に最も甚だしい奴役制度を覆ひ被せ、彼等労働者の無智と無援と孤立とに乗じる。所が、炭坑業は、住民の動搖性を作り、大なる精工業中心地を作り、必然的に社會的生產監督を實現する。一言で盡せば、上述の如き兩者の交代は、粗工業と工場工業との交代の如く、進歩的意義を有つものである。(註。エヌ——オン氏は林業と炭坑業との交代問題に觸れると、『概観』二二一、二四三頁)例の通り、ひたすら自分の悲歎を述べ立てる。そして我がロマンチックは、資本主義的炭坑業の背後に、比較するものゝない程甚だしい搾取制度を有つてゐる資本主義的林業があると云ふ些細な事情を見まといと努力してゐる。その代り『労働者數』に就いて彼は誇張したことを言つた! 數百萬人の無職農民に比較すると、六十萬人のイギリスの炭坑夫が何であらうか?—と彼は言つてゐる。(二二一頁)吾人はこれに對し、かう答へる。即ち資本主義により相對的住民關係が形造られたことは、疑ふ餘地がないが、エヌ——オン氏はこの現象と大機械精工業との關係を理解しなかつたのだと。假令一時的變則的であるにしても、様々な作業に従事してゐる農民の數を石炭の採掘にのみ従事してゐる専門家——坑夫の數と比較することは、全く無意味な方法である。エ

ヌ——オン氏が斯の如き方法を用ゆるのは、ロシアに於て工場労働者と鑛山労働者とそれから一般に商工業住民との数が、迅速に生長してゐる事實が、氏の理論を破壊するものであると云ふことを滅却する爲に外ならない。

建築事業も矢張り最初は確かに農民の家庭的作業範囲に入つてゐたし——今もなほ半自然な農民經濟が保存されてゐる程度に於て入り續けてゐる。この建築業が、將來發達し行くに従つて、建築労働者等は、需要者の注文に應じて働く所の専門家なる職人に變化するやうになる。大きな村や餘り大きくない都市に於て、建築工業の斯の如き組織は、現在も著しく發達しつつある。職人は、普通土地との關係を保ち、極めて狭い範圍に於て小需用者の爲に働いてゐる。所が、資本主義が發達するに従つて、この工業組織の保存は、不可能となる。商業、工場、都市、鐵道等の生長は、全く別種の建築を要求するやうになる。さうした別種の建築は、その建築上から云つても、またその大きさから云つても、昔の家長時代の建物とは似てもつかない。新建築は、極めて多種多様の、而も高價な材料を要求する。極めて多種多様の専門を有する多數労働者の協業を要求する。またその落成の爲には、長い時日を要する。これ等の新建築の配置は、

住民の傳統的配置に全然一致してゐない。これ等の新建築は、大都市若くはその郊外に、人のまだ住んでゐない土地の鐵道沿線に建てられる。土地の職人は、出稼労働者に化す。この労働者を雇ふ者は、企業家——請負人である。この請負人は、次第に需用者と製造者との間に押し込まれ、本當の資本主義者となる。資本主義的經濟の躍進的發達、即ち長期間の沈滯時代と「建築熱」（今、一八九八年に經驗しつつあるが如き）の旺盛な時期との交代は、建築事業に於ける資本主義的關係の擴張廣大に大なる刺戟を與へるものである。

これが、ロシアの經濟的文献の資料による前記工業の改革以後の進化である。（註。既に先にも一言したやうに、この進化を實證することは、困難である。何故かと云へば、我國の文献に於ては、建築労働者は一般に多くの場合「職人」と名附けられ、全く誤りながら雇傭労働者をもこの職人の部類に加へてゐるからである。西歐に於ける建築工業組織の斯の如き發達に就いては、例へば、ウェップ著、「英國労働組合運動史」を参照されたし。）この進化は分業の地域的區別に於て、特に浮刻のやうに現はれてゐる。即ちこの進化は、個々の廣い地域を形造ること に於て現はれてゐる。その地域に於ける労働住民は、種々な建築作業に専門化されてゐる。

(註。例へば、ヤロスラフ縣に於て煖爐師、漆喰工及び石工で評判なのは、ダニロフスキイ市外地帯である。のみならず、この市外地帯の各郡は、これ等の職業中の一職工を特に専門的に産出してゐる。塗師はヤロスラフ市外地帯のザ・ヴォルガ地域から特に多く出で、大工はモロークスキイ市外地帯の中部區域から多く出る。『ヤロスラヴリ縣概観』第二部。ヤロスラヴリ市。一八九六年。一三五頁及び其他)かうした地域の専門化は、既に建築作業に對する大市場の組織を、それからこれに關連した資本主義的關係の組織を豫想させる。これを説明する爲に斯の如き一地域に關する資料を引用しよう。ウラヂーミル縣ボクローフスキイ市外地帯は、昔から大工で有名である。その大工は今世紀の初頭には、既に全住民の半數以上となつた。なほ改革以後もその大工業は益々盛大になり續けてゐる。(註。五十年代の終りには、アルグン地域から(アルグン郡は、營業中心地である。)約一萬人の大工を出した。六十年代には、ボクローフスキイ市外地帯に於ける五四八ヶ村の中五〇三ヶ村までは、大工業に従事してゐた。『ウラヂーミル縣の工業』第五の一六一頁)『大工業地帯に於て、斯の如き仲介者及び工場所有者の要素となつてゐるのは、請負人である。』この請負人は、大工組合員中の最も敏捷な者から出

て來るのが普通である。『請負人が十年間に五萬留乃至六萬留の金や更に多くの純利益を儲けたと云ふやうな話は、珍らしくない。或る請負師の如き、三〇〇——五〇〇人の大工を有つてゐる、既に本當の資本主義者になつてゐる。……』この地の農民等が、『大工商買くらる儲かるものはない』と言つてゐるのも無理ではない。所が、現今に於けるこの營業組織の特質的眞髓そのものを浮刻のやうに示すことは、困難である!『大工業は、この地の農民生活の全組織に深い印刻を捺した……農民なる大工は、次第に農業を忘れ、遂には全然それを放棄してしまふ。』都市に於ける生活は、大工に文化の印刻を捺した。即ち大工はその地方の農民より遙かに比較にならぬ程清潔な生活をし、その『智識の進んでゐること』と『その智的發達程度が比較的高いこと』とで、判然農民と區別されてゐる。

歐露に於ける建築労働者の總數は、有たれてゐる斷片的な資料によつて判斷しても、極めて多數でなければならぬ筈である。カルガ縣に於て、建築労働者は、一八九六年には土地の者と出稼中の者とを合して三九、八六〇人を算した。ヤロスラフ縣では、一八九四年——一八九五年に、政府筋の資料によると、出稼中の者二〇、一七〇人を算した。コストローマ縣では、出

稼中の者約三萬九千五百人を算した。ヴァートカ縣の九市外地帯(一一の中)では、出稼中の者約三萬五百人(八十年代に)を算した。トヴェーリ縣の四市外地帯(一二の中)では、土地の者と出稼中の者とを合して、一五、五八五人を算した。ニゼゴード縣ゴルバトーフ市外地帯では、土地の者と出稼中の者とを合して、二、二二一人を算した。リヤザン縣からは、一八七五年——一八七六年の政府筋の資料によると、たゞ大工だけでも一年二萬人以上を出した。オルロフ縣オルロフ市外地帯では、二千人の建築労働者を出した。ボルタワ縣の三市外地帯(一五の中)では、一、四四〇人を算した。サマラ縣ニコラエフスキ市外地帯では、一、三三九人を算した。(註。資料の出所は、前記の註に於て示したものゝ外に、自治會資料集を採用した。ヴ・ヰ氏は『家内工業概観』六一頁)ボルタワ縣、クルルスク縣及びタムボフ縣に於ける一三の市外地帯に關する資料を擧げてゐる。建築労働者は、(ヴ・ヰ氏が彼等を皆『小工業家』に入れてゐるのは、誤りである。)全部で二八、六四四人で、市外地帯の丁年以上の全男子の二、七パーセントから二二・一パーセント迄である。假に平均パーセント(八・八パーセント)を標準とすれば、歐露には $1\frac{1}{3}$ 百萬人の建築労働者がゐなければならぬ筈である。(丁年以上の

男子を千五百萬人と算へて。)所が前記の諸縣は、建築業の最も發達した諸縣と最も發達しない諸縣との中間に位するものである。(これ等の數字によつて判斷すると、歐露に於ける建築労働者數は、一、百萬人以上に達する筈である。(註。一八九七年一月二十八日の人口調査書は、『資料總計集』一九〇五年。)全帝國內に於て建築工業に従事する獨立せる住民(自から生活費を獲る者)を七十一萬七千人と算し、傍らこの工業に従事する農學家四十六萬九千人をこれに加へてゐる。(第二版の註)この數字は、寧ろ最低のものゝ認めなければならない。何故かと云へば、凡ての資料の出所は、建築労働者數が改革以後の時代に於て迅速に増加しつゝあることを證明してゐるからである。(註。火災保險を受け得る建築物の價格に關する資料は、一部分建築工業の範圍を判斷する材料となり得る。一八八四年には、この保險價格は、五百九十六萬八千留であつたが、一八九三年には、七百八十五萬四千留となつた。『生産力』第十二、六五頁)これは年々十八萬八千留も増加してゐる。(建築労働者それ自體は、形造られて來た工業プロレタリアートを成してゐる。この工業プロレタリアートと土地との關係は、現在では既に非常に薄弱になつて來た。(註。例へば、ヤロスラーフ縣に於ては、全住民の一——二〇パーセントは

即ち男子労働者の三〇——五六パーセントは、農業を脱し、脱した者の六八・七パーセントは、一年ぢう土地にゐない。〔ヤロスラーフ縣概観〕而も彼等を矢張り「農民と呼んでゐるのは。公の名稱に過ぎない」ことは明白である。(一一七頁) またこの關係は、年々益々薄弱になりつゝある。

建築労働者は、その境遇から云ふと、林業労働者と截然と異つてゐる。彼等は寧ろ工場労働者に近い。彼等は大都市に於て、即ち大工業の中心地に於て働いてゐる。これ等の中心地は、吾人が既に述べたやうに、著しく彼等の文化的程度を高める。若し衰微して來た林業が、まだ家長的生活組織と提携してゐる資本主義の餘り發達しない形態に於ける特質を現はすものであるとするならば、發達しつゝある建築工業は、資本主義の高い階程の特質を現はし、工業労働者の新階級を形造らしめ、舊い農民社會の深刻な瓦壞の前兆となるものである。

十 工場の附帶物

吾人が工場の附帶物と名づけるものは、雇傭労働と小工業との或る形態である。この形態の

存在は、工場と直接關係してゐる。この形態に屬するものは、先づ(或る部分に於て)林業労働者と建築労働者である。これ等の労働者は、吾人が既に述べた通り、時としては直接工場中心地の工業住民中に入つてゐることもあれば、また時としては、附近の村々の住民に屬してゐることもある。(註。例へば、リヤザン縣では、「一フルドーフスキイ工場の爲に」(一八八四年——一八八五年には、労働者四、八四九人、生産額六百萬留)「一多薪の搬出に従ふ馬匹は、七、〇〇〇頭に達し、その大部分は、エゴリエーフスキイ市外地帯に於ける農民等の所有である。』〔家内工業研究委員會の調査〕第七部、一一一〇頁)更にこの形態に屬するものは、時としては工場所有者自身の採掘する泥炭々田に働いてゐる労働者、(註。泥炭採掘業の統計もまた極めて混沌たるものである。この泥炭採掘業は、普通工場制製造業に屬してゐない(コレビヤーツキイ「調査書」一五頁)が、時としてはこれに屬してゐることもある。例へば、「一覽表」は、ヴラヂーミル縣に於て、泥炭は他の諸縣に於ても獲られるけれども、たゞこの一縣だけに於て、二〇一人の労働者を有する一二の採掘地を算へてゐる。スヴィールスキイによると、〔ウラヂーミル縣による製造所及び工場〕一八九〇年にウラヂーミル縣に於ける泥炭採取に従

事してゐる者は、六、〇三八人であつた。で、ロシアに於て泥炭採取に従事してゐる労働者数は、全部で更に數倍多い筈である。(荷馬車屋、荷役人夫、商品荷造人夫及び一般に所謂黒色労働者などである。彼等は常に工場中心地住民の少なからざる部分を成してゐる。例へば、ペテルブルグに於て、一八九〇年十二月十五日の人口調査は、『日雇人足』『黒色労働者』の組に四四、八一四人(男女共)を登録し、次に運送業に五萬一千人(男女共)を登録した。その中九千五百人は、専門に重い荷物の輸送や積卸に従來してゐる。次に工場に取つての或る補助的作業は、『獨立せる』小工業家等によつて行はれる。工場中心地若くはその附近に於ては、バター製造所及び酒釀造所用の樽製造や、硝子器具を入れる籠編や、鋸又は、錠前を包装する爲の箱製作や、大工道具及び錠前用品の爲の型木製作や、製靴作業場用の鋏製造や、皮革製造所用の『櫛の棒』製作や、工場生産品包装用筵編や、(コストローマ縣及び他の諸縣に於ける。)燐寸用の『菓稈』製造や、(リヤザン縣カールガ縣及び其他の諸縣に於ける)煙草工場用の紙箱粘り附や、(ベテルブルク附近に於ける)酢製造所用の木粉製造や、大工場の要求の結果發達した小紡績工場(ロツヂ市に於ける)に於ける不用紡績絲製造などのやうな營業が、次第に現はれて來る。これ等の

小工業家等は、何れも丁度前記の雇傭労働者の如く、或は工場中心地の工業住民に屬してゐるか、或は附近の村落の半農住民に屬してゐるからである。更に工場は半製品の製造に制限されてゐる場合、時としては小營業を活かして置くことがある。これ等の小營業は、更に半製品の仕上げに従事する。例へば、機械的紡績絲製造業は、家内工業の織物業に刺激を與へた。製鐵所の周圍には、金屬製品及びその他を造る『家内工業家等』が現はれて來る。最後に、資本主義的家内作業は、屢々工場の附帶物となることがある。(註。吾人は『一覽表』によつて、一六の工場を算へた。これ等の工場は何れも、作業場内に千人またはそれ以上の労働者を有つてゐる。作業場は更に工場外に七、八五七人の労働者を有つてゐる。五〇〇人―九九九人の労働者を有する工場は、一四で、その有する工場外労働者は、一、三五一人である。『一覽表』が工場外作業を登録したのは偶然で、無数の白紙を含んでゐる。(工場監督者調査報告集は、一九〇三年度には、六三二の分配事務所と六五、一一五人の労働者とを算へてゐる。これ等の資料は勿論完全なものではないが、それにしても特質的なのは、これ等の事務所の大多數とこの事務所に屬する労働者の大多數とが、工場制工業の中心地に入つてゐることである。(モスクワ地方で

は、事務所五〇三、労働者四九、三四五人。サラトフ縣では、——サルペンカ（譯者註、更紗の一種）製造では——事務所三三三、労働者一〇、〇〇〇人）第二版の註。）大機械精工業時代は、何處の國でも、製菓業の如き工業部門に於て、資本主義的家内作業が、廣い範圍に發達すると云ふ特質を有つてゐる。ロシアに於て斯の如き作業が何のくらの普及してゐるか、如何なる條件を有つてゐるか、粗工業の章にこの作業のことを書くのが、吾人には何故により多く正しいものと思はれるか、と云ふことは、吾人が既に述べた通りである。

工場の附帶物に就いて、幾分でも完全に書かうとすれば、完全な住民の職業統計が必要である。或は工場中心地とその附近との全經濟生活の輪郭的記録が必要である。然しながら吾人の満足せねばならぬ斷片的資料は、工場制工業が他の種類の工業から分離され、工場住民が工場の壁の中で仕事をしない住民から分離されつゝあると云ふ吾人の間に普及された意見が、如何に正しくないかと云ふことを示してゐる。要するに凡ての社會的關係と同様に、工業形態の發達は、幾多の錯綜した過渡的形態と過去への還元の如く思はれる現象との中に於て、極めて徐々に起つて來るものである。例へば、小營業の生長は、（吾人が既に瞥見した通り）資本主義的

粗工業の進歩を表示することが出来る。今になつて吾人の覺つたことであるが、工場は時として小營業を發達せしめ得るものである。『買占人』の爲の作業もまた粗工業と工場との附帶物となる。而して斯の如き現象の意義を正しく評價する爲には、この現象を或る發達階程に於ける工業の全組織と、それからこの發達の根本的傾向とに結びつける必要がある。

十一 工業と農業との完全な分離

工業と農業との完全な分離を行ふものは、たゞ大機械精工業のみである。ロシアの資料は、完全にこの斷案を立證してゐる。この斷案は、『資本論』の著者が他國の爲に下したものであるが、（註。『資本論』一の二、七七九頁——七八〇頁）然し經濟派——民衆派は、普通これを無視してゐる。エヌ——オン氏の如きもその『概観』に於て、機會ある毎に『工業と農業との分離』を論じてゐるが、確實な資料を基礎として、この過程が本來如何に進行してゐるか、この過程が如何に種々なる形態を呈するかと云ふやうなことに就いては、少しも考へ及んでゐない。ヴェ・氏は土地と我國工業労働者との關係を（粗工業に於ける。我が著者は『資本論』の著者の

説に従つてゐるやうな風をするけれども、資本主義の個々の階程を區別する必要を認めてゐない！）指摘すると同時に、この問題に就いて『我國の（著者のイタリック體活字）資本主義製造業が』労働者——耕作者から『意氣地なくも（原文のまゝ）支配されてゐる』と云つて吹聴に及んでゐる。『資本の運命』一一四頁及びその他）獨り『我が國に於て』のみならず、西歐の何れの國に於ても、大機械精工業前の資本主義が、労働者と土地との關係を全然引離して了ふことが出来なかつたと云ふことを、ヴェ・ヴェ氏は聞かなかつたらしいし、また若し聞いたにしても、忘れたのである！最後に、カブルコフ氏は、極く最近大學生等に次の如き驚くべき事實の曲解を捧げた。『西歐に於ては、工場労働は労働者に取つて唯一の生活の路となつてゐるが、我國では比較的僅かの例外を除いて、（原文のまゝ！）労働者は工場労働を副業と認め、より多く土地に引きつけられてゐる。』と。（註。『農業（原文のまゝ！）經濟講義』大學生用。モスクワ市、一八九七年、一三頁。博學な統計學者は、凡ての場合に於ける八五％を（後の本文参照）『比較的僅かの例外』に屬せしめることが出来るとでも思つてゐるのであらうか？）

本問題の事實的研究を提供したのは、モスクワ衛生統計である。これは『工場労働者と農業

との關係』を示したデメンチェフ氏の勞作である。約二萬人の労働者を網羅してゐる系統的に蒐集された資料は、工場労働者中から農村労働に行つた者が、全部で一四・一％であることを示した。然しながら更にもつと重大なことは、前記の勞作に於て極めて詳細に次の如き事實が證明されてゐることである。即ち機械的製造業は、労働者を土地から引離すものであると云ふ事實である。これを立證する爲に引用された幾多の數字の中から、茲には次の如き最も明瞭なものを採用することとする。（註。『統計集』一、二九二頁。『工場』第二版、三六頁）

製造所及び工場	野良仕事へ行く割合
染色場を有する綿布手織工場	七二、五
絹織工場	六三、一
陶器磁器製造所	三一、〇
更紗模様染工場及び經絲分配事務所	三〇、七
羅紗製造所（完全製造）	二〇、四

木綿紡績自働木綿織工場	一三、八
更紗自働織工場及び染色仕上工場	六、二
機械製造所	二、七
機械による更紗染色仕上工場	二、三
	機械織業

吾人は八製造業を手織業と機械織業とに分ち、これを以て著者の表を補足した。第九の製造業、羅紗織業に就いて云へば、羅紗織業は一部分は手織により、一部分は機械織によつて行はれてゐる。其處で、手織工場の織工中野良仕事に出て行く者は、約六三%であるが、自働織機を用ひて働いてゐる織工中には、一人も出て行く者はない。羅紗織工場の中でも機械力を用ひて働いてゐる部分の労働者中から出て行く者は、僅かに三・三%である。「それ故に、工場労働者をして土地との關係を斷たしめる最も主要なる原因は——手工生産が機械生産に移ることである。手工生産工場數は、比較的まだ相當に多いにも拘らず、これ等の工場に於ける労働者數は、機械生産工場に於て働く労働者數に比較すると、全く微々たるものである。その結果吾人

は野良仕事に出て行く労働者中一般に丁年以上の全労働者一四・一%、單に農民階級の丁年労働者一五%と云ふやうな僅かな割合を得るのである。で此處で言つて置くべきことは、モスクワ縣に於ける工場の衛生的研究資料が、次の如き數字を提供したことである。即ち機械的動力を有する工場は、全工場の二二・六%（その中一八・四%は、蒸汽動力を有するもの）で、其處に集中されてゐる労働者は、全労働者數の八〇・七%である。手工工場は、六九・二%で、その労働者は僅かに一六・二%に過ぎない。機械動力を有する二四四の工場に對し、労働者は一二、三〇二人（一工場に對し三七八人）であるが、七四七の手工工場に對しては、労働者は一八、五二〇人（一工場に對し二五人）に過ぎない。一作業場に平均四八八人またはそれ以上の労働者を有する最も大きく、そして大部分機械を据えつけた作業場にロシアの全工場労働者が如何に著しく集中されてゐるか云ふことは、吾人が前にも述べた通りである。デメンチエフ氏は労働者の生れた場處や、土地の労働者と外來労働者との區別や、身分（町人と農民）の區別などが、土地との分離に如何なる影響を與へるものであるかを、詳細に研究した結果、これ等の區別が、悉く手工生産は機械生産に移るものであると云ふ根本的ファクターの影響の爲に消され

て了ふことを知つた。(註。ジバーノフ氏は、その著書「スモレンスク縣に於ける製造所及び工場の衛生的研究」(スモレンスク市發行。一八九四年—一八九六年)に於て、野良仕事に出て行く労働者數を、たゞヤールツェフの精工業一つの爲に略々一〇—一五%と算定した。(第二卷、三〇七、四四五頁。ヤールツェフの精工業に於て、一八九三年—一八九四年には、スモレンスク縣の製造所工場労働者八、八一〇人の中三、一〇六人と算へられてゐた。)この工場に於ける非常備労働者は、男子が二八%(全工場で二九%)で、女子が一八・六%(全工場で二一%。第二卷一六九頁参照)である。言つて置く必要のあるのは、非常備労働者中に算へられてゐるのが、次の如き者であると云ふことである。(一)工場へ一年以内勤めた者、(二)夏期労働に出かける者、(三)「一般に何かの理由により、幾年間か製造所に働くことを中止してゐる者」(第二卷四四五頁)である。」「以前の耕作者が工場労働者に改造されることを如何なる原因が援けたとしても、これ等の専門労働者は、最初は存在してゐなかつた。彼等は農民として算へられてゐるが、それは、たゞ税金だけで村と結びつけられてゐるに過ぎない。この税金は、旅行券を書き換へる時に彼等が納入するものである。何故かと云へば、實際彼等は村に經營事業を有つてゐる

ないし、また誰も彼も普通家を賣り拂つて有つてゐないからである。彼等は土地に對する權利を所謂單なる法律的に保有してゐるだけである。一八八五年—一八八六年に於ける騷動は、多くの工場に於て、これ等の労働者が自から自分を村に關係のない者と思つてゐるばかりか、村の農民達の方も、自分達の同村人の子孫なる彼等を赤の他人なる外來者同様に見てゐることを示した。それ故に吾人はその眼前に既に形造られた労働者階級を見る。彼等労働者は、自分の屋根を有たない。實際に何の所有物をも有つてゐない。彼等は何物にも縛られぬ、その日々の生活をして行く階級である。而もこの階級は、昨日今日形造られたものではない。この階級は、既に工場労働者としての系圖を有し、この階級の小部分の如きは、三代も工場労働者を續けてゐる。(註。「統計集」二九六頁。「工場」四六頁)最後に、工場と農業との分離に關する問題に就いては、最近の製造所工場統計が、興味ある材料を提供してゐる。「製造所工場一覽表」には、(一八九四年—一八九五年の調査報告)一年間に各工場が活動した日數に就いての調査報告が擧げられてゐる。カスベロフ氏はこれ等の資料を民衆派の學說の有利に巧利化さうと急ぎ、「ロシアの工場は一年平均一六五日働く」とか、「我國に於ける工場の三五%は一年に二百

日以内働く。』など、計算した、(註)『ロシアに於ける工業發達の統計的總計』全露經濟協會員ツ
ーガン・バラノーフスキイの報告。この報告が動機となつて起つた協會第三部會議に於ける議
論……サンクト・ペテルブルグ。一八九八年、四一頁)結局、『工場』なる概念の不定の爲に、斯の
如き總數は、労働者の如何なる數が一年に幾日仕事をしたかが示されない以上、殆んど何等の
意義をも有つものでないことが分る。吾人は先に瞥見した通り(第七章に於て)、製造所工場勞
働者總數の約四分の三を占めてゐる(一〇〇人またはそれ以上の労働者を有する)大工場に關す
る『一覽表』中の妥當な資料を總計して見た。その結果一年に於ける労働平均日數が、それを部
類別にすると、左の如くであることが分つた。即ち(A)二四二、(B)二三五、(C)二三七(註。
注意して置くが、Aの部類は一〇〇人——四九九人の労働者を有する工場を網羅するもので、
Bの部類は五〇〇人——九九九人、Cの部類は一、〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する工
場を網羅するものである。)で、大工場全部に取つては、二四四である。若し一労働者の平均勞
働日數を決定するならば、一年の労働日數二五三日となる——これは大工場に於ける労働者の
平均日數である。『一覽表』に於ては、製造業は一二の部門に區別されてゐるが、その中でたゞ

一部門に於てのみ平均労働日數は、下級部類の爲に二〇〇日以内となる。即ちそれは第一一部
門(食糧品製造業)で、(A)一八九、(B)一四八、(C)二八〇となる。この部門のA及びBの部
類に屬する工場に於ては、一一〇、五八八人の労働者が——大工場に於ける労働者總數(六五五、
六七〇人)の一六・二%が働いてゐる。言つて置かねばならぬのは、この部門に全く種類を異
にする製造業が結合されてゐることである。即ち甘菜製糖業と煙草製造業、酒造業と製粉業と
云つた具合である。その他の部門によると、一工場に對する平均労働日數は、左の如くである。
(A)二五九、(B)二七一、(C)二七二。斯く工場が大きい程、一年間の工場従業員日が多い譯で
ある。それ故に歐露に於ける最大工場の全部に關する一般的資料は、モスクワ衛生統計の結論
を立證し、且つ工場が常備工場労働者の階級を造り出すことを證明するものである。

それ故にロシアの工場労働者に關する資料は、『資本論』の次の如き理論を完全に立證する。
即ち大機械精工工業は、工業住民の生活事情の中に、完全な、そして思ひ切つた大變革を惹起し、
工業住民を全く農業と、この農業に關係した家長生活の數世紀間に作られた傳統とから分離し
て了ふと云ふ理論である。然しながら大機械精工工業は、家長的關係と小ブルジョア的關係とを破

壊すると同時に、一面からは農業と工業とに於ける雇傭労働者を接近せしめるやうな事情を作る。即ち第一に、大機械精工業は、最初非農業中心地に於て作り出された商工的生活組織を一般に村落へ移す。第二に、大機械精工業は住民の移動性と、農村労働者並に營業労働者の大雇傭市場とを作る。第三に、大機械精工業は、農業に機械を入れると同時に巧みな工業労働者を村落に引き入れる。而もこの工業労働者の生活水準は、極めて高い。

十二 ロシアの工業に於ける資本主義發達の三階程

こん度は我國の工業に於ける資本主義の發達に關する資料から出て來る幾多の根本的結論の總計算をすることとする。(註。序文に於て指摘した通り、吾人は改革以後の時代に制限されてゐるので、農奴制度の下にある住民の労働を基礎とした工業形態には手を觸れまい。)

この發達の主要な階程は、三つある。即ち小商品製造業(主に農民の小營業)——資本主義的

粗工業——工場(大機械精工業)である。我國には「工場制工業」と「家内工業」との分離に關する見解が廣く行はれてゐるが、事實はこの見解を全く反駁してゐる。その反對に、この兩者の分離は、純人工的のものである。吾人の示した工業形態の關係と繼承とは——極めて直接なものであり、また極めて密接なものである。事實は、小商品製造業の根本的傾向が、資本主義の發達にあること、特に粗工業の組織にあること、更に粗工業が吾人の眼から見ると、非常な速力で大機械精工業に生長しつゝあることを全く明瞭に示してゐる。工業の漸進的形態間の密接な直接關係の最も浮刻的な表現の一となつてゐるのは、次の如き事實らしい。即ち幾多の大工場主及び最大工場主そのものは、小工業家中の小さいもので、凡ゆる階段を経て「國民的製造業」から「資本主義」まで通過した者であると云ふ事實である。サヴワ・モローゾフは農奴で(一八二〇年に身受けされた)牧者で、馭者で、織物労働者で、職工なる家内工業家で、歩いてモスクワへ行き、その商品を買占人に賣つたものであるが、やがて小作業場——分配事務所——工場の所有者となつた。彼は一八六二年に死んだ。その時は彼と彼の多數の息子等の所には、二つの大工場があつた。一八九〇年になると、彼の子孫に屬する四つの工場には、三萬九千人の労働者

が従業してゐた。そして彼等は三千五百萬留に相當する製品を生産してゐる。(註。「ウラヂー
ミル縣の工業」第四の五——七頁。「工場案内」一八九〇年度分。シシマリーの「ニゼゴード
鐵道並にシエスコ・イワノーフスカヤ鐵道地帯に於ける工業管見」サンクト・ペテルブルグ市。
一八九二年、二八——三二頁)ウラヂミール縣の絹織物製造業に於ては、幾多の大工場主は、織
物労働者と織工なる家内工業家とから生長して來たものである。(註。「ウラヂミール縣の工業」
三の七頁以下)イワノーフ・ヴォズネセスク市の最大工場主等(クワレーエフ家、フォーキン家、ズ
ーブコフ家、コクーシキン家、ボブコフ家及びその他)は、家内工業家の出である。(註。シシマ
リョリの五六——六二頁)モスクワ縣に於ける錦織工場は、何れも皆家内工業家の仕事場
であつた。(註。「モスクワ縣統計集第七卷第三部。モスクワ市。一八八三年。二七——二八頁。)
バヴロフスキイ地帯の工場主なるザヴィャロフは、まだ一八六四年に「彼自身が職工ハバーロ
フの所に使はれてゐた單純な労働者であつた時代を生々と追憶した。」(註。ラーブデン、一の
一〇五頁)工場主ワルイバーエフは、小家内工業家であつた。(註。同上、六六頁)コンドラ
トフは家内工業家であつた頃、自分の製品を入れた鞆を持つて、徒歩でバヴロフ村へ行つたも

のである。(註。グリゴリエフ、一の三六頁)工場主アスモローフは、小間物屋の馬追ひであ
つたが、次には小商人となり、小さい煙草製作職場の所有者となり——更に數百萬留の流通資
本を有つた工場の所有者となつた。(註。「歴史的統計概観」第二卷、二七頁)なほかうした例
は、無數である。これ等の場合に於て、または斯の如き場合に於て、經濟派——民衆派が、「人
工的」資本主義の開始と「國民的製造業」の終末とを如何に決定するかを見るのは、興味ある
ことではあるまいか?

前記の三つの根本的工業形態は、先づ機械の構造の差異によりお互に異つてゐる。小商品製
造業の特質は、全然幼稚な手廻し機械である。この機械は、殆んど想起し得ないやうな時代か
ら變りがない。工業家は、依然として農民で、傳統的な原料品加工方法を採用してゐる。粗工
業は、分業を招來する。分業は技術に根本的な改造を加へ、農民を職人に變へ、「部分品製作勞
働者」に變へる。然しながら手工々業は、従前のまゝである。製造業は手工々業を根據として
ゐる爲に、その進歩が極めて遅々たるものであることは、免かれ難い。分業の組織は、混沌た
るもので、農事と同様傳統に従つて分業が行はれてゐる。たゞ大機械精工業のみが、根本的變

化を齎し、手工を絀外に投り出し、新らしい合理的原則の上に製造業を改造し、現代の科學を系統的に製造業に適用する。ロシアに於て資本主義が大機械精工業を組織するまでは、資本主義がまだ大機械精工業を組織しない工業範圍に於ても、吾人は技術の殆んど完全な停滯を見、一世紀も以前に製造業に應用されてゐた手廻し織物機や水力若くは風力製粉所などの使用を見る。その反對に工場に從屬してゐる工業範圍に於て、吾人は完全なる技術的變革と機械製造方法の非常に迅速な進歩とを見る。

吾人は技術的組織の差異に關連して、資本主義發達階程の差異を見る。小商品製造業と粗工業との特質をなしてゐるものは、小作業場の優勢である。そしてこれ等の小作業場中から、僅かな大作業場のみが分類されてゐる。大機械精工業は、小作業場を全然驅逐してしふ。資本主義的關係は、小營業に於ても（雇傭労働を有する職場と商業資本との形に於て）形造られる。然しこの資本主義的關係は、此處ではまだ十分に發達せず、製造業に關與する人物の集團間の截然たる對峙とはならない。此處にはまだ大資本も、廣い範圍に於けるプロレタリアートの階級もない。吾人は粗工業に於て、この兩者が形造られるのを見る。生産資料の所有者と労働者

との間の深淵は、既に甚だしい程度に達してゐる。「富裕な」工業移住地が發生して來る。其處で住民の大多數を成してゐる者は、完全な無産労働者である。莫大な金を有つて原料品の買込みと生産品の賣捌きとに躍起となつてゐる小數の商人——及びその日々の生活をしてゐる多數の部分品製作労働者——これが粗工業の全體的光景である。然し小作業場の豊富と、土地との關係の保存と、製造業及び凡ての生活組織に於ける傳統の保存とは、粗工業の各極端の間に多數の調停要素を造り、これ等の極端の發達を阻止する。所が、大機械精工業に於ては、これ等の支障は、除去される。極端な社會的對峙は、最高の發達を遂げる。資本主義の凡ての暗黒な方面は、一ヶ處に集中されるかのやうである。即ち機械は、周知の如く、労働時間の無限の延長に大なる衝動を與へる。製造業には、女子と子供達とが引き込まれる。失職労働者の豫備軍が形造られる。（工場生産の條件によつても、形造られる筈である。）然し工場が廣大な範圍に於て行ふ労働の統一と工場に働く住民の感情や觀念の改造とは、（殊に、家長的傳統と小ブルジョアの傳統との破壊は、）反動を喚起する。即ち大機械精工業は、先行階級と異つて、生産の計劃的調節と社會的生產監督とを熱心に要求する。（この趨勢の表現は、工場法の制定であ

る。

生産發達の性質そのものは、資本主義の種々なる階程に於て變化する。この生産發達は、小營業に於ては、農民經濟の發達に隨つて進む。市場は極端に狭い。生産者から消費者までの距離は遠くない。微々たる生産量は、餘り動搖のない地方的需用を容易に満たすことが出来る。従つて最大の安定が、この階程に於ける工業の特質を成してゐる。然しこの安定は技術の停滯と中世紀的傳統の凡ゆる遺物に蔽はれた家長的社會關係の保存とに等しい。粗工業は大なる市場を相手に活動する。時としては全國民を相手に働く。これに應じて生産も資本主義に固有してゐる不安定の性質を帯びる。そしてこの不安定は、工場に至つて、最大の勢力に達する。大機械精工業の發達は、躍進によらなければ、即ち隆盛期と危機との週期的交代によらなければ、行はれるものではない。小生産者等の破滅は、大なる程度に於て工場のこの躍進的生長によつて強められる。労働者等は、隆興時代には或る多數工場に引きつけられたり、或は突き放されたりする。大機械精工業の存在と發達との條件となるものは、失職者と何んな仕事にでも取りかゝらうとする人々から成る一大豫備軍が編成されることである。この豫備軍か、農民

社會の如何なる等級から募集されるものであるかと云ふことは、吾人が既に第二章に於て示した通りであるが、次の章には、最も主要なる種類の仕事をも指摘した。資本はこの仕事の爲にこれ等の豫備軍を準備して置くのである。大機械精工業の『不安定』は、常に或る人々の反動的不平を呼び起したし、また呼び起しつゝある。彼等は小生産者の眼で事物を見續け、たゞこの『不安定』のみが、生産方法と一切の社會的關係との迅速な改造によつて、從來の停滯を變へたものであることを忘れてゐるのである。

この改造の一表現となつてゐるのは、工業と農業との分離と、兎角農村經濟に引かれ勝ちな農奴制度や家長制度の傳統からの工業上に於ける社會關係解放とである。工業家は小商品生産に於て、まだすつかり農民から脱出してゐない。彼は多くの場合に於て、耕作者として残つてゐる。そして小農業とのこの關係は、極めて深刻なものであるから、吾人は工業及び農業に於て小生産者等が併行互壞して行く興味ある法則を見る。小ブルジョアと雇傭労働者との分離は、國民經濟の二つの範圍に於て、相提携して進み、斯くして互解の兩極に工業家と農業家との分裂を準備するのである。この分裂は、粗工業に於て更に甚だしい。農業に従事しない幾多